

夢は地元の
9年ぶりに再会した内容だったので
ならず... 手紙の交換 家で過ごしている
手ほど正夢になってしまひますお願ひします。
工場...とかある所の現実」
ある種色々濃く漂って
当時心臓死んで 音楽に助けられ ほかほかとネっか
音楽を聴くことが大好き 手紙と音とをどちらも好きです。こんど
好きな音楽、たしは何か? 何かよく通知 齋藤春佳様 拝せん
元々人とお喋りすることが好き
返信がないにしろ、その送った手紙による何か心の
きい、手紙の起きこい、音の響きを聞いた時は7分
あと思て、
合休み中だ。たかと思つたのですが、
「とどく」展の準備ができています。2021.8/1
「とどく」展の準備ができています。2021.8/1
「とどく」展の準備ができています。2021.8/1



わたしからあなたへ、あなたからわたしへ

レター／アート／プロジェクト

「とどく」展

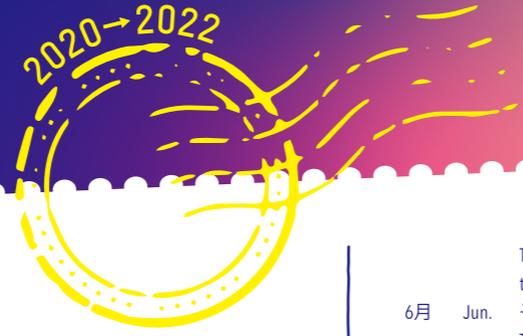
From me to you, from you to me.!!

Letter / Art / Project "TODOKU" Exhibition

好きであなたが Love 田中真由美 一番興奮しいです(笑)

レター /アート/プロジェクト「とどく」の流れ

Letter / Art / Project "TODOKU" Timeline



2020

- 5月 May 小川さん(ディレクター)と初顔合わせ
First meeting with OGAWA Nozomu(director)
- 6月 Jun. 企画決定
Fixed the program
- 8月 Aug. 作家検討 3名の作家が決定
Fixed the 3 artists to participate
- 9月 Sep. 各作家対象者決定～ 対象者、施設の絞り込み
Fixed the counterpart of each artist; fixed the participants and institutions
- 10月 Oct. 子供の家、ピアサポートネットしぶや コンタクト
Contacted KODOMONOIE & Peer Support Net Shibuya
- 11月 Nov. ピアサポートネットしぶや、子供の家 訪問
Visited Peer Support Net Shibuya and KODOMONOIE
- 12月 Dec. 橋本さん顔合わせ、ろうの参加者6名決定、
子供の家 参加者2名決定、
キックオフトーク収録・公開
First meeting with Prof.HASHIMOTO
Fixed the 6 deaf participants
Fixed the 2 participants from KODOMONOIE
Held and released the kick-off talk session

2021

- 1月 Jan. 手紙のやりとりスタート(齋藤さん・田中さん)
齋藤さん順調なスタートを切る
SAITO Haruka and TANAKA Yoshiki started letter exchanges
SAITO made a good start
- 2月 Feb. 大木さん、ピアサポートネットしぶやに映像を送る
OKI Hiroyuki sent a video letter to Peer Support Net Shibuya
- 3月 Mar. 田中さん返事待つ
TANAKA waited for a reply
- 4月 Apr. ブログ開設 第1回目 公開
大木さんに動画がとどく/田中さんに手紙がとどく
Started the official blog and made the first post
A video reached Oki, A letter reached TANAKA
- 5月 May 田中さん参加者を募るため壁新聞を子供の家に送る

- 6月 Jun. TANAKA sent a wall newspaper
to KODOMONOIE to get participants
子供の家 壁新聞掲示開始
The wall newspaper was posted in KODOMONOIE
- 7月 Jul. 2022年1月にかけて、クロストーク収録・公開
Held and released cross talk sessions to January 2022
- 8月 Aug. 齋藤さん、やりとり中のHさんのダンスを見に行く
子供の家 参加者2名増える
SAITO went to see a dance performance of H san,
who has been exchanging letters with her.
2 more participants added from KODOMONOIE
- 10月 Oct. ピアサポートネットしぶや 大木さん鍋囲む
OKI enjoyed a nabe (Japanese hot pot) party at Peer Support Net Shibuya

2022

- 3月 Mar. 子供の家 参加者1名増える
1 more participant added from KODOMONOIE
- 4月 Apr. 子供の家 訪問
田中さん、やりとり中の子供2名を木陰から見守る
Visited KODOMONOIE
TANAKA watched 2 child participants
from under the shade of a tree
- 5月 May ピアサポートネットしぶや 大木さん鍋囲む2
OKI enjoyed the 2nd nabe (Japanese hot pot) party
with at Peer Support Net Shibuya
- 6月 Jun. 子供の家 参加者2名増える
アトリエビジット収録(齋藤さん・田中さん)
2 more participants joined the project from KODOMONOIE
Recorded "Atelier Visit" (SAITO and TANAKA)
- 7月 Jul. アトリエビジット収録(大木さん)
Recorded "Atelier Visit" (OKI)
- 8月 Aug. 田中さんに子供の家の参加者から暑中見舞いがとどく
展覧会準備
Summer greeting cards arrived at TANAKA
from children at KODOMONOIE
Preparation for the exhibition
- 9月 Sep. ピアサポートネットしぶや 大木さん鍋囲む3
大木さん、ピアサポートネットしぶやのサポーター会議に出席する
OKI enjoyed the 3rd nabe (Japanese hot pot) party at Peer Support Net Shibuya
OKI attended a supporter meeting of Peer Support Net Shibuya.

- 10月 Oct. 「とどく」展 開幕!
田中さん、子供の家で出張ワークショップ。やりとり相手の子ども達3名と会う
田中さん、やりとり相手の主催行事の「ぬりえコンテスト」に参加する
ゲストを招いたトーク(伊藤さん)
ギャラリートークwith Artist & べちゃくちゃタイム(大木さん&相川さん)
Workshop by TANAKA at KODOMONOIE. He met 3 children who were his pen pals.
TANAKA participated in the "Coloring picture contest" hosted by his pen pals.
Talk session with guest speakers (ITO-SAN)
Gallery talk with Artists (OKI & AIKAWA-SAN)

- 11月 Nov. ゲストを招いたトーク(樺澤さん)
齋藤さん、やりとり相手とトークで初顔合わせ!
田中さんのやりとり相手が一人で田中さんの舞台公演時に会いに来る
大木さんと齋藤さん、作品コラボを始める
やりとり相手の子ども達2名が田中さんの舞台作品を観に来る
田中さん「ぬりえコンテスト」の発表が、、、はたして結果は?
ギャラリートークwith Artist & べちゃくちゃタイム(田中さん&角能さん)
ピアサポートネットしぶやの石川さんとAさんが大木さんの作品を観に来る
ピアサポートネットしぶや大木さん、鍋囲む4
Talk session with guest speakers (KABASAWA-SAN)
SAITO met her pen pals for the first time at the talk session!
One of TANAKA's pen pals came to meet him alone at his play.
OKI and SAITO started collaboration in making artwork.
2 of TANAKA's pen pals came to see his play.
The results of the "Coloring picture contest" are going to be announced... Would TANAKA win?
Gallery talk with Artists (TANAKA & KADONO-SAN)
ISHIKAWA-SAN and A-SAN from Peer Support Net Shibuya came to see OKI's works.
OKI enjoyed the 4th nabe (Japanese hot pot) party at Peer Support Net Shibuya

- 12月 Dec. ギャラリートークwith Artist & べちゃくちゃタイム(齋藤さん&橋本さん)
齋藤さんのトークにやりとり相手5名が参加して、会う
「とどく」展 閉幕!
レター /アート/プロジェクト「とどく」やりとりは続く、、、
Gallery talk with Artists (SAITO & HASHIMOTO-SAN)
5 of SAITO's pen pals joined her talk and met her.
The closing of the "TODOKU" exhibition!
— Letter / Art / Project "TODOKU" Communication will continue...

2023

- 3月 Mar. プロジェクト終了
The project will be finished.

アリエソ、思ながら作った「1」
手紙の速度は、その「距離」の姿が見えてきたら
おもしろそうだなと考えています。

上手く書けないですが...
このゼリゼリの先には
推しの振り付けは手話を取り入れていますのが多く、
視覚的にも伝わるように考えています。

藤原春佳さま
誰も振りかもし
くっつかうたら、
どうして?

最近大あたり手紙を
出すようになったので、
文通もその機会が減りました。

想像つかないけれど
想像しています。 じゃ、私も手紙でお会いしよう!!!
手紙と手文字 「2次元であるこの自体
元々とお喋りするのが好き

はじめまして 田中義樹
田中義樹 ともうします!

学校生活は
そこに書くとなると、
何かおすすしですか?
何と言ったらいいか?

2021.1.30
藤原春佳
そこまじり心が強く動く
対象がある事自体が、
この時代に生きていること
祝福してくれることだよねー

応援してます。昔から好きだったのに関心は熱くはなってしまう癖
最近大あたり手紙を
出すようになったので、
文通もその機会が減りました。

感情と揺らぐようなエピソード
泣き止ませる料理 マンガと小説が
大好きな女の子です。

マンガは好きですか



「とびく」という
手紙を交換する
プロジェクト
今年の10月から
展覧会をします。



どんな中学生生活を
かかっていますか?
他に加入する部活がなかったの
剣道部に入っていました。

たぐいのない手紙

まがは僕の
自己紹介をします。いつもやりとりが出来ない時代は
文通がかなりゆくりなやりとりを
していたよ

図書館のポスターを

白やきさんからお手紙が着いて、
その手紙を食いちろう黒やきさん

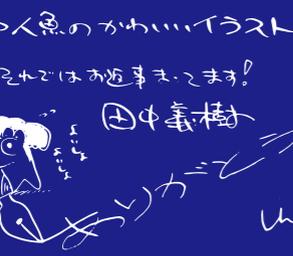
ゆくりでもいいのよ
この文通が「つづくと
自分も絵を巻いて
一緒にやりたいよ!

手紙の交換
はじめまして
最近にしていることは何でした?

音楽に助けられ
音響を聴くことが大好き
藤原春佳様
こんにちは!

冬が終わり春の季節がやってきました。
まがは最初の手紙が
共感お返し

注虫オバケや人魚のかわいらしいイラスト



くまの絵を
描いてほしい
ありがとうございます!
これではお返事できません!

教えるほうがいいです!
それはお返事待ちです!
クッキングが
運動部にすることがよかったです。
かりにゆうづらしてきます。

ええかっこです
前手紙を頂いた時は9分
合休み中だったかと思うので少し
なんか書くスピードより気持ちがいいかな

2021.1.14
田中 よしきさんへ
今見ているドラマありますか!

眼を閉じた夜の暗闇で

自分がどこにいるのか
宇宙にいるような感覚になる話
どんな風に素敵なのか
教えてくださいな...かしら

明日(8/10)の
最高気温は
37℃! うれしいです...!

「自分を見ようという行為」
他人の眼を通して
視るしかない
「世界を見るという行為」
この感覚は「近」の感覚と上手いと思います。

海外旅行行きたいのに...
「世界を見るという行為」
この感覚は「近」の感覚と上手いと思います。

私の初夢は地元の
友達と9年ぶりに再会した内容だったので
正夢にならず...
嫌な夢ほど正夢になってしまいます(笑)



菓がもの「福島屋」さん
おすすめですよ。

藤原春佳さま
どんな学生生活だったんだろう...

「泣くははらやれ」
聞いています!!!
かわいいですね!!!
今一番興奮しています(笑)

ダンス公演おつかいまでです!
8月1日見に行きたいことが
手紙返信がないにしろ、その送った手紙による何か心の
働きは、手紙というものの独自の形は、走り回っている人じゃない
かなあと思っています。

手紙を書く時紙をかくことかた「楽しい」感じ
あんなに
7か月前に通知
今154月24日 18:29です。

くろやきさんからお手紙が着いて、
その手紙を 読まおに 食いちろう. しんやきさん

存置くと 起るの は 決める こと (笑)

今一番興奮しています(笑)

春休みにね Love
田中義樹

手紙を書く時紙をかくことかた「楽しい」感じ
あんなに
7か月前に通知
今154月24日 18:29です。



わたしからあなたへ、あなたからわたしへ
レター／アート／プロジェクト

「とどく」展

From me to you, from you to me.
Letter / Art / Project
"TODOKU" Exhibition



ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、展覧会「とどく」を開催いたします。

本展は、「レター/アート/プロジェクト『とどく』」の成果発表展です。このプロジェクトは、さまざまな背景を有する人々がアートを通じて交流し、相互理解を深めることを目的とする当ギャラリーの事業として、Art Center Ongoing 代表の小川 希をディレクター/キュレーターとして招聘し、新型コロナウイルス感染症による新しい日常の中、人との交流にオンラインツールが発展する中で、あえて手紙やビデオレターを用いたやりとりを開始しました。

現代アートの領域で活躍する作家、大木裕之、齋藤春佳、田中義樹は、NPO 法人ピアサポートネットしぶや、橋本一郎（亜細亜大学特任准教授）、社会福祉法人子供の家の協力によって、「ひきこもり」等の生きづらさを抱えている方々、ろうの学生（若者）達、児童養護施設の子供達とのやりとりを重ね、プロジェクトを進めてきました。

小川 希をホストに作家やゲストを招いてのトーク、作家のブログを通じて、文字から想像する相手のテンションやキャラクター、手紙が届くまでの待っている時間、届かないもどかしさ、さまざまな感情や想いを紹介してきました。

本プロジェクトは、現在も進行中ではありますが（2023年3月までプロジェクトは続きます）、本展では2020年から現在までの総括として、3名の作家の視点を通して見えてきたものをご来場のみなさまにおとどけします。

最後になりましたが、作品を制作、出品くださいました作家の皆様、本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

Foreword

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Tokyo, is pleased to announce that it is going to hold the exhibition "TODOKU".

This is the exhibition as the accomplishment of Letter / Art / Project "TODOKU". This project was carried out by this gallery, which aims at interaction of people with different backgrounds through art and understanding each other. Inviting Ogawa Nozomu, the director at Art Center Ongoing, as the director and the curator, project participants started communication with letters or video letters, while people are living a new life with the coronavirus and online communication tools are widely used.

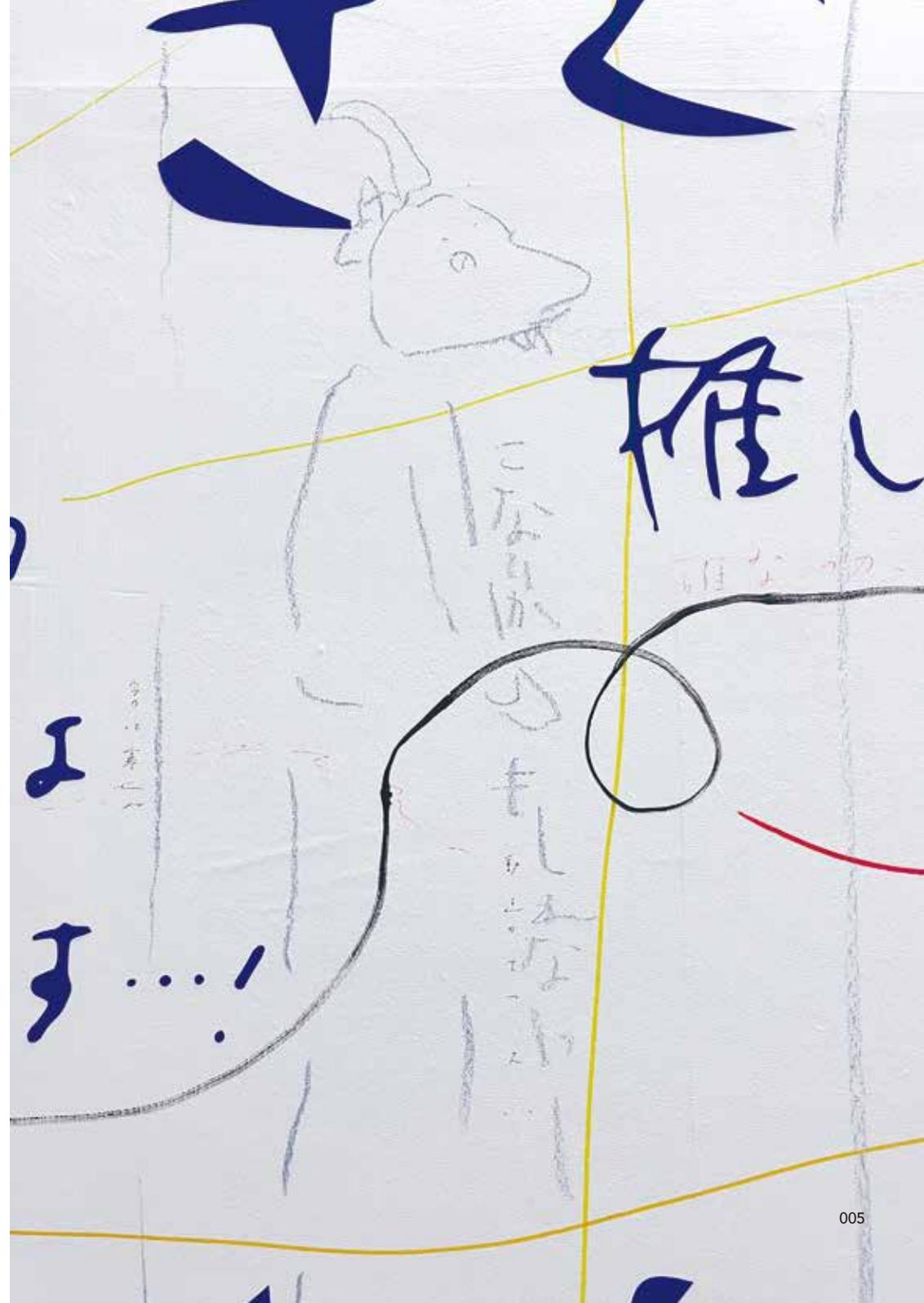
This project had artists Oki Hiroyuki, Saito Haruka, and Tanaka Yoshiki, who are active in the field of contemporary art. They have been communicating with people who are shut-in and have difficulties in their life, deaf students and young people, and children at a children's nursing home. The communications were supported by the non-profit organization "Peer Support Net Shibuya", Hashimoto Ichiro (Project Associate Professor at Asia University) and the social welfare corporation "KODOMONOIE".

Through talk sessions with Ogawa Nozomu, artists and other guests, and artists' blog, we introduced many things such as the feeling and personality of the person to exchange letters with they imagine from the letter, time to wait for a reply, impatience with a letter not arriving, and many other feelings and emotions. Although this project is still ongoing now (until March 2023), in this exhibition, we are happy to present to you what we found from 2020 to now in view of the 3 artists.

Last but not least, we would like to sincerely thank the artists who made the artwork, and every person who gave us valuable advice and support to hold this exhibition.

目次 Index

それが、とどく、とき 小川 希	006
Project Overview	
レター/アート/プロジェクト「とどく」 相関図	008
Correlation chart of Letter /Art /Project "TODOKU"	
キックオフトーク	010
Kickoff Talk	
クロストーク	023
Cross Talk	
アトリエビジット	038
Atelier Visit	
ブログ	051
Blog	
展覧会風景	060
Exhibition View	
作品について	084
Introduction from the curator	
作品リスト	092
Work List	
ルポのパピヨンと本田 レターアートプロジェクト とどくでなごむ パピヨン本田	098
Manga	
ゲストを招いたトーク「あなたにとどく、いいあんばい」	100
Talk session "Anata Ni Todoku, Ii Anbai"	
とどかない 永井玲衣	104
Review	
あなたからわたしへ	108
From you to me	
わたしからあなたへ	115
From me to you	
ふつうで、単純で、大切なことを、あなたに 小川 希	122
Curatorial Essay	
「とどく」を振り返って 竹野如花	130
Essay	
ディレクター/キュレーター・作家 プロフィール	138
Director/Curator & Artists' Biographies	
関連イベント	140
Related Events	
謝辞	142
Acknowledgments	



それが、とどく、とき

レター / アート / プロジェクト「とどく」は、手紙やはがきやビデオレターなど、直接顔を合わせる事のないメディアを通じ、「今ここにいるわたし」と「今ここにいないあなた」がつながるアートプロジェクトです。2020年よりスタートし、現代アートの分野で活躍する3名のアーティストが、多様な背景を持つ人々と協働しながら、コミュニケーションの様々な形を模索してきました。

新型コロナウイルスの感染拡大以降、私達は、それ以前とは異なる新たな日常を生きています。他者との交流は、SNSやZoomなどのオンラインツールが頻繁に使用され、簡単に遠方の人とつながることが当たり前となりました。しかし、「とどく」では、そうした即時のやりとりをあえて避け、代わりに手紙やビデオレターといった時間を必要とする交流の手段を用いることで、そこから生まれる想像力によって、お互いが生きる異なる時間や場所や環境をつなぎ合わせようとする試みでした。

「とどく」展は、3年間にわたって展開された本プロジェクトを総括する展覧会です。時や距離そしてそれぞれの境遇を超え、互いの異なる想い=アートが「とどく」、その邂逅の瞬間をお楽しみください。そして、速さや便利さを追求することで現代社会が見失いつつある、異なる境遇を生きる他者に対する想像、理解、そして共感への手がかりが、ご覧いただくみなさまにも、ゆっくりではあっても、いつかどこかで「とどく」ことを願って。

ディレクター / キュレーター
小川 希 (Art Center Ongoing 代表)

When it arrives



Letter / Art / Project "TODOKU" is an art project which connects "me (here and now)" and "you (not here and now)" through indirect media such as letters, postcards, or video letters. It started in 2020, and the 3 artists active in the field of contemporary art have explored many ways of communication while working together with people from different backgrounds.

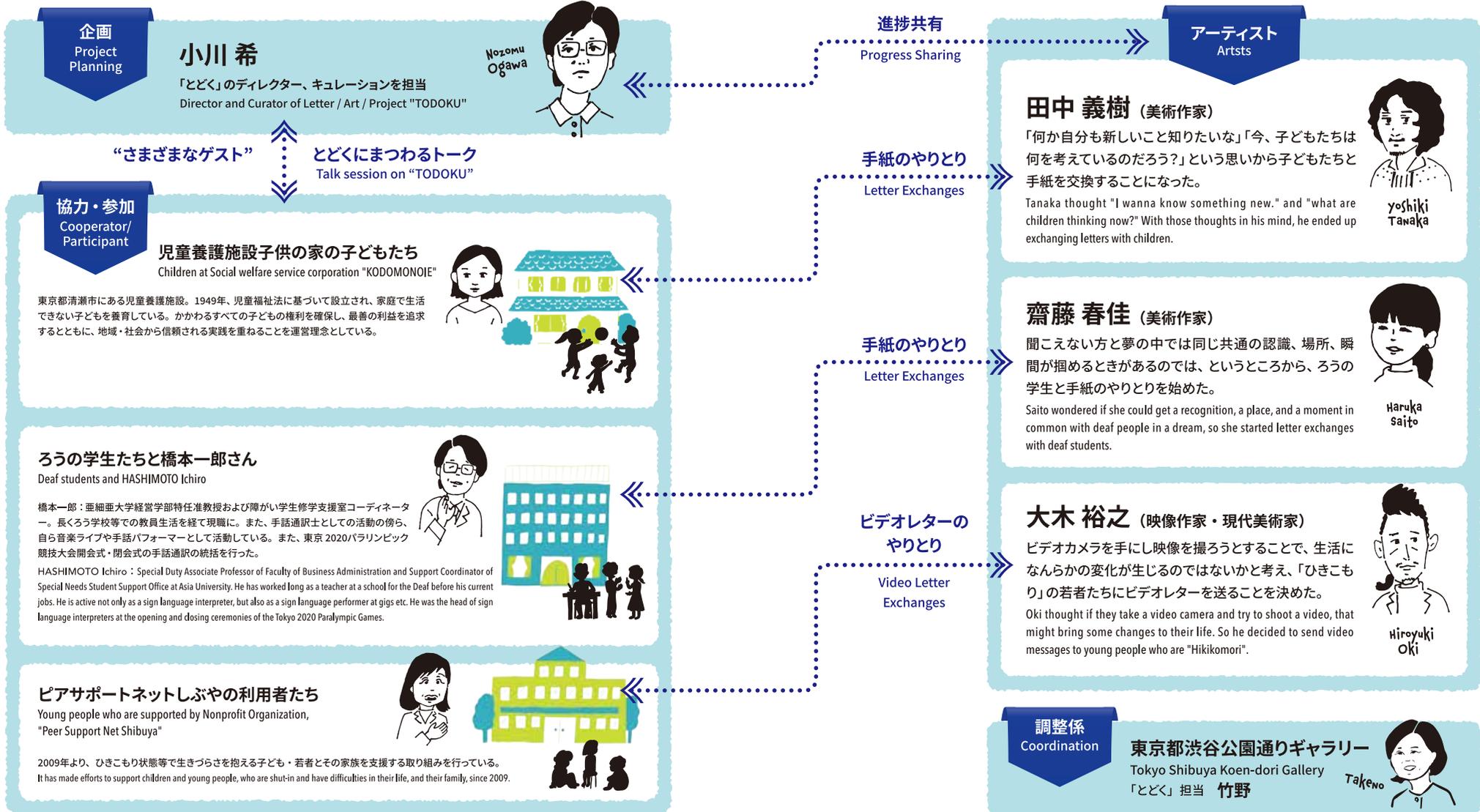
After the coronavirus has been widely spread, we live our life which is new and different from what it used to be. Online tools like SNSs and Zoom are heavily used in interaction with other people, and it became common to get connected to people who live far away. But, in "TODOKU", we consciously avoided those kinds of real-time communication, and it was an experiment to connect time, place, and environment in which each individual lives to each other, by imagination generated from using letters and video letters, which requires some time for interaction.

The "TODOKU" exhibition is the special exhibition to summarize this 3-year project. Let us show you the moment of encounter in which each individual's thought, which is art, reaches each other beyond time, distance, and each circumstance. By seeking for speed and convenience, the modern society is losing imagination, understanding, and empathy to others living in a different circumstance. We hope that some hints for those actions will reach you who see the exhibition someday and somewhere, even if slowly.

Director / Curator
OGAWA Nozomu (Director of Art Center Ongoing)

レター / アート / プロジェクト「とどく」 相関図

Correlation chart of Letter / Art / Project "TODOKU"



キックオフトーク

KICK OFF TALK



2020年12月に開催した、本プロジェクトの初めてのトークイベント。参加作家である、田中義樹、齋藤春佳、大木裕之が登壇し、これまでの活動を紹介するとともに、「とどく」において展開しようとするプランについて初めて語った。各回のゲストとして、田中、齋藤、大木、それぞれがコラボレーションを行っていくこととなる、児童養護施設子供の家の角能秀美さん、ろうの学生をつないでいただいた亜細亜大学の橋本一郎さん、NPO法人ピアサポートネットしづやの相川良子さんをお招きした。本トークは、こうした協力者と作家との初めての顔合わせにもなっており、作家達がどのような人物で、これまでどんな制作をしてきたかを知ってもらおうと同時に、プロジェクトがこれからどのように展開していくのか、その可能性について、当事者をよく知る方々と共に探る機会となる。

[2020年12月収録・配信]

出演 Vol.1 田中義樹（美術作家）、角能秀美（児童養護施設子供の家）
Vol.2 齋藤春佳（美術作家）、橋本一郎（亜細亜大学 客員准教授*）*2020年12月当時
Vol.3 大木裕之（映像作家・現代美術家）、
相川良子（NPO法人ピアサポートネットしづや 理事長）
司会・進行 Vol.1-3 小川希（ディレクター／キュレーター）

キックオフトーク Vol.1

アートが引き出す「自立する力」

田中義樹（現代美術作家）

角能秀美（児童養護施設子供の家）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



角能秀美さん（左）と田中義樹

小川 田中さんは彫刻科出身なんですけど、いろいろなメディアを使った表現を発表しています。これまでの活動について話していただけますか。

田中 自分は三重県出身です。文化的なことがとても好きだったんですけど、そういうものに全然アクセスできなくて。手軽に手に入るのが漫画だったので、漫画家になりたかったんです。そこから「美術手帖」とか、近所の美術好きのおっさんとかにアクセスして行って、現代美術の方に行きました。自分の活動には、一本筋が通って続けているコンセプトとかが全然ないんですよ。これ、すごく悩みなんです。高校生の時から漫画家になりたいとか、いろいろあって、でも続かなかった。そのなかで現代美術だけは「なんでもやっていい」フィールドだったんで、自分に向いてたんです。自分は美術とかをモチーフにして、お笑い芸人もやってるんです。美術館とかギャラリーで「美術家でお笑いやってる奴がいるぞ」という感じで、隙間

産業的に入り込めるんじゃないかと思って、「そんなくズ」っていうコンビを組んでいます。

小川 (お笑いのように) 自分自身が前面に出ることもよくやってるんですね。

田中 作品のそばに自分がないと不安になっちゃうんで。子ども達といっしょにやったワークショップの作品では、公共施設の展示室の中に自分の部屋にあるもの全部持ってきたんです。そこに子ども達が遊びに来て、自分がずっといるっていう、それだけの作品なんですけど、1ヶ月やって3千人ぐらい来たんです。

小川 今回協力していただく児童養護施設「子供の家」のお話を、角能さんからうかがいたと思います。まずは田中さんの活動について感想はいかがですか。

角能 頭のどこからこういう発想が出てくるんだろうな、と単純に思いました(笑)。子ども達も秘密基地みたいなものをつくるの好きじゃないですか。自分の作品に囲まれるのって、そういう感覚に近いんですか。

田中 そういう感覚と、それと真逆の感覚がずっと入れ替わり立ち替わりあるんです。「やったあー！嬉しいー！」っていう気持ちと、「なんだこれ」みたいなのと。美術をやる人って、視野が狭くなる目と、ものすごく遠くから見る目と、2つないとダメだと思うんです。

小川 「子供の家」はどのような施設ですか。

角能 児童養護施設は、何らかの事情があって家庭で暮らせないお子さんを預かっています。「子供の家」には約50人が生活しています。児童養護施設の目的は子ども達の生活を支えることですが、施設を退所した後の生活に向けて自立支援と呼ばれるいろんな取り組みをしています。自立とは、自分で自分の生き方や生活を考えて決めていける力のことなのかな、と。そうすると、自分で何かを選択していく力を育むもののひとつに、アートとか自分を表現することがあると思っていて。そんな意味も込めて子ども達がアートに触れる機会を持つようにしています。6年前から「芸術家と子どもたち」という団体と関わっていて、子ども達がアーティストと一緒に話や劇をつくったり、ものづくりもしたりする活動を続けています。

小川 その活動に50人の子ども達が一齐に参加するんですか。

角能 (子ども達が自分で) 選んで活動に参加しています。興味を持つんじゃないかっていう子には、ピンポイントで(活動を)紹介したりとか。

小川 そういうことは時間かけないとわからないですよ。

角能 やっぱり関係性がないと、子ども達も自分のことを話したりとか自分を出したりってできないです。

小川 「とどく」で子ども達と何かをやりたいというのは、もともと田中さんのリクエストですね。

田中 自分が子どものころに憧れる文化があったので、(ひきこもらずに) 外に出たりできたタイプの人間なんです。だからアートに触れるという活動は素晴らしいって思うんです。そういうのに興味ない子どももいるんですか。

角能 むしろ参加する子の方が少ないです。

田中 今回の手紙のプロジェクトは、興味ありそうな子を紹介してもらって、まず自分から手紙を1通送る、みたいな感じでやる予定なんです。そういうものに偶然出会うことって面白いのだろうと思っています。それから作品を送ってみようかなと考えているんです。「こんなん届いた」みたいな感じで、いやおうなく注目を集める。手紙をやりとりするのは特定の子だけかもしれないけど、それ以外の子どもにも見せたら、とか作戦を考えてるんです。

小川 偶然出会うところが重要だと思ってるのね。

田中 自分がお笑いに興味を持ったり、舞台に立ちたいと思うようになったのも、偶然テレビで松本人志を見たからなんです。偶然ラジオから流れてきたものとか、(親に) 無理やり連れて行かれて見た演劇が面白かったとか。

角能 関わる大人の影響って子どもにとってすごく大きいのですが、(子供の家では) 周りにいる大人が職員や学校の先生だけということが多いので、面白い大人と会う機会が少ないかもしれないですね。

小川 「あ、この子スイッチが入ったな」みたいな瞬間であるんですか。

角能 アートのワークショップの中で、こんな集中力見たことないなあとか。「あ、こんな力があつたんだ」と感じられるといいなあと思います。

小川 「とどく」がそういうきっかけになったらいいですね。ハードル高いけど(笑)。

田中 自分も強制とかはしたくはないんで、興味を持ってもらって、協力してグ

ループ展としてつくるとか、そういう形に持って行けたらなって思います。

小川 いっしょに何かをやって空間に展示すること自体が、すごい特殊なことかもしれないですよね。今回の手紙のやりとりが、最終的にどうなるのかについては、むしろイメージがない方が面白いかもしれないですね。

田中 でも、軽くでもいいから目的みたいなものがあるといいかな。文通してる最中に「この手紙のやりとりはいったい何なんだ」みたいな感じに子ども達がなりそうやなあって思うので。

小川 子どもと接する時に気をつけていることってありますか。

角能 つきあって関係をつくりながらその子のことをわかっていく中で、思いもよらぬことを返してくる時があったりするんです。そこで、育ててきた中で理由があるんだってとらえ直すことには気をつけています。こちらも裸にならないとつきあえないところもあったりします。

田中 さっき話したワークショップのように（子どもと）直接会ってやりとりした経験はあるんですけど、今回は手紙だけで、どういう風に子どもに向き合っていけるのか、超不安ですよ。

角能 「芸術家と子どもたち」の活動も、最初は子ども達も何をやるかわかってないし、アーティストの方々も大変だったと思うんです。職員にも「これが何の意味があるの？」みたいな見方もある中でやってきました。最初はわけわからないかもしれないけど、続けてみたらいいのかなと思ってます。

小川 今回のように、3年計画でひとつのプロジェクトをやる機会ってなかなかないので、作家にとっても、僕にとってもいろんな発見とか、学びがあるんだろうなと思っています。



キックオフトークVol.2

手話表現とアートの意外な親和性

齋藤春佳（美術作家）

橋本一郎（亜細亜大学経営学部ホスピタリティ・マネジメント学科 客員教授）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



橋本一郎さん（左）と齋藤春佳

小川 まず齋藤さんからご自身の活動についてお話をお願いします。

齋藤 私は多摩美術大学で油画を専攻したんですけど、油絵以外にも映像とか映像インスタレーションとかも行っていきます。どうしてそういう作品の展開をしているのか、というと「時間の仕組みを変えるため」と思っていたんです。時間は流れている。でも、それは、重力が働いて地球が回って、太陽が昇って沈んでという運動エネルギーがあるから。花が枯れたり、人が死んだりとか、空間の中で起こっていることをわかりやすくするために「時間が流れる」という概念を使っているんじゃないか。そしたら、空間を操作することで、それを目で見ることによって、見る人の知覚が変化したり、空間が変化したりすることが、時間の仕組みを変えることにつながるんじゃないか、と信じてやっています。（作品を数点紹介する）

小川 時間とか時空が共有されているという前提を信じていないけど、それは何

だろうってことを作品を通じて探っている、みたいなことですかね。で、自分の時空の感覚がシェアされることよりかは、作品を見た人の中にその人なりの時空が出来上がっていく。そこに面白みを感じているということなのかな。

齋藤 描かれたイメージについてはそうなんですけど、時空の仕組みに関しては「私のこの謎理論をわかってくれ！」みたいな気持ち（笑）。

小川 いかがですか、橋本先生。率直な感想を。

橋本 いやあ、わからないですよ（笑）。でも、作品を見ながらアーティストからお話をうかがう機会はそうないですからね。いま齋藤さんを「探索中」です、（思考が）どうなっているのかなって。（作品を）画像で見せていただきましたが、現物を見てみたい気がしました。

小川 普段のお仕事や活動についてうかがいたいのですが。

橋本 僕はいまは大学教員で、手話を教えたり、特別支援学校の先生を目指すカリキュラムを担当したりしています。それ以前はろう学校や特別支援学校の教員を22年半続けてきました。僕自身も小学生のとき、病虚弱の特別支援学校で1年半、親元を離れて生活したという経験があります。先生になってろう学校で働いたことは、僕にとってはとっても充実した、人生を大きく変えた出来事でした。今回「とどく」プロジェクトのご相談を受けて、率直に、齋藤さんがなぜ聞こえない人に興味を持ったのかに、すごく興味があったんです。僕にとって聞こえない子どもとか学生は宝物ですから。

齋藤 理由はいくつかあるんですけど、自分の興味関心のコアを考えたときに、文字を書くこと、それを読むことが作品制作や生きる中でも重要な位置を占めていて、書くこと、読むことで自分が自分になっていくみたいなのところがあります。もしかしたら聞こえない人のなかにも、読むこと、書くことに自分の大事なものを入れ込んでいる人がいて、その人と出会えるかもしれない、という期待がありました。

それに加えて、聞こえる／聞こえないって空気の振動によって起こる差異だけど、もし空気がない空間だったらどうなんだろう、って思ったんです。手紙のやりとりもある意味、空間に関わらないけど、読むことによって心の中に空間が生まれる、みたいなことも。私達は同じ世界に生きてるんだ

けど、人数が多いほうがスタンダードになっている。その中で、私は耳が聞こえなくなれないんだな、とも思って……。

橋本 ひとりのアーティストが表現する機会をもらったときに、聞こえない人に焦点を向けてくださったというのは、僕はすごく嬉しいですね。聞こえない世界に生きている人達というのは、実はひとくくりにはできない。ひとりひとりが様々なバックグラウンドを持っています。彼らとやりとりしていくなかで、齋藤さん自身も彼ら自身もいろいろな変化が起こっていくだろうな、っていうのが楽しみです。

僕は15歳のときに演劇をやっていて、「手話をやったら表現力が上がるよ」っていわれて。それで手話を学んでいく中で、聞こえない彼らといっしょに生活していく時間が長くなると、社会の歪みとかムカつくことが見えてきます。言葉ではダイバーシティとかいってるけど、実際はそこまで行っていない。そもそも聞こえない子どもが生まれたと両親に告知するとき、医者「残念ながら」っていますから。そういう日本の社会で彼らは生きてきているけど、「これが普通」と思っている子もいるし、「すごく大変な思いをした」っていう子もいる。（今回のプロジェクトに）そんな、よりどりみどりの6人の大学生をそろえました。

齋藤 （笑）ありがとうございます。私は聞こえない方々の世界をポワポワ～みたいな感じでしか思っていなくて、お手紙とかでも「え～？」みたいなに思われそうなこととかを聞いちゃったりして、相手を傷つけたりするかもしれないと思ったりもして……。でも、（このプロジェクトは）時間がまだ2年以上あるから、やりとりする中で、ゆっくり考えていけるのは嬉しい。

橋本 6人の大学生は、齋藤さんが失礼だと思うことをガンガン聞いていただいても、ガンガン返してくれると思うんです。そういうのを聞いてもらえることが、彼らを強くしたり成長させたり、（聞こえる人が）思ってるんだけど聞けない、ということを知るチャンスにもなるから。

齋藤 そういうことがもっと起こったほうがいい、ということですか。

橋本 互いに遠慮しあっていると本当のことが聞けないから。知らなかったということを経験できる社会にならないといけないと思うので。

齋藤 この前、橋本先生と打ち合わせたときに、手話の「聴く」という表現で、両手を揺らしながら胸に引き寄せていましたね。なんだか「ナミナミナミ、ド〜ン！」って、波が胸に打ちつけるような……。

橋本 その「聴く」はよく使いますね。

齋藤 それに感動したというか（笑）。これから聞こえない人とやりとりする中で考えている、人の内的世界のどっかとどっかがつながるみたいなことが現れている瞬間を目撃しちゃったと思って。

橋本 なるほど。手話表現というのはとても芸術的なんです。6人の大学生は同じ言葉を表現しても、全員違う表現で来ると思うんですよ。なぜかといえば、過去の彼らの教育歴だとか、いままで出会ってきた人とか、全ての影響を受けて出てくるのが、彼らの手話という言葉だから。そこも齋藤さんには魅力として感じてほしいですね。

齋藤 実は私、橋本先生の「ナミナミナミ…」で感銘を受けて、指文字を覚えたんです。それがすごく楽しくて、手話も覚えようと図書館で本を借りてきたんです。でも、もし覚えちゃったら、覚える前に戻れないわ、と思って。少し落ち着こうとしています（笑）。

橋本 手話も言語なんだけど、日本語では書けないようなことが、手話だったら伝えられるってこともいっぱいあるんですよ。例えば、「とどく」というとき、プレゼントがとどくのか、お手紙がとどくのか、メールがとどくのか。手話だったら、そこで気持ちも一緒にとどく。それが視覚言語の優位性で、具体的に誰もが理解しやすい言葉になる。

小川 お話をうかがっていると、（手話表現は）アート表現とすごい近いというか。きっと抽象的なものごとを誰かに伝えるときに、個人個人が持っている感性を表す方法論みたいな話は、アーティストがやっていること、手話の世界を構築していくことと親和性があるなと思いました。このプロジェクトが最終的にどんな形になるか、すごい楽しみです。

橋本 6人の学生にとっても2年間同じ人とお手紙を交わすことができるいいチャンスをもたらしたなと思っています。僕が経験できないことなので、ある意味うらやましいです。齋藤さん、僕がもっとヤキモチを焼くような関係をぜひ彼らとつくってください（笑）。

キックオフトーク Vol.3

「わからないけど、伝わる」ことの可能性

大木裕之（映像作家・現代美術家）

相川良子（NPO法人ピアサポートネットしぶや 理事長）

全編はYouTubeへ
（手話通訳・英語字幕付）



相川良子さん（左）と大木裕之

小川 今日映像作家・現代美術家の大木裕之さんと、大木さんに協力して下さる「ピアサポートネットしぶや」の相川良子理事長にお越しいただきました。まず、大木さんにうかがいたいのですが、大木さん、基本的にかっちりしたプレゼンテーションは苦手ですね。

大木 （無言でうなづく）

小川 （笑）普段は映像メディアを使って制作されていますね。

大木 そうですね。でも、映像というものは、僕は良くも悪くも非常に問題のあるものだと思っているんです。アーティストとしてやろうとしていることは、世の中のいろんな「障害」が少しでも良くなること、というとベタないい方かもしれませんが……。特に「認識障害」がいま、僕のテーマで。（この社会の）「認識障害」は多層にわたっていて、本当にやばい状況に、自分も含めて、あると思っています。それを、「血の巡り」を良くさせるよ

うに、やっていきたい。映像を使うのも、僕の中では、「毒をもって毒を制す」というか……。

小川 自分の撮りたい映像を作品として撮ること以上に、それを撮ることで社会の状況を改善する、みたいなイメージがあるんですね。

大木 僕自身の自己表現とはあまり考えていないんです。

小川 大木さんの作品を見てみましょうか。

大木 これは『オーマイゴッド』という作品で、去年(2019年)個展で発表して。エチオピアとイスラエルと山形と仙台で撮影していて、しかも、その映像は会期中にどんどん変化していくんですよ。はっきりいって「多動症」に近いですね。僕自身は映像というものをラディカルというか、柔軟に考えています。映像がアクションなんですよ。整体に近いかもですね。

小川 整体？

大木 鍼灸とか整体で人の意識の回路に……、というか、世の中全体がすごく息詰まって、血がたまっていたりする。それには対症療法じゃなくて……。説明はうまくいってないかもしれないけど、僕は相川さんとコミュニケーションしてるつもりなんです。なんとなく伝わりますか？

相川 伝わります。映像の話がうかがって、なんとなく「こういうことかな」とわかったのは、私は日常的にひきこもっている人達に関わっているからなんです。その人達と話をして、なんとなくわかるところはあるんです。

小川 相川さんの普段の活動、「ピアサポートネットしづや」ではどういったことをやられているかをお聞きしたいんですが。

相川 私はもとは教員だったんですが、不登校の子どもを学校の側から見てもらえないので、学校以外のところから見ると違うだろうと思ったんです。で、(不登校の)子どもの居場所づくりを始めました。そうすると、学校だけでなくどこにも行かない子どもがいることがわかってきた。世の中はそれを「ひきこもり」と称しているんですよ。それで、「ひきこもり」をサポートするためにNPO法人をつくった。それが「ピアサポートネットしづや」です。子どもの居場所づくりから始めて今年で22年になります。「ひきこもり」の支援で、「ひきこもっているのは不幸なことだ」というところから始まるんです。「ひきこもり」の状態から、外に出る、そして次

には仕事をする、それがその人にとって幸せなんだ、という認識なんですね。しかし、実際は違うんだと感じました。外に出て仕事をするのがゴールではないらしい。じゃあ、その人にとって何がゴールなのか、と思うじゃないですか。たぶんゴールはその人達が自分で決めるのであって、社会が勝手に決めてはいけない。そこまではたどり着いているんです。

不登校は中学2年ぐらいから多くなりますが、私達関わっている「ひきこもり」の人の最高齢は54歳ぐらいになっています。すごく年齢の幅が広がっている。そうすると、その人達が「これで幸せなんだ」「これがとても楽しいんだ」というところを見つけていけばそれでいいのでは、というところには今は落ち着いているんです。

小川 具体的にはマンツーマンというか、人それぞれにどう対応するかを考えながら支援しているんですか。

相川 ひきこもっている状態は、人間がみんな違うのと同じくらい、全員違うんです。でも、ひとりではどうにも生きていけない。やっぱり対等に付き合う人が必要なんです。だから「ピアサポートネット」という名称なんです。「ピア(peer)」は「同じ人間」。仲間として対等にお付き合いしましょう、というメッセージなんですね。ひとりぼっちでストレスを抱え込んでいる人にとって、誰かがいれば、それなりに自分を表すことができ、表せばそれが反射してきて、自分が見えてくる。そういうサポートの方法をとっています。

大木 それは本人が「救けて！」って、手を伸ばしてくるものですか。

相川 本人からは来ません。やはり親御さんが心配するところから始まるんです。(サポートの)対象となる人達が、「ひきこもり」状態からたまたま出てきたら、そこでお話をするんです。今日も19歳の女の子が出てきたのでお話をしたんですが、楽しいことが3つあって、その1つが美味しいものを食べること、とくに小籠包が食べたい、という話でした。人間て基本的に美味しいものを食べるとか、美しいものを見るとかは、やっぱり楽しいじゃないですか。そういう楽しいことをお互いに見つけていけば楽しくなるじゃないですか。

このプロジェクトがいいなと思ったのは、テーマが「とどく」だったから



です。ひきこもっている人達にはたぶん、とどける相手がいないんです。とどける相手はほしいけれど、人間を見たら怖くなっちゃうんです。だから、私としては、彼らのちょっとした仕草やつぶやきでいいから、他の人にとどけたい。そういう期待を込めています。

小川 このプロジェクトについて、大木さんからビデオレターというキーワードを出していただいています。それも誰かと一対一で（ビデオレターでやりとり）するというより、その映像を通していろいろな関係性が流動的に広がっていくようなことに興味があるとおっしゃっていました。大木さん、相川さんのお話を聞いたうえで、どういった形でやっていこうか、というイメージはありますか？

大木 僕自身が大事にしているのはプロセスなんで……。小川さんが「どういった形で」といったけど、僕は何をイメージするか、ということをすごく限定してるの。というか、すごく慎重にやりたいのよ。例えば（相川さんから）「ひきこもり」の人を3人紹介してもらって、どういう形になるかを僕がイメージして、チャッチャッとやっていくというのは……。嫌なんです。伝わりますかね？ やっぱ、一対一でビデオレターをやるよりも、もっと相対的にしたいんですよ。そのほうが面白いんじゃないかな。

小川 なにかフォーマットを決めて、その中でひとつの作品をつくるのではなくて、様々な人が関わる、その一部として映像のやりとりがある。そのプロセス自体が重要だということですね。

大木 もちろんです。でも、それがどういうふうになるか、いまは具体的にはわからないわけ。たとえば、部屋から出なかった人が出ることになるのは、やっぱり何かのきっかけとか、積み重ねの中から、ですよ。僕は、映像ってものは意外とそういうところに踏み込めると思うんですよ。

相川 私はこのプロジェクトに対してゴールを見ているわけじゃないんです。「とどく」というテーマが刺さったから、じゃあ、ひきこもっている側から「とどく」場を設定しようかな、という感じ。とどけたい思いがいくつか集まったとして、それを形にしていくのが、このプロジェクトかな。その小さな場がもうちょっと大きくなる。それを「とどく」に期待しています。

2021年7月から2022年1月の期間、5回にわたって開催されたオンラインのトークイベント。ディレクターの小川 希は、同時期に文化庁新進芸術家海外研修制度でウィーンに滞在しており、ヨーロッパと日本をつないでのトークとなる。3名の参加作家が手紙やビデオレターを介した参加者とのやりとりの進捗状況や、そこから感じていることなどを紹介するとともに、そうしたプロセスを経て2022年に開催予定の成果展にどのようにつなげていくかキュレーションを担当する小川と語り合う。加えて、視覚身体言語の研究を始め様々な身体性の方々との協働から感覚がもつメディアの可能性について模索するインタープリターの和田夏実さん、そして精神科医で「ひきこもり」に関する多くの著作もある斎藤環さんと小川が対談し、専門家としての知識や経験、さらには本プロジェクトの意義についてもうかがった。

[2021年7月から順次収録、配信]

出演	Vol.1 齋藤春佳（美術作家）
	Vol.2 和田夏実（インタープリター）
	Vol.3 大木裕之（映像作家・現代美術家）
	Vol.4 斎藤環（精神科医）
	Vol.5 田中義樹（美術作家）
司会・進行	Vol.1-5 小川 希（ディレクター／キュレーター）

手紙を通して見えてくる、相手の人の姿

齋藤春佳（美術作家）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



- 小川 齋藤さんは、このプロジェクトの話聞いたとき、どんな印象でしたか。
- 齋藤 最初は3、4ヶ月のスパンで手紙をやりとりして、そこから作品をつくって展覧会を行うと聞いたんですが、そのときは（睡眠中の）夢と絵の関係みたいなのが自分の制作と重なるなあ、みたいなことに興味がありました。そこから考えて、聴覚障害のある方から手紙で夢の内容を教えてもらって、作品をつくろうと考えていました。夢の中を空気が震えない（つまり音がな）い）ところと設定したら、共通の認識というか、同じ瞬間みたいなものがつかめるんじゃないかと思って。
- 小川 今回のプロジェクトは、直接会うことなく手紙やビデオレターでコミュニケーションを図るものですが、どういう感じで書こうと思いましたか。
- 齋藤 大学生6人を紹介していただいたのですが、会ったことのない人達に手紙を書くのがすごく難しくて。1月だったので「正夢を見ましたか？」「お薦めのドラマは？」という質問を書くことにしたのですが、全員に同じことを書くのは仕事みたいだし、相手にも失礼みたいな気持ちになって、文字を交えたドローイングとして描きました。
- 小川 それを送られてきたら嬉しいでしょうね。返信はすぐ来たんですか。
- 齋藤 いろいろでした。1週間後に返事をくれた人とか、書いている途中の手紙を送ってきた人とか。「20年間生きてきてほとんど初めて手紙を書きます」という人もいたりして、面白いですね。
- 小川 実際にどんな返信があったんですか。
- 齋藤 成人式で9年ぶりに友達に会える夢を見た、という人がいました。でも成人式が中止になって、正夢にならなかった、って。

- 小川 あああ、悲しいですね。たぶんコロナで中止になっちゃったんですね。
- 齋藤 お薦めの小説を教えてください。それは遠藤周作の『私が・棄てた・女』で、そのなかに出てくる「人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできない」というフレーズを、「齋藤さんと私の出会い自体と重なる気もする」って書いてくれて。それで私も好きな小説を薦めようと思って本を送りました。ちょっと押し付けがましいかなと思いつつも。その人は「暇になったら読みますね」って書いてきました。
- 小川 最初は同じ内容の手紙を送ったけれど、いまは別々の展開が起きているんですね。
- 齋藤 その人の姿がくっきり見えるような感じの人もいれば、まだぼんやりしている人も。シュシュシューって感じで（素早く）書いている人がいて、その人が生きている時間の「残像」みたいなのが伝わってきました。
- 小川 聴覚障害のある人のことは最終的にはわからない部分があるとしても、（今回の場合は）手紙をやりとりして同じ時間を過ごすことで、互いに理解し合える部分が生まれてきている、ということですかね。
- 齋藤 うーん、理解し合えていないかもしれないけど、重なっている瞬間みたいなのが現れるかも、という感じかな。（知らない人からの）手紙って、その人の分身というか、人の現れ方の別の形という感じが面白いですね。
- 小川 その関係性を絵画という平面に定着することはできますか。
- 齋藤 できたらいいなあと思って、試し始めています。風が強くて揺れているシュロの木をチェキで撮って送ってくれた人がいて、それで直近で見たシュロの木の経験が思い出されたんです。（その経験が）面白くて、私が見たシュロの木のドローイングを描いてから、油絵を描いてみました。そういう絵画の構造みたいなことを私は頭の中では考えきれないので、描いたことで考えをちょっと進めていけるかな、と思っています。
- 小川 それは齋藤さんひとりではできあがらなかった絵ですね。互いのやりとりのなかで協働でつくっていくのが面白い。しかもそこに、聴覚障害のある人とのコミュニケーションが視覚化されているのは、非常に興味深い。
- 齋藤 あ、そうか。確かにそうですね。でもどうなるかまだわからないですけど、（手紙に）反応してできたものを重ねていきたいなっています。

「遊び」で探るコミュニケーションの形

和田夏実（インタープリター）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



小川 「とどく」プロジェクトは2年目になりました。今日は特別イベントとして、ゲストにインタープリターの和田夏実さんをお招きしました。まず、和田さんの活動についてうかがいたと思います。

和田 私はろう者の両親のもとに生まれました。家では手話で会話をしますが、例えば、私が2階にいて、1階にいる両親が音を立てなくても空気が動く感覚がわかります。そうした伝え合いの様々な回路を感じることがあります。そこで、手話通訳だけでなく、伝え方の回路とか表現方法も含めたインタープリター（解釈者、媒介者）という肩書で活動しながら、コミュニケーションの間の揺らぎみたいなことを探しています。

小川 具体的にはどのような活動をなさっていますか。

和田 大学ではインタラクシオンデザインという、ものと人の関係性にかかわるデザインをやっていたので、体験型の装置とかゲームをつくっています。人の動きに関心があるので、様々な人の「眠る」というイメージのジェスチャーを集めてボディイメージの辞書みたいなものをつくったこともあります。「Linkage」というゲームは、短い棒を複数の人が指先で支え合います。これは触手話という、手話を触りながらコミュニケーションする方法を経験したときに、相手の圧力から伝わるその人らしさみたいなことに衝撃を覚えて、ゲームにしてみました。

小川（音声言語による）直接的なコミュニケーションからこぼれ落ちるものを拾い上げていくような作業なんですか。

和田 例えば、私の父はかなりイメージの世界にいる人で、星を見て「ぱくっと食べたなら美味しいかもよ」みたいなことをいうんですね。父が織りなすイ

メージの世界に私も飛び込んで遊ぶことが日常によくあります。そうした想像の世界を友達といっしょにやりたいと思ったときに、身体の動きだからこそできることもあるのかなと思います。

小川 「とどく」では、齋藤春佳さんというアーティストがろうの学生さん達と手紙でコミュニケーションをとっています。互いが見ている世界をどう伝えてどう体験していくかを考えながらやっています。学生達はみんな音楽を聴くのが好きだと手紙に書いてくるのですが、ろうの人の音楽体験はどういうことなのだろう、と思ったそうです。でも、やりとりを続けるうちに、音楽体験というものがけっしてひとつのものではない、とわかってきてるようなんです。

和田 私も音楽、例えばバイオリンの音のイメージを両親に伝えるときには、試行錯誤しながら回路を探しに行くような感覚になります。例えば不協和音を「土曜日の夕方のびしょ濡れの靴の中」みたいな感じ、と伝えるのですが、両親はたぶんよくわからないけど、「娘がそう感じたんだ」ということを楽しんでいるのかなと思ったりします。

小川 言葉ならワンフレーズですむことを、手話は手の動きで時間をかけて伝えますが、それがかかって豊かだなど思うこともあります。いまは時間をかけてコミュニケーションをすることが損なわれている気がします。

和田 私が自分の想いを伝えるときには、触手話が一番わかりやすく、簡潔に伝えられるので、安心して（想いを）渡せる感じがあります。手話は視覚化できるので、相手に対して「わかるでしょ」みたいな任せられ方ができます。音声言語の場合は、いたいことにたどり着く道を探していると、長くなって絡んだ縄みたいになってしまいます（笑）。

小川 「とどく」では、3人のアーティストが様々な背景を持つ人々とコミュニケーションをとっていく可能性を探っています。和田さんもいろんなプロジェクトをなさっていて、アートを入れることで（コミュニケーションを）変換させる、あるいは広げていこうとされていますが、その可能性についてどのように考えていますか。

和田（アーティストは）言葉以外に表現する方法を持っていること自体が豊かだと思います。抽象的ないい方になりますが、社会のルールに自分達の身

体や感覚を合わせていかなきゃいけない中で、マイノリティーが歴史を開拓する可能性としてのアートの豊かさって間違いなくあると思うし、可能性を感じます。

小川 「とどく」でいえば、アーティストも今までとは違うことをやらなきゃいけないし、やりとりしている相手も違うアクションをしないとイケない。どちらも大変だと思うのですが、和田さんが、少し違うコミュニケーションの場を設定した経験では、いかがですか。

和田 他者と出会い、わかり得なさに出合うとき、自分が変わらなきゃいけなかったり、当たり前だと思っていることを手放さなきゃいけなかったり、そういう辛さや面倒くささ、肯定できなさは生じてくると思います。その「矢印」をいっしょに向かう方向に進めていくことができるのが、アートプロジェクトの魅力かなと思っています。いつもの自分の場ではできない体験をして、新しい自分に出会い直すという面白さがある気がします。

小川 実際にコミュニケーションのズレを感じたときに、もう無理と思うのではなく、ズレていることに意味とか価値を見出すことはそう簡単じゃない。和田さんの活動はそれをポジティブにとらえることなのかなと思うんですが、そこに秘訣とか発想の転換みたいなものはありますか。

和田 ポジティブに変換しようみたいなことはありませんが、私の中で「遊び」というキーワードはすごく重要なんです。ルールをつくることで、その制約や条件から自由になれるところに、私は遊びの魅力を感じています。人に出会ったときに私は、その人の幼いときの感覚とかを知ること、その人の世界に飛び込んでみたい、いっしょに楽しみたいという意欲があります。そういうことを慈しむことができたときに、初めて見えてくる景色とか価値があると思っています。

小川 それをプロジェクトとして外に見せていくわけです。第三者が見ることの意味や、記録に残していくことについてはどう考えますか。

和田 究極なことをいうと、人類の歴史の中で、危険性を伝えるには音声のほうが便利とされ、音声言語が発達していった。様々な技術も印刷とか電話とか、音声言語に合うように向かっていった。その一方で、もし世界中で視覚言語が言語の起源だったら、その方向に豊かになった世界もあるかもしれ

れないと思うんです。個人的には家族と話し合ってきた言語（手話）が好きなので、いかに残せるかは大事なんです。アーカイブすることで歴史になり、それを参照して次が生まれるとか、百年後の誰かにとどくかもしれない。そういう時間軸で考えると、記録やアーカイブとして公開することの意義はすごく感じます。

小川 最後にお聞きしたいことがあります。手話と音声言語では、コミュニケーションしているときの世界のとらえ方は違っているのでしょうか。そのあたりに「とどく」の方向性についてのヒントがありそうな気がします。

和田 これは個人の感覚の話になりますが、手話では話しているときは、自分が聞こえていること自体を忘れてしまうことがあり、聴者の中にいるときは手話をする自分はあまり出てきません。モードが切り替わる感覚があります。また、特定の誰かとの間でしか生まれえない思考や世界の見え方があったりもします。いろいろな世界、いろいろな自分が日々生まれて消滅していく。そういうふうにごろごろしているような気がします。

和田夏実

ろう者の両親のもとで手話を第一言語として育ち、視覚身体言語の研究、様々な身体性の方々との協働から感覚がもつメディアの可能性について模索している。近年は、LOUD AIR と共同で感覚を探るカードゲーム「Qualia」(2018) やたばたはやと+magnetとして触手話をもとにしたつながるコミュニケーションゲーム「LINKAGE」、「たっちまっち」(2019) など、ことばと感覚の翻訳方法を探るゲームやプロジェクトを展開している。



ビデオレターのやりとり メタ視点から考える

大木裕之（映像作家・現代美術家）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



小川 大木さんは「ひきこもり」の方々とビデオレターでコミュニケーションをとりながらプロジェクトを進めています。これまでどういう感じでやっていますか。

大木 最初に僕が挨拶に近い映像をつくったんです。今回（のプロジェクト）は直接会わないでコミュニケーションするので、どんな人達なのかなって想像しながら。その後わりと長い15分くらいの（映像を）送ったんですね。それは、映像・映画作品の文脈で見てもかなりラディカルなものだと僕は思っています。で、2人からレスポンスがありました。それに対して僕がレスポンスをしたところですね。

小川 「とどく」には他に2人の作家が参加していて、彼らは特定の人達とやりとりしているけど、大木さんはコミュニケーションする相手が流動的に変化していてもいいという形で始めました。何か狙いがあるんですか。

大木 確かに変化してもいいと思ってたけど、実際にレスポンスがきた。そうすると、「全体が流動すればいい」というのとは、ちょっと違ってきかたかもしれません。でもまだ一往復だから、具体的にはわかりません。

小川 大木さんは長年、映像表現に携わっていますが、今回コミュニケーションしている方々は、映像が好きだとか、得意だというわけではありません。初めて映像機器に触る人もいるかもしれません。いまのところ、具体的な対話にはなってはいないけれど、大木さんのビデオレターから（「ひきこもり」の人達が）外に出て行く何かしらの刺激みたいなものを受け取っているんだろうと、僕は思っているんです。

大木 僕は人としゃべっていてもコミュニケーションしているのか、よくわかん

ないことがある。人間がコミュニケーションするうえで、映像が何の役割を果たすかっていうこと自体が、簡単にいえることじゃないんですけど……。メディアの問題というのがあって、まあ、今もこうやって（Zoomで話しているが）直接は会っていない。

小川 オンラインのコミュニケーションツールが、コロナ以降はスタンダードになりつつありますね。仕事や教育の現場では、むしろ推奨されているわけですけど、そこでそぎ落とされていくものがある。コミュニケーションツールであるにもかかわらず、映像だと伝わらないということは、大木さんがやってるビデオレターでの伝わらなさどこかで通じているのかな。

大木 「とどく」で返ってきた映像は、ひきこもっていた人達が外界にカメラを向けた撮影行為の結果であるわけ。その映像は、例えば虫をアップで撮っていたりする。カメラというツールが入ることで、虫を撮るというアクションというか、結果がでてきた。それを僕は受け止めるの。

小川 リアルタイムでコミュニケーションすると、視点や時間軸を変えて介入することってできないけど、映像は全然違う伝わり方があって、受け手もあるんな状況や方法で受け取ることができる。「とどく」はそっちの可能性を探っています。

大木 いまは、生でしゃべるよりこの（オンラインの）ほうが気が楽でいって人がいっぱいいるんじゃない？

小川 「とどく」は、コミュニケーションを通じてどんなことが生まれていくのかを考えるような機会だけど、大木さんはこの社会の状況は何なのかを見る、メタな視点も持ち合わせながらやっているということですね。

大木 そう！ バランスが要るの。メタな視点がないと、具体的に動いていることが処理できないよ。

小川 現場でのコミュニケーションを走らせつつ、もう少し映像とは何かとか、この時代を俯瞰するような視点もありつつ、という作品が想像できますね。いまコミュニケーションをとっている人達はその作品を見たときに、自分達がいまどういう状況で何をその場で撮ったのか、という相対化する視点を獲得できたら、そして、自分達が生きている社会の構造みたいなものが、何となくでも見えたらそれは意味があることなのかなと思います。

「ひきこもり」は社会的な排除 アートにできることは―

齋藤 環（精神科医）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



小川 「とどく」プロジェクトでは、映像作家の大木裕之さんが「ひきこもり」の方々
とビデオレターでコミュニケーションをとっています。そこで今日は「ひ
きこもり」にお詳しい精神科医の齋藤 環さんをゲストにお迎えしました。
まず「ひきこもり」について解説をお願いしたいと思います。

齋藤 まず、「ひきこもり」は、不登校と同様に、問題かもしれませんが、病気
ではありません。定義としては、①6ヶ月以上社会参加をしていない、②
精神障害が第一の原因ではない、という状態です。①については、家族以
外の人と親密な人間関係を持っている場合は社会参加しているとみなしま
す。②でややこしいのは、「ひきこもり」状態は非常に苦痛ですので、そ
れに耐えられず二次的に精神障害になってしまうこともあります。

小川 では、外出できない状態が必ずしも「ひきこもり」ではないのですか。

齋藤 はい。実際には対人関係を持たない人はあまり外出しなくなりますが、「部
屋から出ない人」＝「ひきこもり」ではありません。

小川 オンラインでコミュニケーションをとれる人はどうですか。

齋藤 少なくとも、診察を受けに来るレベルの「ひきこもり」の方で、オンライ
ン活動がすごく活発という人は、ごくわずかです。家族とコミュニケーショ
ンがとれているケースも、やはり多くはありません。孤立して、疎外され
ているという状態の方が大半だと思います。

小川 「ひきこもり」は日本特有のものなのですか。

齋藤 いいえ、例えば韓国は「ひきこもり」が非常に多いといわれています。中
国もだんだん増えているそうです。ヨーロッパではイタリア、スペインに
多いんです。家族主義的な社会かどうかで分かれるようです。子どもが大

人になっても親と同居を続けるのは、日本や韓国では普通です。ヨーロッ
パでもカトリック地域では家族主義が強いので、イタリア、スペインでは
「ひきこもり」が起きやすいと推測しています。

小川 そうい状況が社会的に認知されたのは日本が早かったのですか。

齋藤 日本で「ひきこもり」という言葉が広く知られたのは2000年代以降ですが、
それに該当する事例は1970年代から報告されています。

小川 「ひきこもり」の性質とか特徴は変化しているのですか。

齋藤 本質的な部分はあまり変わっていないと思います。変わったのは高齢化で
す。「8050」問題、つまり80代の親御さんが50代の息子、娘の面倒を見て
いるという状況が増えてきて、無視できない規模になっています。

小川 そうい状況への対策は進んでいますか。

齋藤 「そう」とはいいい切れません。変化した点としては、誤解や偏見が多少ま
しになりました。かつては、ひきこもっている人が犯罪を犯すとメディア
が総出で叩きまくっていました。昨今は、そういう事件が起こっても、「ひ
きこもり」を強調する報道は減ってきたという印象があります。また、医
療側は一貫して「ひきこもり」を「病気」にしたいという意思があったと
思います。病名がつかないと治療できないという思いが強いからです。家
族も「病気」であるほうが保険診療ができるので、コストがかからないと
いう思惑もあります。私は「反医療化」の旗を振ってきました。医療現場
で受け入れの対策ができていないし、「病気」という認識が当事者を傷つ
けてしまう可能性もあるからです。対応策として「ひきこもり地域支援セ
ンター」が都道府県に一つはできた点は進歩だと思います。ただ、「ひき
こもり」支援には、家族会と当事者が集まれる場所が絶対必要です。それ
から、訪問支援ができればいいのですが、現状はまだまだです。

小川 「とどく」では、大木さんがビデオレターで「ひきこもり」の人達とやり
とりをしています。この試みをどうぞ覧になっていますか。

齋藤 大木さんのビデオレターは拝見しています。それについて申し上げます、「ひ
きこもり」を中心のテーマに据えていない点がいいと思います。ひきこも
っている人は「ひきこもり」扱いとか治療的雰囲気を感じると、身を引い
てしまいます。また、どうしても他人の状況と自分を比べてしまいます。(大

木さんが)被災地に行って活動されているのを見て、「自分にはできない。自分はダメなやつだ」という劣等感につながらなければいいかな、という懸念はちょっと感じました。

小川 「ひきこもり」の人にとって劣等感は大きく作用しているのですか。

斎藤 「ひきこもり」の当事者は一般的にいて、プライドが高いけれど自信がない、という乖離があります。人と比較して自分を否定する手前の段階で、自分自身に対して呪いの言葉をぶつけています。その辛さに耐えながら生きていたと考えたほうが、正解に近いと思います。

小川 自分を認めてもらうきっかけが重要になってくるということですか。

斎藤 そうです。承認が得られれば、(ひきこもった状態を抜け出す)努力にブーasterがかかることがあります。ただ、承認が意味を持つのは、家族ではなく、全くの他人から認めてもらえた場合です。デイケアとかたまり場とかの当事者同士の接点で、家族じゃない人から褒められるという経験があると、自信をつなぎとめる効果があります。仲間関係ができると、承認も強固になって、行動に結びつくということが起こり得ます。

小川 承認欲求とかコンプレックスというと、誰もが抱えている問題です。社会状況がそうした問題を生み出しているのでしょうか。

斎藤 社会学的に見れば「ひきこもり」は明らかに社会的排除であり、社会的孤立なんです。社会に参加できない成人は、欧米ではホームレス化しますが、日本では「ひきこもり」になる。それに対する差別とか偏見が強いので、当事者には「自分は価値がない人間だ」という発想が社会から植え込まれてしまっています。この二重の意味で、「ひきこもり」は社会がもたらしたものの、という位置づけはできると思います。

小川 今回のプロジェクトは手探りの部分が大いなのですが、斎藤さんからご覧になって、アーティスト達の創作とかコミュニケーションとかが、「ひきこもり」の人達に影響を与えることがありますか。

斎藤 「ひきこもり」の方がその状況や経験を活かした作品の例をいくつか知っていますし、それらは非常に優れたものです。ただ、そうするためには「ひきこもり」状態をポジティブに活かすという気持ちがないと難しい。彼らは誰よりも「働かざる者、食うべからず」みたいなことを考えて、自分自

身を責め続けています。心理学用語で「反芻」といいますが、反芻で自分を痛めつけているうちは主体的なことはできません。ビデオレターなどのやりとりは、それによって反芻の悪循環から解放されるならば、大いに意味があると考えています。

小川 この社会は「ひきこもり」など大きな問題をいくつも抱えています。その中で、アートが何らかの役割や機能を果たせるのでしょうか。

斎藤 坂口恭平さん(作家)は『現実脱出論』で、表現は個人の思考を現実のフィールドにおいて橋渡しをする役割を持っている、とっています。対話とは主観と主観を交換することに他ならないんですが、言葉だけでは上手く行かないことがあります。その対話の回路を増やすという意味で、アートの表現は大きな意味を持っています。

小川 アートが対話のきっかけのひとつになればいい、ということですね。

斎藤 伝達じゃなくてもいい。相互に触発し合う、触媒としての効果は期待できるかな、と思っています。機能とか効果を考え始めると、アートとしての本来性を失ってしまいます。何が起こるかかわからない、という不確実な世界を共有する。そういう状況をつくり出すうえで、通常のコミュニケーションよりアートのほうが優れているといえるかもしれません。

斎藤 環

1961年、岩手県生まれ。精神科医。筑波大学医学研究科博士課程修了。爽風会佐々木病院精神科診療部長を経て、筑波大学医学医療系社会精神保健学教授。専門は思春期・青年期の精神病理、精神療法、および病跡学。主な著書に『関係の化学としての文学』(新潮社・2009年)、『世界が土曜の夜の夢ならヤンキーと精神分析』(角川書店・2012年)、『心を病んだらいけないの？うつ病社会の処方箋』(與那覇潤との共著、新潮社・2020年)他多数。



手紙を開くときはドキドキする。

ラブレターみたい

田中義樹（美術作家）

全編はYouTubeへ
(手話通訳・英語字幕付)



小川 田中さんは今回、この企画に何を意識して参加したんですか。

田中 子ども（手紙の）やりとりをしたいといったんです。いまの子ども達が何を考えてるんだろうかと思って。それで、児童養護施設「子供の家」を紹介してもらいました。とりあえず探り探りやって、徐々に打ち解けていったらいいな、という感じです。で、最初の頃より、自分の手紙のクオリティーが上がってるんですよ、やっぱり（笑）。

小川 どんな子ども達とやりとりしてるんですか。

田中 小学生の女の子と中学生の男の子、もう社会に出られてる人の3人です。小中学生に送る手紙のチューニングが徐々にあってきた感じです。

小川 手応えが出てきたってことですね。

田中 内容としては他愛もないことをしゃべってますね。学校で何があったとか、最近どこに行ったとか、こういう漫画を読んでるとか。

小川 田中さんのブログを読んでも、最初、返事が来ない時期が続いていましたよね。あのときはどういう気持ちでしたか。

田中 すごい寂しかったですね。中学生の男の子からは、1通目の返事がまだ返ってきてないですからね。アナログでガッツリ手紙を書くて、やっぱり緊張するし、大変だろうとは思いますがね。でも、忘れたころに返事が来ると嬉しいもんですよ。

小川 田中さんは手紙の中で自分をさらけ出している感じですか。

田中 そうでもないなあ……。会って「最近、どう？」って話したら10分で終わる内容をものごく時間をかけてやりとりしてる感じですね。最初は結構長く書いてたんですよ。そしたら読むのも疲れちゃうから、「子供の家」

の方から「短くて絵が多いのがいいんじゃないか」って。

小川 そうか、絵も入れてるんですね。

田中 小学生の女の子は毎回、絵のリクエストが来るんです。フルカラーで描いて送り返したら、向こうからも絵が送られてくるって状態です。それは楽しいですよ。

小川 例えばどんなリクエストが来るんですか。

田中 「夢の中でドーナツに挟まってる猫」とかですね（笑）。

小川 （笑）何度かやりとりするうちに、その子どものキャラクターとか、何に興味があるとか、見えてきたりしますか。

田中 わかってきますよ、なんとなくですけど。字を見るだけでもわかるっていうか。かっちりした楷書体とか、飛ばしたような書き方とか、丸い字とか。アナログで手紙をやりとりする面白さかもしれないですね。

小川 相手の背景やプライバシーには触れないようにしているけど、パーソナリティーみたいなものがちょっとずつ伝わってくる感じですね。

田中 「いま、こういうことを考えていて」みたいな、ちょっと繊細な部分とかも手紙に出てきますね。

小川 なんとなく打ち解けてきて、心をちょっと開いてるところかな。

田中 もしかしたら友達には話してるけど、全然知らない人には話さないだろうな、とか、親にもいわないだろうな、という内容だったりします。

小川 田中さんは子ども達とワークショップをやることもあったから、子どもの扱いには慣れてるんですか。

田中 美術を通して関わることはやってきたけど、手紙って文字だけなんで美術はあまり関係がない。それが新鮮で、でも難しい。相手と会ったことはないけど、毎回、子ども達の個人の情報がバチバチに来るんで、手紙を開くときは結構、ドキドキしますよ。その前の手紙が不快で怒ってる手紙だったらどうしようか、とか。すごいラブレターっぽいですよ。

アトリエビジット

ATELIER VISIT



2022年の6月と7月に、田中義樹、齋藤春佳、大木裕之、それぞれのアトリエにディレクターの小川希が訪問。作家達が、普段どのように制作を行っているか、その現場でお話を伺う。リラックスした雰囲気のもと、作家達は、同年の秋に開催する成果展に向けての意気込みや、現在取り組んでいる作品についても言及している。田中と齋藤からは、展覧会に向けて制作中の作品やそれにつながるエピソードを聞かせてもらったり、大木からは高知にあるアトリエ周辺を歩きながら制作のみならずこの社会に生きる中で日々作家として考えていることについての話を聞いた。

[2022年6月から順次収録、配信]

出演 田中義樹 (美術作家)
齋藤春佳 (美術作家)
大木裕之 (映像作家・現代美術家)
司会・進行 小川希 (ディレクター/キュレーター)

アトリエビジット

歴史的な作品を受け継いで、未来に届けたい。

田中義樹 (美術作家)

全編はYouTubeへ
(英語字幕付)

手話通訳付き



田中義樹のアトリエ

小川 今日では田中さんのアトリエにお邪魔しています。
田中 普通の古民家なんですけど、ものをつくる系の作業をここでやって、絵やイラストを描いたりとかは自分の家でやってます。
小川 田中さんは彫刻科の出身ですが、コントとか演劇で演技したり、戯曲を書いたりする仕事もしていますね。そういった文字で考えていくことも得意なのかなと思って、このプロジェクトに誘った部分もあるんです。
田中 そうだったんですね。美術は高校2年からで、演劇は高1からスタートしているんで、そっちのほうが土台にあるのかもしれないですね。最近だと、

ストーリーを書いて、展示のなかに舞台をつかって、そこで演技するみたいなこともやっています。

小川 具体的にものをつくることと、演劇を使い分けてるわけではなく、どちらも関係しながら、みたいなことが最近は多いんですか。

田中 自分の作品って、昔の美術作家とかの引用が多かったりするんですけど、そのなかに昔の劇作家の話も入ってきて。演劇の歴史も面白くて、派手なことや尖ったことをやってる人がたくさんいるんで、そこから引っ張ってくるのも刺激的というか。だから気に入っておりますね。

小川 今回の「とどく」は、多様な背景を持った人と手紙など間接的なコミュニケーションをしていっしょに何かをつくりあげるというプロジェクトです。田中さんは「子供の家」という児童養護施設の子供達とやりとりをしています。子どもは得意だったんですか。

田中 全然得意ではないですけど、子どもに何かしてあげる、というおこがましいですが、それは絶対いいことだ、っていうのが自分の中にあるんですよ。

小川 いまは何人とやりとりしていますか。

田中 手紙を送った人数は6人です。返事が来なくなった子どももいるんですけど。文通がコミュニケーションの主だった時代って、最後のメインイベントは「会う」だったじゃないですか。「どんな人だろう、ドキドキ」みたいな。その部分が（今回のプロジェクトでは）ないので、子ども達はどういうモチベーションでやってくれてるんだろう、みたいなのもあって。だから、できるだけ楽しい文章や絵を送って、得した気分になってもらえたらな、と思ってやってはいるんです。

小川 田中さん自身はこのプロジェクトに参加して、何か変化とか制作への影響とか、ありましたか。

田中 以前は、例えば社会問題とかを直接的に扱うような作品が結構あったりしたんですけど、それがあんまり直接的でなくなってきた感じです。今回も最初のうちは児童養護施設の問題とかを扱ってみようか、と思っていたんですけど、手紙をやりとりするうちにそうじゃなくていいと思ってきて。それで、サミュエル・ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』をモチーフ

にしようと思ってるんです。自分の作品よりも、そういう（古典的な）ものに託したほうが、自分がいいことがもっと未来までとどくんじやないか、と思うようになったんですよ。



小川 引用だったり、フォーマットを借りることの面白みを感じてるんですか。

田中 そうですね。最近、美術史や歴史的な作家の作品について文章を書いたりする仕事をしてるんです。演劇って歴史的な作品が再演されるじゃないですか。シェークスピアとかチャーホフとかベケットとかを、いろんな劇団がどういう解釈で再演したかをまとめた本とかもあったりします。そういうのがすごくいいなと思って、もしかしたらこういう感じで作品を未来に残すという手もあるんじゃないか、と最近思ってるんです。それで、今回考えている問題意識と『ゴドーを待ちながら』が重なる瞬間が結構あったんです。

小川 「とどく」と『ゴドーを待ちながら』がどこか通じるものがあるってことですか。

田中 最初はギャグだったんです。子ども達から返事がずっと来なかったんで、『やぎさんゆうびん』のことを考えて、ヤギは「goat」だなと。『ゴドーを待ちながら』は2人の浮浪者がゴドーという人物を待ってるけどやってこない、という話でゴドーは神（God）のメタファーなんです。閉塞した時代の象徴のように扱われる作品で、ラストは希望があるのかわからない。その部分を、希望をちょっと強めたような解釈で、舞台をつくれるんじゃないかと思ったんです。それで、手紙をやりとりした子ども達が見に来てくれて、いつの日か『ゴドーを待ちながら』を知ったら、そこで（自分がつくる舞台と）リンクするんじゃないかな。

小川 「とどく」にはやりとりする相手と会ってはいけないというルールがある

けど、田中さんは一度だけ「子供の家」に行って遠くから子ども達を見たことがあるんですよね。

田中 元気そうでよかったです。でも、それで急に「解像度」が上がって、手紙の内容を直接扱うのは止めようと思いました。その子ども達がいろんな背景を持っているということを「子供の家」の方から聞きつつも、自分としては未来に希望が持てるような作品をつくりたいと思いました。

小川 田中さんがそういう思いを見出したのは、やはりこのプロジェクトを経たからですね。

田中 その子ども達にはとどかかかもしれないけど、(展覧会を) 見に来た別の人には何かとどくかもしれない。

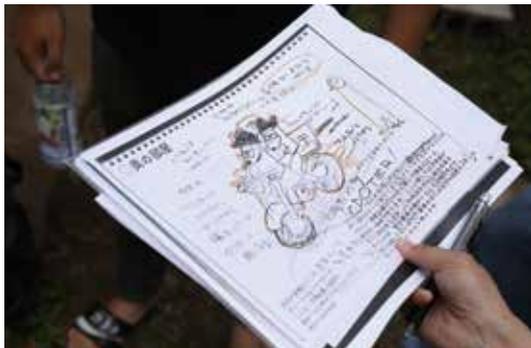
小川 展覧会のイメージはもう膨らませていますか。

田中 『ゴドーを待ちながら』をモチーフにしたコントみたいなものをやろうと思っています。(会場である) 東京都渋谷公園通りギャラリーの目の前にPARCOがあるので、「PARCO 劇場前劇場」ってな感じで、やっぱりテンション上がりますよね (笑)。

小川 会期中に田中さんが舞台の上で演じるんですね。そうすると、やりとりしていた子ども達が来てくれて、「ついに対面」みたいなことが起きたら感動的ですな (笑)

田中 自分のコントはさして面白くないので、「こんなくだらない人だったんだ」みたいになるかも。

小川 それはそれでね、いいですけど (笑)。



「とどく」展の展示プラン

アトリエビジット

絵と言葉 それぞれから生成するイメージ

齋藤春佳 (美術作家)

全編はYouTubeへ
(英語字幕付)

手話通訳付き



制作中の大型絵画

小川 今日 齋藤春佳さんのアトリエにお邪魔しています。知り合ってから長いんですけど、アトリエを訪ねるのは初めてです。齋藤さんは映像とか、インスタレーションもやっていますが、やはり絵が制作の中心にあるんですか。

齋藤 そうともいいきれなくて……。絵はフォーマットが決まっているので、キャンバスの中は見る場所で、外はそうじゃないというのが自明になっているという点で、やれることが多いんだけど制限もあって。それだけじゃないことが自分の中で浮かんできたときに、他のメディアを使うことが多いですね。

小川 齋藤さんの絵の特徴として、ちょっとした文字が入ってきたり、どこかで見たであろうワンシーンが入ってきたりするのが印象的です。それは意識的にやっているんですか。



齋藤 具体的な作品の話をする、10年くらい前に、布に思い出したものをパンパン描いたことがあります。それを平面として見せるのではなく、天秤の片方に取り付けて、もう片方には重りを載せられるようにした作品です。重りが載っていないときは、布は床に落ちています、重りを載せると布がパッと上がって絵が見えるようになります。私が見た記憶はこの空間にはもうないんだけど、思い出すことができる。そこに期待できるというか、希望が持てるという感覚があります。記憶の中にあるものを描くことが、目の前にあるモチーフを描くことよりも、自然にできることなんだなあ、とそのときは感じました。頭の中にしかないんだけど確かにあるものをモチーフとして選択したときに、テキストとか映像とか、スナップショット的な風景のかけらみたいなものが出てくるようになったかな。

小川 それは自分の中の具体的な記憶みたいなものが画面に定着しているということですか。

齋藤 うーん、そうですね。モチーフの正確性は求めてないというか……。線を描いたり、色を塗ったり、それによって空間が生まれたりして、二次元の中でいろんな次元を生むことができるみたいな感じですよ。

小川 記憶だけなのか、それともイマジネーションも混ざっているのですか。

齋藤 基本的には具体的な記憶ですね。でもそれが、本当にあった出来事に限らなくて、でもある意味、本当にあった出来事なんだけど。(例えば) 夢の記憶は、夢でしか経験していないけど、でも経験はしてるという意味では、現実的に存在したみたいなことです。

小川 そういう記憶や夢が作品になる、ならないというのはどうやって決めているんですか。

齋藤 なんとなくですかね。でも、最近思うのは、リアリティーみたいなものが自分の引っかけりとして存在するなあ、と。リアリティーって思い浮かべるのは人それぞれだと思うんですけど、自分にとっては、具体的にいうと、歩いているときにある風景を見る。そのときに「この瞬間の自分ではないがこの風景とこんなふうには出会えなかった」と感じると、作品にしたいと心が動くのかなって気がします。

小川 言葉と絵の関係性について、自分で考えたことはありますか。

齋藤 うーん、考えたことは……あります。前は遠慮がちに、絵の一部にそのときに思ったことが線と同列に表れるくらいの雰囲気描いてたんですが、最近はおうちょっと積極的にテキストを絵の中で扱うことが増えてきました。絵を見る人に、言葉を図として見る瞬間と読む瞬間が明滅するみたいなことが起こると思っていて。何かを思い出したときに、ここまで思い出した、でも、ここまでで終わったからここまでしか表れていない、みたいな描き方をしていることが結構あって。そういうモチーフの表れ方と言葉から生成するイメージとか、頭の中に流れる音声の表れ方が、それほど離れたものじゃない感じで扱えそうだなって感じがあるので、開き直ってテキストを(絵の中に)描いています。

小川 「とどく」プロジェクトで、僕が齋藤さんに声をかけたのは、絵画と言葉を両方使える、うまく行き来できる作家だと思ったからなんです。ろうの大学生6人と手紙をやりとりされていますが、これまで先ほどのようなりアリティーを感じて作品をつくってみたことはありますか。

齋藤 食べ物の宅配サービスでアルバイトしている方がいて、「いろんな風景が見れてすごく楽しい」みたいなことが手紙に書いてありました。最近焼き物もつくっているんで、その手紙をもらったとき家にあった花をこちら側、その大学生が宅配で行く先の風景を妄想して向こう側に描いた壺をつくりました。



最近は陶芸も手がけている

壺だから2つの面を同じ瞬間には絶対見られないじゃないですか。そういう感じがしっくりきています。

小川 齋藤さんとの手紙のやりとりがそういう形で作品として表れてくるのは、相手の人達にとって不思議な体験をもたらすと思います。

齋藤 陶芸は、焼かれて出てくるまで仕上がりが不明だから、それにも救われている面もあります。思ったようにイメージがでなかったり、変になっちゃったりもするんですけど。手紙を出しても思ったようなレスポンスが来るかどうか分からないとか、ちょっと待つ時間が生じるとかいったことと、何か、あいまっているというか……。

小川 ろうの学生達との手紙によるコミュニケーションが、制作や齋藤さん自身に与えた影響を感じたりしますか。

齋藤 うーん、感じすぎて何からいっていいのかわかんないけど(笑)。相手がろうの方っていうことが、自分の中でだんだん薄れてきて。例えば、好きな音楽を尋ねられて、ろうの方でもわかりやすい音楽みたいなことを考えないで、自分が好きな音楽をそのまま書いた瞬間がありました。いいのかわかんないけど。ろうの方が好きだという音楽やミュージシャンは、総じてビジュアルも含めて楽しませてくれる音楽が多めなんですけど、自分も視覚的イメージを抜きにして聞いているわけじゃない。なんていうか、心象風景だったり、その歌手が歌っている感じが頭の中に浮かんでいるということは、聞こえる、聞こえないに関係なく起こっているよ、ということを手紙に書き留めたこともありました。

小川 そういうやりとりのなかで、お互いに何かをとどけて、変化がもたらされる。そのうえで、作品ができあがってきたことが伝わると、作品の見え方も変わるし、より想像が膨らむのかもしれない。



本棚の一角



棚に掛けられた小型のキャンバス

アトリエビジット

「やばい状況」をアートで解きほぐす

大木裕之（映像作家・現代美術家）

全編はYouTubeへ
(英語字幕付)

手話通訳付き



大木裕之のアトリエ兼住居

小川 今日は高知の中土佐町上ノ加江におじゃましています。いつもは、アトリエの中で撮影してるんだけど、特別バージョンで外を歩いています。大木さんがこんないい所に住んでると思ってませんでした。

大木 高知は1991年からだから32年目。久礼っていう中土佐町の中心部に20年いたんだけど、その家を壊すことになってここ(上ノ加江)に来たの。ここに家を借りる運命というか、因果を常に考えているところ。

小川 何かがあるってことですか。

大木 そう。自分が世の中に対してやる何かを感じるっていうか。何か必然性

も感じるわけよ。「とどく」と一見つながらないようだけど、……でもちゃんと「とどく」(のビデオレター)で送ったもんね、ここの映像を。わかったでしょう、さっき。

小川 わかりました。こちら辺の映像を使ったんだ。

大木 あんなちょっとの映像なのに(笑)。だから、何かやれることってあるじゃないか。自分

じゃなかったらできないことで、世の中にとって何らかの価値があるんじゃないかなって思ってますし、いまのシチュエーションも常に悩んでるし。

小川 今回は(ビデオレターを)やりとりしている相手がいる、その人達からここに映像がとどくのは、それはまた面白いですよ。

大木 彼らに僕の映像がどうとどくのか、という意味は……。アートだったら僕の持ち味はあるんだけど、今回の相手はそういうのと関係ない人達だから、ある意味もっと本質的に、今の日本で生きていくときに必要な何かがある気がするんですよ。

小川 大木さんは、「ピアサポートネットしぶや」(支援団体)を通して、「ひきこもり」の人達とビデオレターのやりとりをしてるわけですけど、大木さん的には何か意味があったんですよ。

大木 上ノ加江にだって(「ひきこもり」の人は)いるわけですよ。いまメディア社会とか、グローバルとか資本主義とかと関係ないようできて、実はものすごい支配もされているわけですよ。都会中心の高度成長で、ここもすごく生きづらくなっているし、若者がいづらくなっている。

小川 大木さんはもともと東京の人で、東京でも制作しているじゃないですか。こういう、地方の自然の豊かなところと東京を往来することって自分にとって重要なんですか。

大木 そうだけど、逆にこっちがいいっていいたいわけじゃないんだよ。最近の



大木裕之(右)と小川 希ディレクター

ネイチャー(への関心)みたいなのも僕は微妙だと思ってんだよ。うまくいえないんだけど……。ここも過疎が酷いのよ。

小川 大木さんの作品で、直接的に政治とか社会状況とかに言及はしないんだけど、背景にはそういうことも含めて作品を構想するんですか。

大木 もちろん、それが基本だよ。でも説明するよりも、(小川さんのように)来てくれるのが一番早いんだよ。ここもメディア社会で、テレビをずっと見ているわけ。東京の悪がもうパンデミック状態なの。特にコロナになり、あらゆる角度から最終的な段階に来ていると僕は思ってます。

小川 映像の問題はどうなんですか。

大木 映像がどういう形で有効になるか、何が出来るかというのはすごい大事なことだと僕は思ってます。そうすると、今回の「とどく」が本質的すぎて、僕がどう映像で具体的に突っ込めばいいかっていうところが、すごい難しい。やりがいがあることなんだけど……。だから、ギリギリの所でやっております! あっ、こっち。ちっちゃな浜があるから。(浜を眺めながら)ここにわりと来るのよ。

小川 東京の人達とは、まったく違う環境だけど、映像という同じフォーマットでやりとりしてるわけですよ。

大木 僕の映像は、いかにも「高知ですよ」じゃないでしょ。そういうところのバランスはあるよね。なんかよくわかんないけど、見たら「あ〜」ってなるみたいな。真面目に言えば、高知は面白いところだと思うなあ。

小川 いまは映像が全世界を覆っていて、みんなどっぶりそれに浸っちゃってる。大木さんはそれを否定的に見てるんですか。

大木 いいとか悪いじゃないの、もうマスメディアが機能不全で、誰もコントロールできないシステムができちゃってる。映像が機能不全を脱するために何が出来るのかを僕は考えてるわけ。行き詰まって滞っちゃってるところを、鍼灸とか整体みたいに、少しでも活性化するっていうのかな、それを今回のプロジェクトのやりとりの中でやろうとしてるわけよ。でも、整体みたいに歴史やマニュアルがあるわけでもないから、試行錯誤が要るんだよ。絵画だったらある程度の歴史があるけど、映像は20世紀に出てきてパンデミックみたいにバーって広まって。それが、変異株じゃないけどどんどん

変わって行って。もう誰も対処できてないわけよ。

小川 「とどく」のプロジェクトは今年で3年目で、秋に展覧会があるじゃないですか。そのイメージはできてきてるんですか。

大木 リアルなところを見せたいです（笑）。僕は基本的にね、いま世の中はやばい方向に向かっていると思うのね。そのなかである種の精神的なことを求めるっていうか……。「ひきこもり」っていうことをどう形容するかってのは難しいと思うんだけど、僕らみんながいまやばいところにいるから、「ひきこもり」の人達が特別な人じゃないって感じがあつて。

小川 大木さん自身が（「ひきこもり」の人達と）やりとりしたなかで、感じる事とか、見えたこととかあるんですか。

大木 映像を送ってくれた人達には会えてないけど、サポートの仕組みとかが現実どんな風になっているか、話を聞いたりした。やっぱり、いまのこの世の中で生きてるっていうか、そういうのも含めてリアリティーは感じたよね。それを展覧会でどう表していくのかっていう課題もリアリティーが出ましたね。その答えは簡単には出ないものだけど、展覧会をやることの方みたいなのに助けられて、これからの可能性に踏み出せる。

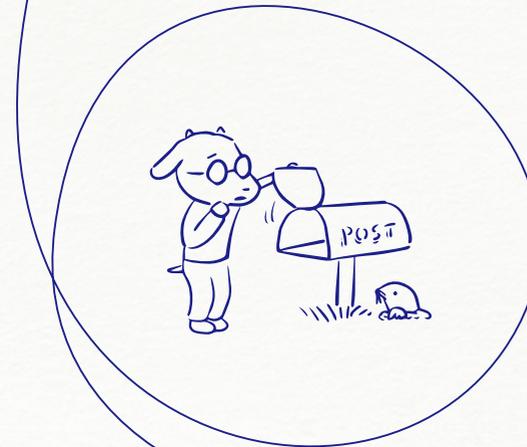
小川 最終的に展覧会に出てきたものを、ビデオレターをやりとりした人達が見てくれたらね。少なくとも「ピアサポートネットしづや」の方々は見られると思うんで、その感想を通してでも、大木さんとのやりとりがこうなつたっていうところを感じてもらえたらいいですね。

大木 僕はやっぱり会期中のアクションも力のひとつで、そういうところでリアリティーが出てくるんだよね。

小川 それも見どころですね。



久礼の鮮魚店で



本プロジェクトの参加作家である田中義樹、齋藤春佳、大木裕之が、プロジェクトをめぐる、さまざまな出来事や想いを綴るブログ。2021年4月からの3年間、成果発表展の会期中も含め、定期的に更新され続け、それぞれの作家達のプロジェクトの現在地を探ることができる。多様な背景を持った人々との手紙やビデオレターを通じたコミュニケーションから、作家達が何を感じ、何を想うのか、細かな心の動きを読み取ることもできる文章が並ぶ。ブログは三者三様の言葉で記されており、各作家の作品世界を知った上で読むと、作品が誕生するプロセスを目撃しているようでもあり、大変興味深い。成果発表展と合わせ、本プロジェクトの根幹をなす、非常に重要なアーカイブとなっている。

ブログ

想いはとどくか。期待と不安、喜びと気づきの 700 日。

田中義樹
ブログ



齋藤春佳
ブログ



大木裕之
ブログ



「ブログ」ダイジェスト



レター／アート／プロジェクト「とどく」に参加した3人のアーティスト（田中義樹、齋藤春佳、大木裕之）のブログから、本プロジェクトに関する文章を中心に選びました。作家名の上の日付は公開年月日です。文章と改行の一部を省略しています。改行を「/」で示した場合があります。

2021/4/30 2020年12月14日の日記から

齋藤 意味あるかどうかわからないけど指文字を覚える。脳細胞の連結を神経側から作り出す感覚。案外物覚え良くて嬉しい。

2021年4月5日

3月になってだんだんとお返事を6人全員から頂いた（人によっては2通目）。最初は6人が同じところにいる、そこに向かって手紙を書いていただけ、一度返事が来るだけで、それぞれの人と自分の距離や場所みたいなものが、どんどんばらけてきている感じがして、面白いです。

2021/4/30 1 今、〈ピアサポートネットしぶや〉の相川さんと電話でお話しをした、春の午後／〈とどく〉〈おくる〉／《まじえつつ、生じる》

大木

5 自分のことを駄目だと思う人さまさまざまな状況／が、とどく！！
7 大問題のこともこのプロジェクトでゆっくりとみなさままで考えてイキたいと思います。

2021/4/30

田中

児童養護施設の「子供の家」の方達と文通を始めることになりました。始まる前からワクワクしていました。1月に入ってからまず自分から二人に手紙を書きました。自己紹介と、最近はどういうことをしていますか?とか、何が好きですか?とか、質問ばかりの手紙を書きました。もうすぐ4月、今も二人から返事は来ていません。もう一回手紙を書いてみようかななんて思ったりします。もしかしたら、それも急かしているみたいでうざったいのかしら。このやきもきも文通らしくていいなあと思っています。

2021/6/7

田中

4月末のこと。もう手紙なんてこないかと思っていたから、少しビビってます。待っていたら、手紙がきた。でも、とにかくよかった、うれしいなあ。最初に送った手紙に、好きなことはなんですか?と書いたので、返ってきた手紙の中でお勧めされた音楽を聴いています。やはり、最初の探りさぐりのやりとりは「ご趣味は?」とかから始まるのですね。



2021/8/6

大木

つたわることは / あなた個人に / ではなく / あなたは個人ではなく / わたしの言葉はわたしのものではなくて / これは所有概念のはなし / 話しの所有概念 / アイデンティティ / 言葉の所有概念 / 言語の所有概念 / 気持ちの所有概念 / もうひとつ / 帰属概念 / からからから
キゾクガイネン
ひかりは / おとは / 文字は / ころは
あなたのころは / あなたのものか / わたしのころはやはりわたしのものではないもの / わたしのことばはやはりわたしのものではないもの / から

2021/10/12 小学校高学年の女の子との文通が新しく始まりました。漫画が好き
田中 なみみたいで、手紙にも漫画の話を書いたりしています。他にも文
通相手の子が猫が出てくる漫画が好きと書いてくれたので、手
紙にも猫を書いてみたりしました。結構可愛くかけました。喜んで
くれるかしら。

2021/10/31 先日の小川希くんとトークで /〈会話へのテロ〉 / という最近ぼく
大木 が考えているひとつの /〈vision〉 /
も、口に出した
そのことは、この とどく プロジェクト / への指針としてなにか
を / もたらせうか の
ブログ / の言葉 / 会話の
言葉 / 映像の中に登場する言葉 / 映像の中に登場しない言葉
かわされる〜〜 / かわされる〜〜
あなたと僕のあいだでかわされる映像には / 会話とちがう会話の /
多くの、未来に輝くささやかな風と / よごれとも呼ばれる、ほこり、
ほこり、 / わあ ほこりだらけに、 / 舞い、舞い、 / 音もたてる く
らい に / ぶりゅうし ぶりゅうし / 讃歌 参加 あちらこちらの、
 / さんか、さんか

2021/12/9 今やりとりしている小学生の女の子から
田中 の返事は爆速で来ます。その子は
絵を送ってくれるのですが、絵の
リクエストも送ってくれます。今
回のリクエストの内容が面白くて
「ドーナツに挟まっている夢を見
ている猫」でした。なかなかいいお
題だなあと思いました。次のお題では、
どんな猫になるのでしょうか。それとも猫で
はないかもしれません。



2022/1/17 2021年8月1日の日記から
齋藤 手紙やりとりしてるHちゃんのダンスを見に出かける。アイフォンの
カメラでスタンバってたらHちゃんのグループの名前が呼ばれて、
出てきた人数がその日最大で驚いた。それで自分はなぜか泣いてい
た。その中の誰かはわかんないけど、手紙だけでやりとりをしてき
た相手が本当にいるっていうこと自体が胸に迫ったのか、演目に感
動したのか。理由を言葉にできないまま、ただ泣いて見ていた。

2021年9月18日の日記から
起きたら変なモスキート音みたいに一定の音が区の防災スピーカー
から流れ続けていて、雨がざばざばと降っていて、不穏な感じだけ
を感じる。言葉はない。

先に起きていたに「何？」と聞くと
「わかんない、河川が氾濫しそうなんじゃない？ こんな放送だけ
じゃ駄目だよ、なんでちゃんと情報を書かないんだろう、耳が不自
由な人とかどうするわけ？」と多分ケータイでwebを見ながら言っ
ていて、
「そうだと思います、手紙にも、社会の方に障がいがある、耳が聞
こえないことを個性として捉えてもらえることはそれで嬉しい、け
れど、そのままでは生きづらい社会の方に障がいがあるんだとし
たら、それはなくすべきだって、書いてあったのを、私は読みまし
た」と寝ぼけ頭で言った時に初めてその書いてあったことから受けと
ったことを言葉にして自分の耳で聞いたことで、なんかハッとしま
がら喋った。
「本当そうだね」

2022/1/19 2022年 / さて、今あらためて、昨年「とどいた」映像を / 僕の事
大木 務所で毛布にくるまりながら僕のiPhoneの iCloud のファイルで
みて、 / 「とどく」 / 映像が心にとどく / 声が心にとどく / 何が届
いたのかを言葉であらわすことは、自分の中でもなかなか言葉
にできないが、 / しかし、 / とどいた。 / それだけでうれしいものだ！

とどいたようでとどいていないこともあるし、/ というか、とどきかたにもいろいろあって、/ とどいてうれしいと思えることは、/ 特にそれが「映像」で、の場合・・・って・
ほんのすこしでも、その人にふれることができた、/ 映像で・

2022/3/17

大木

春になってきましたね、冷えもしますが、/ ここは岡山。
アトリエに戻る道を歩いていると急に死のことについてこのブログにキシてみようと思いつき、山ぎわの駐車場に腰おろしてキシはじめると、/ すぐに、通りかかったお婆さんに、/ 「こんなところにすわってたらあかん、ここで人が焼け死んだん～～こうしてお花も、、」/ と、確かに駐車場の端に花が添えられている。/ 駐車場もちょうど家一軒分ぐらいのひろさ。/ 「霊というものは・・・」/ と、お婆さんは通り過ぎていきながら、
僕は缶ビールと iPhone を持って近くの草むらに寝ころんで、あたたかいヒをあび、むかしの山と向きあいつつ、こうして、/ さらに死のイメージが、ゆたかに、まどろみに、欲情に、ことばに、
みとめる とき
赤いキシャが通り過ぎていった / 人をのせて、
いのちに礼をつくす・
宿命 努力・ふんばり・ 愛

2022/5/25

田中

4月にギャラリーの担当者の方と子供の家を訪問しました。手紙のやりとりだけでは、どうしても子供たちがどうしているのかイメージできず気になります！当日、子供の家施設のことや、子供たちの生活、最近の児童養護の話まで色々聞くことができ、手紙によく書いてあるけどイメージできなかった言葉や情景の解像度が一気に上がりました。帰りに外に出るとグラウンドで子供たちがバスケットをしていました。本当は、やりとりしている子たちに「僕だよ～！」と言いたかったのですが、会わずにやるプロジェクトなので何も言わず去りました。企画とはいえ切なさがありましたね。

2022/6/8

齋藤

2022年5月12日の日記から

みかん(去年死んだ実家の飼犬)に会いたいと思って泣きながら起きる。

相手がおじいちゃんとかなら、まだ、物理的に会えていない間もわたしのことを何か認識してくれていたという感覚がなくはないけど、相手が動物だと、こっちがいくら思っている、目の前に思い浮かべていても、その距離が隔てるものは大きすぎて、自分のことをみかんは思っただろうか、見つめ返されただろうかという疑問が消えない。見つめ返されないことが、会えなさだと思う。そうなんだとわかった。

2022/8/4

齋藤

2022年6月19日の日記から

指文字で話している手を撮影して、それをYouTubeの限定公開動画としてアップして、URLを受け取った本人しか見られないようにして、QRコードにして印刷したものを物理的に手紙として送ってみた。お返事が全然来ない人に一方的に。いないかもしれない宇宙人に向けて飛ばす電波の通信みたいなイメージ。



2022/9/8

田中

越後妻有で開催されている大地の芸術祭に作品を作りました！廃校になった小学校をリノベーションしたゲストハウスにそのまま残っている体育館が展示会場でした。体育館のステージにインスタレーションを作ってそこでコントライブをするというもの。体育館はもちろん超暑いのに衣装はスーツで、一回ごとにシャワーを浴びたくらいには汗が出る。公演の合間にも締め切りの原稿描く仕事をする。みたいなルーティンの後、東京に帰ってからもうまくできついで。みたいな夏。10月からはついに「とどく」の成果展なので9月はまたも作品を作り続けることになるでしょう。

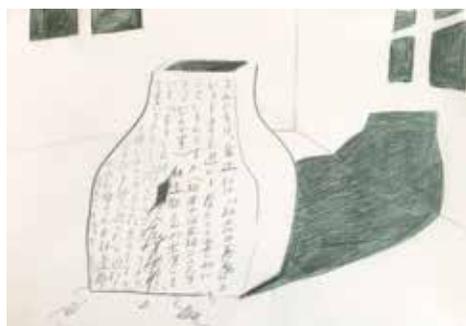
新潟にいる間に6通くらいの手紙が来ました。ほんの少しですが、子供たちからの手紙の距離感が近くなった気がします。小学校の時に仲良くなった友達がこんな喋り方をしていたような気がするなどという文体に嬉しくなったりしました。手紙を書くのは楽ではないですが、終わるのも寂しい気がしました。

2022/11/10 2022年8月16日の日記から

齋藤

Tさんから、指文字へのお返事が初めて来た！字で書いた手紙で来る。すごく嬉しい。

お返事で、すごい素晴らしい最近の近況を教えてくれてそれが壮大なスケールでキラキラした描写で、彼女が最高の出来事を経験しているということがわかった。それは私が今いる空間の外にあって、その気持ちだって共感しきれないけれど、そのキラキラした様子は、ここまで伝わってきた、嵐が去り、虹がかかるような



心の動き、それを、文字を通して見せてもらって、それだけでもうありがたかった。

2022年8月27日の日記から

赤ちゃんが産まれた。血を失いすぎて殆ど動けない。なったことのない体調。トントントントントン触って小さく話しかけて遊んでいたら、ごきげんがおさまって、びっくりした。聞こえているのかわからないけれど、見えているのかわからないけれど、ごきげんがなおった。きっとこのことを忘れるけれど、会えた。きっとこのことを彼が忘れるのは、今、覚えないのではなくて、思い出すときにはもう違う思い出し方をする体になっているから、思い出せないだけで、きっと、今起きていることをちゃんと全部わかっている、分かっことない形でわかっているんだということが、よくわかった。

2022/11/17

田中

ついに「とどく」の展覧会が始まりました。この成果展と手紙を交換するプロジェクトをどう結びつけるかが難しく、なんだかかなり悩んで作った展示になったなあと思います。まだ悩んでいます。それと展示が始まってからすぐに子供の家にワークショップをしに行きました。ついに手紙を交換した子供たちに会いにいったわけです。実際に会うと、この企画も終わりに近づいている感をもものすごく感じてしまいますね。ずっと会わない縛りで手紙のやりとりをしていたので本当に会っても良いものなのだろうかと思ってしまいました。

2022/11/25

大木

〈とどく〉展がはじまってからひと月と十日以上たったところ・ ・の / ぐる ぐる ぐる / 中盤、高知から東京きて、ともかくは展示開いている日は渋谷 / 会場に通い「更新」しよう〜この「更新」という言葉はなにかしっくりこなくて・ ・ ・ 「重ねて」イキ・ ・ と、 / 先週 11/8 (火) → 11/13 (日) / の 6 日間・ / 今週 11/15 (火) → 11/18 (金) / (昨日まで) の 4 日間・ / の、「のべ」10 日間通ったところなのですが、いったいなにが「おこなわれたのでしょうか」「おきた」のでしょうか・ ・ ・ / ともかく「イキ」ました。 / 重ね〜〜か さ ね / た、のでしょうか / かさねたのですがなにがかさなったのか、 / ときがかさなった? / イキがかさなった? / 「息」がかさなった?? / 「息」ってかさなるもん?? / あ あ いき いき / 「声」をかさねてきよう、あした、









西島子佳
SHIMAZUKA







田中義樹
TANAKA Yoshiki









わたしからあなたへ、あなたからわたしへ
From me to you, from you to me.

レター／アート／プロジェクト「とどく」展
Letter / Art / Project "TODOKU" Exhibition 「とどく」展

2022年10月8日(土)～12月18日(日)

会場	11.000.000	会場	11.000.000
受付	10.000.000	受付	10.000.000
入場	無料	入場	無料
お問い合わせ	03-5561-1111	お問い合わせ	03-5561-1111

主催 日本郵便株式会社
協賛 東京都、東京都教育委員会、東京都立美術館、東京都立総合文化センター、東京都立芸術センター、東京都立国際交流センター、東京都立国際交流センター、東京都立国際交流センター





言葉の廊下

廊下の壁に散りばめられた言葉の数々は、齋藤春佳と田中義樹が手紙を交わしている相手からの、また相手への一文を切り取ったものです。クロストーク内で齋藤は、筆跡から相手のキャラクターを想像できると話しています。手紙の一部分ではありますが、その文面からやりとりを想像してみてください。

Word Corridor

Words scattered on the corridor's wall are sentences clipped from exchanged letters of Saito, Tanaka, or their correspondents. In the cross talk session, Saito said she can imagine the character of the correspondent from handwriting. Let's imagine their character from the sentences, though they are a small part of the letters.

小川 希（本展キュレーター）

大木裕之（映像作家、現代美術家）

大木裕之は1980年代後半から現在に至るまで精力的に映像作品を発表し、個展をはじめ数々の国際映画祭への出品や受賞歴もあるなど、世界的に活躍を続ける映像作家です。インスタレーションやドローイングやパフォーマンスなど、映像以外の表現でも広く知られています。レター/アート/プロジェクト「とどく」においては、「ひきこもり」の若者達にビデオレターを送ることから大木のプロジェクトは始まりました。彼らにビデオレターを届けてくれたのは、「ひきこもり」の子どもや若者の支援を行う「ピアサポートネットしぶや」の方々。今回のプロジェクトにおける特筆すべき大木のアクションとして、「ひきこもり」の当事者である若者達とのやりとりに加え、仲介役となっていた「ピアサポートネットしぶや」との交流が挙げられます。大木は「ひきこもり」の方々とは並走しながら裏側で彼らを支え続ける職員の方々の活動や人間性に魅せられ、彼らの職場を幾度となく訪ねることとなります。そうした交流から、「ひきこもり」の当事者が抱える問題が、私達が生きる社会が抱えている数々の問題と密接に結びついていることが徐々に、しかし、はっきりと見えてくることとなります。本展において、大木は、プロジェクトの期間に自身が撮り溜めた映像に加え、ビデオレターのやりとりの中で「ひきこもり」の若者達が実際に送ってきた映像、そして「ピアサポートネットしぶや」での交流の様子も私達に公開しています。そこでは、「ひきこもり」という現象が、決して他人事ではなく、私達の生きている社会と地続きであることを気づくことになるでしょう。目を閉じ、耳を塞ぎたくない、このヒリヒリとした現実を、大木は何ら怯むことなく等身大の目線でカメラを向け続け、私達にとどけようとするのです。

齋藤春佳（美術作家）

齋藤春佳は、絵画を軸としながら映像やインスタレーションまでを手掛ける作家です。レター/アート/プロジェクト「とどく」では、聞こえない方との交流を希望したことから、彼女と6名のろうの学生との手紙のやりとりが始まりました。齋藤はまず夢の話について綴った手紙を学生達みんなに送りました。それは、夢の中では音という概念を気にせずに、共通の認識、場所、瞬間をつかむことができるのではという思いからの手紙でした。そうして始まった手紙の往復は、好きなドラマや音楽の話など、それぞれの個性や興味のもとで展開されていきます。聞こえる自分と聞こえない相手、両者の共

通点を探ることから始めた齋藤ですが、いつしか相手の境遇や生きる世界を完全に理解することなどではできないと感じるようになっていきます。ただそれは他者と分かり合えないというネガティブな感覚では決してありませんでした。それぞれが違う場所に生き、別の世界を見ている、そうした異なる存在の者同士が何らかの形でつながることで、立ち上がってくる「もの」や「こと」があるのではないかと。成果発表となる本展で、齋藤は、絵画や映像に加え、彼女にとって初めての試みとなる焼き物の作品を発表しています。そこにはろうの学生との手紙のやりとりの中で出てきた情景や言葉が描かれています。焼き物には表面と裏面があり、当然のことながらその二つを同時に見ることはできません。ただこの表と裏を持った焼き物の構造こそ、彼女が本プロジェクトでつかみ取った感覚、すなわち、「相手のことを完全に理解することはできないが、それでもなお、異なる位相のあちら側とこちら側が交わることでのみ立ち上がってくるもの」のメタファーなのかもしれません。完全に一致はしなくとも、二つの世界が出会ったことで立ち現れるもの、それは、絵画であったり映像であったり、焼き物であったり、そして、手紙に綴られた文字という痕跡にも言えることかもしれません。「とどかないからこそとどくもの」齋藤の作品は静かにその事実を語りかけてきます。

田中義樹（美術作家）

田中義樹は、彫刻やインスタレーションを制作しながら、漫画家としての顔もち、さらにはお笑いコンビ“そんたくズ”としても活動を続けるなど、マルチな才能を持ち合わせたアーティストです。レター/アート/プロジェクト「とどく」において、田中は子ども達との交流を当初から強く希望し、児童養護施設「子供の家」の協力の元、プロジェクトをスタートさせました。「とどく」では、プロジェクトの経過をつづるブログを参加作家達が定期的にアップしてきたのですが、その最初の記事において、文通に参加しても良いと手を挙げてくれた子ども達に、田中が黒やぎと白やぎの彫刻を制作し手紙に添えてそれらを送ったエピソードが載っています。その後、子ども達からの返信を待つのですが、なかなか返事はこなかった。その時に感じた、不安でありながら希望を持って待つ、手紙を書いたことのある誰でもが知るあの独特の心境をもとに、今回上演される『山羊は手紙を待ちながら』の着想を得たといえます。この舞台はアイルランドの劇作家サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』が下敷きとなっています。田中は得意のユーモアで、「ゴドー」と「ゴート（山羊の英語訳）」を掛け合わせ「とどく」のために新しいストーリーを作り上げました。はたして手紙は“とどく”のか。山羊をモチーフにした新作の彫刻作品の数々と共にぜひその顛末もお楽しみいただければと思います。以前、田中が発した「本プロジェクト全体を通じ、子ども達がこれからやってくる未来へ対して抱くポジティブな感覚をとどけられるような表現しかしたくない」という言葉が、今回の舞台や彫刻作品の読み解きの助けになるかもしれません。

Exhibition

Introduction from the curator

OGAWA Nozomu (Curator)

OKI Hiroyuki (Videographer and Artist)

Oki Hiroyuki is an internationally active videographer, who has released video works energetically since late 1980s to the present, and is experienced in screening his works in his solo exhibitions and many international film festivals, where he was awarded sometimes. He is also widely known for non-video works, such as installations, drawings, and performances. In the Letter / Art / Project "TODOKU", Oki's project started with sending a video letter to young people who are "hikikomori" (shut-in people). People who delivered his video letters to them are the staff at "Peer Support Net Shibuya", which is an organization supporting "hikikomori" children and young people. In addition to Oki's interaction with young people who are shut-in, one of his notable actions in this project was his interaction with people at "Peer Support Net Shibuya", who kindly acted as an intermediary. He was fascinated by the activities and humanity of the staff, who had been working side by side with those "hikikomori" people and supporting them behind the scenes, and it made him visit their workplace so many times. Through these interactions, it gradually became clear that the problems faced by "hikikomori" people are closely connected with many problems faced by the society where we live. In this exhibition, as well as video footage he shot during the project term, Oki shows actual videos which "hikikomori" young people sent to him in the video letter exchanges and scenes of their interaction at "Peer Support Net Shibuya". You will find that the phenomenon of "hikikomori" is never the affair of someone else and is directly connected to the society where we live. Oki points his camera to this tingling reality which makes us close our eyes and cover our ears, from his natural viewpoint without any fear, and tries to deliver it to us.

SAITO Haruka (Artist)

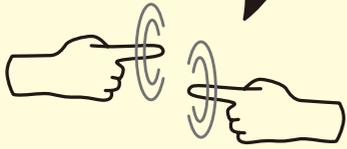
Saito Haruka is an artist who primarily makes paintings, while also making videos and installations. In the Letter / Art / Project "TODOKU", she wanted to communicate with people who cannot hear, so she started letter exchanges with 6 deaf students. At first, she sent a letter about her dream to all students. It was written with her hope that, in a dream, they would be able to get a common perception, place, or moment, without caring about the concept of sounds. The letters were exchanged with their personality and interest, such as about their favorite dramas and music. Although Saito started with finding something common between

she, who can hear, and them, who cannot hear, she came to feel, at some point, that she could never fully understand their circumstances or the world where they live. However, it wasn't such a negative feeling that people cannot understand each other. She wondered if there are some "things" or "matters" which emerge when people who live in a different place and look at a different world get connected in some way as different existences. In this exhibition as the presentation of the project's result, Saito shows pottery, which is her first attempt, as well as paintings and videos. On the surfaces of pottery, scenes and texts from her letter exchanges with deaf students are painted or drawn, but pottery has a front side and a back side so you cannot see both sides at the same time. This structure of the pottery with front and back sides may be a metaphor of the feeling she grasped in this project, that is, "we cannot fully understand the other person, but there are things which emerge only when that side and this side in different phases intersect". Paintings, videos, pottery, and even the traces of texts written in letters could be things that emerge when the two worlds encounter each other, even if they are not completely the same. "Something that reaches there only because it cannot reach there." Saito's works quietly speak of this fact.

TANAKA Yoshiki (Artist)

Tanaka Yoshiki is a multi-talented artist who makes sculptures and installations, who is a manga artist, and who is also active as a member of the comedy duo "Son-takz". In the Letter / Art / Project "TODOKU", Tanaka started his project with support from a children's nursing home "KODOMONOIE", as he strongly wanted to interact with children from the beginning. In "TODOKU", participating artists have been posting a blog about the project's process regularly. In the very first post, an episode was written in which Tanaka made sculptures of a black goat and a white goat and sent them with a letter to children, who raised their hands to join the letter exchange. He then waited for replies from the children, but it took a long time to receive them. He said he got the inspiration of *Goat waiting Godot*, the stage he will play in this exhibition, from that unique feeling he had then of waiting with anxiety and hope which everyone knows who has an experience to write a letter. This play is based on *Waiting for Godot* by Samuel Beckett, the Irish playwright. Tanaka, with his signature humor, created a new story for "TODOKU", mixing up "Godot" with "Goat". Will the letter "reach there"? I hope you enjoy the whole story as well as so many new sculptures with goat motifs. Tanaka once said, "Through this entire project, I only wanted to make expressions which can deliver a positive feeling to children about the future", which may help you to understand the stage and the sculptures in this exhibition.

映像ガイド

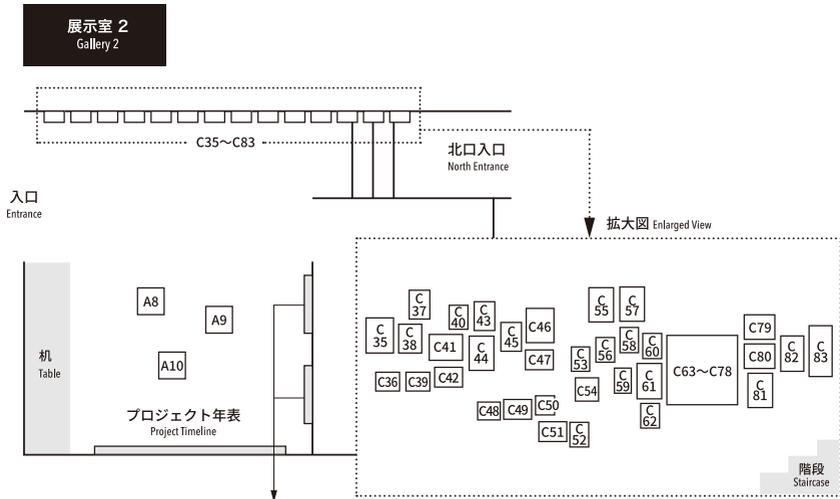
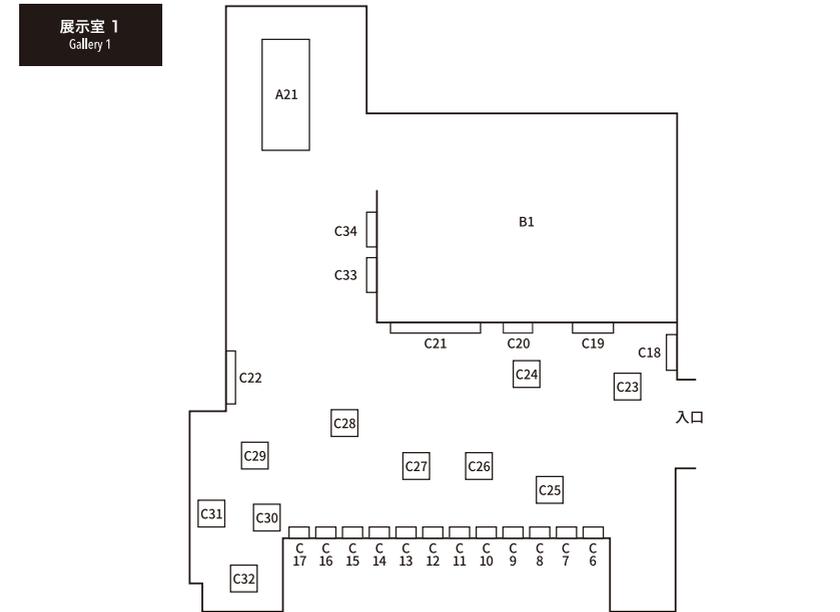
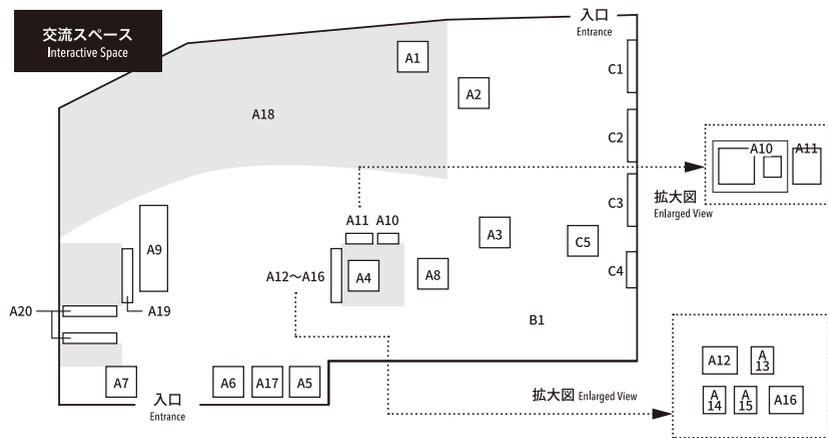
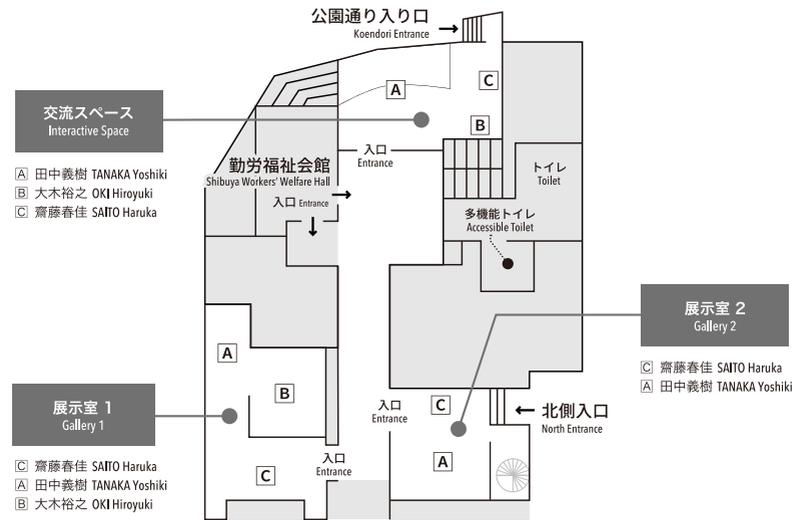


手話の映像ガイドの作成を橋本一郎さんに相談し、齋藤春佳とやりとりをしていた若者に出演してもらいました。また手話通訳の育成も兼ね、手話を学んでいる学生に手話から文字に変換してもらい、音声も付けました。手話を主体とした映像ガイドになっています。プロの手話通訳ではない、一般の若者による手話です。



展覧会 / Exhibition
会場図 / Venue Map

全体図 Overall view



アトリエジット映像 約98分44秒 大木裕之、齋藤春佳、田中義樹
 大木さん鶴囲む3 2分7秒
 田中さん「子供の家」でワークショップ 3分23秒
 Atelier visit video 98min.25sec OKI Hiroyuki, SAITO Haruka, TANAKA Yoshiki
 OKI enjoyed table 3.2min.7sec.
 Workshop by TANAKA at KODOMONOE 3min.23sec.



田中義樹

[交流スペース]

- A1 ゴート1 2022 木材、段ボールなど 56.0×95.0×35.0
- A2 ゴート2 2022 木材、段ボールなど 86.0×94.0×38.0
- A3 ゴート3 2022 木材、段ボールなど 45.0×98.0×36.0
- A4 ゴート4 2022 木材、段ボールなど 43.0×110.0×19.5
- A5 ゴート5 2022 木材、段ボールなど 43.0×92.0×42.5
- A6 ゴート6 2022 木材、段ボールなど 71.0×97.0×41.0
- A7 ゴート7 2022 木材、段ボールなど 66.0×11.4×35.0
- A8 馬上の使者 その2 2022 木材、段ボール、塗料、鉛筆 150.0×120.0×100.0
- A9 馬上の使者 2022 木材、段ボール、塗料、鉛筆 本体 100.0×80.0×160.0 台座 100.0×70.0×70.0
- A10 ドローイング(左) 2022 34.5×25.5 ドローイング(右) 2022 29.7×21.0
- A11 ドローイング2 2022 29.7×21.0
- A12 ドローイング3 2022 41.0×58.3
- A13 ドローイング4 2022 29.7×21.0
- A14 ドローイング5 2022 29.7×21.0
- A15 ドローイング6 2022 29.7×21.0
- A16 ドローイング7 2022 35.8×21.0
- A17 「山羊は手紙を待ちながら(ショート)」そんたくズ(田中寿司ロボット、ペットロスター井上) 2022 映像、8分
- A18 舞台「山羊は手紙を待ちながら」そんたくズ(田中寿司ロボット、ペットロスター井上) 2022 20分
- A19 無題 2022 A4 チラシ
- A20 無題 2022 A2 ポスター

[展示室 1]

- A21 ウェイティング・ゴダー 2022 木材、段ボール、スピーカー、電子機器 180.0×100.0×200.0

[展示室 2]

- A22 ゴート8 2022 木材、段ボールなど 70.0×85.0×40.0
- A23 ゴート9 2022 木材、段ボールなど 45.0×83.0×50.0
- A24 ゴート10 2022 木材、段ボールなど 40.0×83.0×40.0

大木裕之

[交流スペース・展示室 1・展示室 2]

- B1 とどく〜ライブインスタレーション on 渋谷公園通りギャラリー
2022 映像、ドローイング等 サイズ可変

齋藤春佳

[交流スペース]

- C1 同じシュロの木 2021 紙、鉛筆 27.5×21.0
同じシュロの木 2021 紙、パステル 17.5×12.0
同じシュロの木 2021 紙、鉛筆 25.2×18.2
同じ種類の木を別々に見る 2021 紙、鉛筆 25.2×18.2
わたす手紙ともらう手紙の間 2021 紙、鉛筆 25.2×18.2
わたす手紙ともらう手紙の間 2021 紙、鉛筆 25.2×18.2
わたす手紙ともらう手紙の間 2021 紙、鉛筆 25.2×18.2
- C2 Kさんから送られてきたシュロの木の写真 2021 写真 5.0×3.0
- C3 同じシュロの木 2021 油彩、キャンバス 53.0×53.0×3.0
- C4 「私が・棄てた・女」より 2021 油彩、キャンバス 18.0×14.0×2.0
- C5 Space(シュロの木) 2022 陶 30.0×25.0×10.0

[展示室 1]

- C6 うしろの正面 2022 油彩、キャンバス 46.5×38.0×4.0
- C7 うしろの正面 2022 油彩、キャンバス 45.0×38.0×4.0
- C8 手触りの影/星側の目(星は見つめ返す、もしくは見つめ返さない) 2022 油彩、キャンバス 23.0×16.0×2.0
- C9 この部屋の最遠平面 2022 油彩、アクリル、キャンバス 25.0×29.5×2.0
- C10 いくつかのスペース 2022 油彩、キャンバス 33.0×24.0×2.0
- C11 それぞれの眠り 2022 アクリル絵具、キャンバス 33.0×42.0×2.0
- C12 触れない犬/触れる風景/触れない絵 2021 油彩、キャンバス 38.0×45.5×2.5
- C13 距離 2022 油彩、キャンバス 34.0×25.0×2.0
- C14 星は見つめかえさない もしくは見つめかえす 電話をかけた人は 電話に出ない人が かけた電話に 出ない人
2021 油彩、キャンバス 38.0×45.5×2.5
- C15 指文字通信/星側の目(星は見つめ返す、もしくは見つめ返さない)
2022 油彩、キャンバス 22.7×22.7×2.0
- C16 自分 2022 油彩、キャンバス 41.0×31.8×2.0
- C17 いくつかのスペース 2022 油彩、キャンバス 24.0×19.0×2.0
- C18 いくつかのスペース 2022 油彩、キャンバス 25.0×21.5×2.0
- C19 いくつかのスペース 2022 油彩、キャンバス 14.0×18.0×2.0
- C20 いくつかのスペース 2022 油彩、キャンバス 23.0×16.0×2.0
- C21 Spaces 2022 油彩、キャンバス 162.0×162.0×4.0
- C22 その雨音に私は気付かない その雨音にあなたは気付かない 2022 油彩、キャンバス 162.0×130.3×4.0
- C23 Space(発語の瞬間/指文字「げ・ん・き・で・す・か」) 2022 陶 13.0×9.0×4.0
- C24 Space 2022 陶 6.0×4.0×3.0
- C25 Space(泳ぎながら喋る) 2022 陶 8.5×6.0×4.5
- C26 Space(眠り) 2022 陶 35.0×26.0×11.0
- C27 Space(海亀) 2022 陶 11.5×11.5×5.5
- C28 Space(指文字「め」/星側の目) 2022 陶 34.0×26.5×12.0
- C29 Space(雨音) 2022 陶 30.0×23.0×11.0
- C30 Space 2022 陶 6.0×5.0×4.0
- C31 Space(自室/出前館のバイト) 2022 陶 16.0×12.0×6.0
- C32 木の時間の器 2021 陶 20.0×16.5×6.5
- C33 うしろの正面(あなた) 7分28秒
- C34 うしろの正面(わたし) 7分46秒

[展示室 2]

- C35 その雨音に気付かない 2022 紙、鉛筆 29.7×21.0
- C36 私はその雨音に気付かない あなたはその雨音に気付かない 2022 紙、色鉛筆 12.8×18.4
- C37 うちの窓 2021 紙、鉛筆 29.2×21.0
- C38 指文字手紙(動画)へお返事がきた・8月18日 2022 紙、色鉛筆 25.9×18.2
- C39 Spaces(これから書く手紙の影) 2022 紙、色鉛筆 15.0×21.5
- C40 触れるんだけど触ってません(葉・星・犬・月) 2022 紙、色鉛筆 21.4×15.0
- C41 窓に外から桜の木の葉っぱがすこいせまってきていて、多分手をのばせば触れるんだけど触ってません(今のところ) 2022 紙、水彩色鉛筆 21.0×29.7
- C42 触れるんだけど触ってません 2022 紙、色鉛筆 18.2×25.7
- C43 動物に文字は読めない(言葉は分かる) 2022 紙、鉛筆 25.2×17.8
- C44 触れない赤ちゃん 触れる犬 同じ位の距離 2022 紙、色鉛筆 ①24.1×21.0、②7.9×21.0
- C45 犬の時空間/星側の目 2022 紙、パステル、色鉛筆 25.7×18.2
- C46 同じ味/星側の目 2022 紙、色鉛筆 29.7×21.0
- C47 星は見つめ返す/もしくは見つめ返さない 指文字「め」 2022 紙、鉛筆 18.2×25.7
- C48 Space(ピンクのじょうろ) 2022 紙、水彩色鉛筆 15.0×21.0
- C49 Surface 2022 紙、アクリル絵具 18.2×25.7
- C50 Space(手紙の中の海亀/しらんけど) 2022 紙、ペン 9.0×9.0
- C51 いくつかのスペース いくつかの表面 2022 紙、ペン 25.7×18.2
- C52 いくつかのスペース 花は見合わなないが会う 2022 紙、ペン 25.7×18.2
- C53 いくつかのスペース 花は見合わなないが会おう 2022 紙、水彩色鉛筆 20.5×17.5
- C54 完全に同じ言語を持っている人はいない 2021 紙、ペン 19.6×17.8
- C55 Speaking While Swimming(同じドラマ見えますか/見てません) 2022 紙、色鉛筆 29.7×21.0
- C56 Space 2022 紙、アクリル絵具 25.7×18.2
- C57 Speaking While Swimming(同じ味2021-2022) 2022 紙、色鉛筆 29.7×21.0
- C58 Spaces 2022 紙、色鉛筆 21.5×15.0
- C59 他者の眠り 2021 紙、パステル 19.4×12.2
- C60 Speaking While Swimming 2022 紙、アクリル絵具 18.4×12.8
- C61 泳ぎながら喋る/眠りながら描く 2022 紙、色鉛筆 29.7×21.0
- C62 鼻から音聞いているからドラムはマスクできない 2021 紙、ペン 25.2×17.8
- C63~78 Surface 2021 紙、パステル 12.8×25.2
- C79 Surface 2022 紙、アクリル絵具 21.0×29.7
- C80 Surface 2022 紙、アクリル絵具 19.1×28.2
- C81 泳ぎながら喋る 2022 紙、水彩色鉛筆 29.7×21.0
- C82 同じ絵を見ても同じものは見えないように 同じ水を飲んでも同じ味は感じない。だけど同じ絵・水はある。 2022 紙、アクリル絵具 29.7×21.0
- C83 散歩 2022 紙、色鉛筆 12.8×18.4
- 距離 2022 紙、色鉛筆 15.0×21.5
- 距離 2022 紙、色鉛筆 15.0×21.5

Exhibition Work List



TANAKA Yoshiki

Interactive Space

- A1 *Goat 1* 2022 Wood, Cardboard, etc. 56.0×95.0×35.0
- A2 *Goat 2* 2022 Wood, Cardboard, etc. 86.0×94.0×38.0
- A3 *Goat 3* 2022 Wood, Cardboard, etc. 45.0×98.0×36.0
- A4 *Goat 4* 2022 Wood, Cardboard, etc. 43.0×110.0×19.5
- A5 *Goat 5* 2022 Wood, Cardboard, etc. 43.0×92.0×42.5
- A6 *Goat 6* 2022 Wood, Cardboard, etc. 71.0×97.0×41.0
- A7 *Goat 7* 2022 Wood, Cardboard, etc. 66.0×11.4×35.0
- A8 *Emissary from the Queen Part2* 2022 Wood, Cardboard, Paint, Pencil 150.0×120.0×100.0
- A9 *Emissary from the Queen* 2022 Wood, Cardboard, Paint, Pencil
[Body of work] 100.0×80.0×160.0 [Pedestal] 100.0×70.0×70.0
- A10 *drawing (left)* 2022 34.5×25.5 *drawing (right)* 2022 29.7×21.0
- A11 *drawing 2* 2022 29.7×21.0
- A12 *drawing 3* 2022 41.0×58.3
- A13 *drawing 4* 2022 29.7×21.0
- A14 *drawing 5* 2022 29.7×21.0
- A15 *drawing 6* 2022 29.7×21.0
- A16 *drawing 7* 2022 35.8×21.0
- A17 *"Goat waiting Godot (short)"* Son-takz 2022 Video 8min.
- A18 *Stage "Goat waiting Godot"* Son-takz 2022 20min.
- A19 *nontitle* 2022 A4-size flyer
- A20 *nontitle* 2022 A2-size poster

Gallery 1

- A21 *Waiting Godoter* 2022 Wood, Cardboard, speaker, Electronic device 180.0×100.0×200.0

Gallery 2

- A22 *Goat 8* 2022 Wood, Cardboard, etc. 70.0×85.0×40.0
- A23 *Goat 9* 2022 Wood, Cardboard, etc. 45.0×83.0×50.0
- A24 *Goat 10* 2022 Wood, Cardboard, etc. 40.0×83.0×40.0

OKI Hiroyuki

Interactive Space, Gallery 1, Gallery 2

- B1 *TODOKU -Live installation on Shibuya Koen-dori Gallery-* 2022 Video, drawing etc. Dimensions variable

SAITO Haruka

Interactive Space

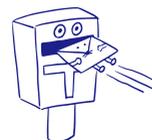
- C1 *The same tree of chusan palm* 2021 Pencil on paper 27.5×21.0
The same tree of chusan palm 2021 Pastel on paper 17.5×12.0
The same tree of chusan palm 2021 Pencil on paper 25.2×18.2
Look at trees of the same species separately 2021 Pencil on paper 25.2×18.2
Between the Hand Paper to give and the Hand Paper to receive 2021 Pencil on paper 25.2×18.2
Between the Hand Paper to give and the Hand Paper to receive 2021 Pencil on paper 25.2×18.2
Between the Hand Paper to give and the Hand Paper to receive 2021 Pencil on paper 25.2×18.2
- C2 *Photo of chusan palm tree sent from K-san* 2021 Photograph 5.0×3.0
- C3 *The same tree of chusan palm* 2021 Oil on canvas 53.0×53.0×3.0
- C4 *From "The Girl I Left Behind"* 2021 Oil on canvas 18.0×14.0×2.0
- C5 *Space (The same tree of chusan palm)* 2022 Pottery 30.0×25.0×10.0

Gallery 1

- C6 *Behind you* 2022 Oil on canvas 46.5×38.0×4.0
- C7 *Behind you* 2022 Oil on canvas 45.0×38.0×4.0
- C8 *Shadow of the touch/Eyes on the star side (The star stares back, or not)* 2022 Oil on canvas 23.0×16.0×2.0
- C9 *The "fernste Ebene" of this room* 2022 Oil, Acrylic on canvas 25.0×29.5×2.0
- C10 *Several spaces* 2022 Oil on canvas 33.0×24.0×2.0
- C11 *Each sleep* 2022 Acrylic on canvas 33.0×42.0×2.0
- C12 *Untouchable dog/Touchable scenery/Painting I don't touch* 2021 Oil on canvas 38.0×45.5×2.5
- C13 *Distance* 2022 Oil on canvas 34.0×25.0×2.0
- C14 *The star doesn't stares back or it does Someone who made a phone call is a person who doesn't take a phone call made by someone who doesn't take a phone call* 2021 Oil on canvas 38.0×45.5×2.5
- C15 *Fingerspelling newsletter/Eyes on the star side (The star stares back, or not)* 2022 Oil on canvas 22.7×22.7×2.0
- C16 *Me* 2022 Oil on canvas 41.0×31.8×2.0
- C17 *Several spaces* 2022 Oil on canvas 24.0×19.0×2.0
- C18 *Several spaces* 2022 Oil on canvas 25.0×21.5×2.0
- C19 *Several spaces* 2022 Oil on canvas 14.0×18.0×2.0
- C20 *Several spaces* 2022 Oil on canvas 23.0×16.0×2.0
- C21 *Spaces* 2022 Oil on canvas 162.0×162.0×4.0
- C22 *I won't notice that sound of rain You won't notice that sound of rain* 2022 Oil on canvas 162.0×130.3×4.0
- C23 *Space (The moment of speech/Fingerspelling "Ge-n-ki-de-su-ka")* 2022 Pottery 13.0×9.0×4.0
- C24 *Space* 2022 Pottery 6.0×4.0×3.0
- C25 *Space (Speaking while swimming)* 2022 Pottery 8.5×6.0×4.5
- C26 *Space (Sleep)* 2022 Pottery 35.0×26.0×11.0
- C27 *Space (Sea turtle)* 2022 Pottery 11.5×11.5×5.5
- C28 *Space (Fingerspelling "me"/Eyes on the star side)* 2022 Pottery 34.0×26.5×12.0
- C29 *Space (Sound of rain)* 2022 Pottery 30.0×23.0×11.0
- C30 *Space* 2022 Pottery 6.0×5.0×4.0
- C31 *Space (My room/Part-time job for Demaekan)* 2022 Pottery 16.0×12.0×6.0
- C32 *Vase of time of trees* 2021 Pottery 20.0×16.5×6.5
- C33 *Behind you (You)* 7min.28sec.
- C34 *Behind you (Me)* 7min.46sec.

Gallery 2

- C35 *Won't notice that sound of rain* 2022 Pencil on paper 29.7×21.0
- C36 *I won't notice that sound of rain You won't notice that sound of rain* 2022 Color pencil on paper 12.8×18.4
- C37 *Window of my house* 2021 Pencil on paper 29.2×21.0
- C38 *A reply came to the fingerspelling Hand Paper (video), 18th August* 2022 Color pencil on paper 25.9×18.2
- C39 *Spaces (Shadow of the Hand Paper which I'm writing from now)* 2022 Color pencil on paper 15.0×21.5
- C40 *I haven't touched them though I can (leaf, star, dog, the moon)* 2022 Color pencil on paper 21.4×15.0
- C41 *The leaves of cherry trees are very close to the window from outside, and maybe I can touch them if I reach my hand, but I haven't touched them (for now)* 2022 Watercolor pencil on paper 21.0×29.7
- C42 *I haven't touched them though I can* 2022 Color pencil on paper 18.2×25.7
- C43 *Animals can't read letters (They understand words)* 2022 Pencil on paper 25.2×17.8
- C44 *Untouchable baby Touchable dog Almost the same distance* 2022 Color pencil on paper 24.1×21.0×7.9×21.0
- C45 *Time and space of dogs/Eyes on the star side* 2022 Pastel on paper, color pencil 25.7×18.2
- C46 *The same taste/Eyes on the star side* 2022 Color pencil on paper 29.7×21.0
- C47 *The star stares back/Or it doesn't Fingerspelling "Me"* 2022 Pencil on paper 18.2×25.7
- C48 *Space (Pink watering can)* 2022 Watercolor pencil on paper 15.0×21.0
- C49 *Surface* 2022 Acrylic on paper 18.2×25.7
- C50 *Space (Sea turtle in the Hand Paper/I don't know)* 2022 Pen on paper 9.0×9.0
- C51 *Several spaces Several surfaces* 2022 Pen on paper 25.7×18.2
- C52 *Several spaces Flowers are not worth but I see them* 2022 Pen on paper 25.7×18.2
- C53 *Several spaces Flowers are not worth but I find them* 2022 Watercolor pencil on paper 20.5×17.5
- C54 *No one has the exactly same language as someone else's* 2021 Pen on paper 19.6×17.8
- C55 *Speaking While Swimming (Do you see the same drama?/No, I don't)* 2022 Color pencil on paper 29.7×21.0
- C56 *Space* 2022 Acrylic on paper 25.7×18.2
- C57 *Speaking While Swimming (The same taste 2021-2022)* 2022 Color pencil on paper 29.7×21.0
- C58 *Spaces* 2022 Color pencil on paper 21.5×15.0
- C59 *Another person's sleep* 2021 Pastel on paper 19.4×12.2
- C60 *Speaking While Swimming* 2022 Acrylic on paper 18.4×12.8
- C61 *Speaking while swimming/Painting while sleeping* 2022 Color pencil on paper 29.7×21.0
- C62 *Drummers can't wear a mask because they hear sounds from their nose* 2021 Pen on paper 25.2×17.8
- C63-78 *Surface* 2021 Pastel on paper 12.8×25.2
- C79 *Surface* 2022 Acrylic on paper 21.0×29.7
- C80 *Surface* 2022 Acrylic on paper 19.1×28.2
- C81 *Speaking while swimming* 2022 Watercolor pencil on paper 29.7×21.0
- C82 *As you don't see the same thing even if you look at the same painting you don't feel the same taste even if you drink the same water. But there is the same painting and water.* 2022 Acrylic on paper 29.7×21.0
- C83 *Walk* 2022 Color pencil on paper 12.8×18.4
Distance 2022 Color pencil on paper 15.0×21.5
Distance 2022 Color pencil on paper 15.0×21.5





展覧会

ゲストを招いたトーク「あなたにとどく、いいあんばい」

期待していないものが「とどく」利他の奇跡

[ゲスト] 伊藤亜紗（東京工業大学教授）

[司会・進行] 小川希（本展キュレーター）

小川 「とどく」は現在進行中のプロジェクトですが、成果発表として「とどく」展を開催しています。まず、展示の感想をうかがいたと思います。

伊藤 私はこの2年くらい「利他」について研究しているので、それに絡めてお話しします。利他は難しい概念で、自分が考える利他を押し付けるとむしろ暴力になることもあります。利他を受ける側から考えることが大事だと思うんです。今回の展示は手紙を介してつくられた関係が作品になっているので、私が考えてきたこととリンクします。「手紙的利他」というものがたぶんあって、それを考えるときの大事な要素が3つ揃っている感じがします。田中（義樹）さんの作品では（返信を）「待つ」ことが重要です。齋藤（春佳）さんのパートでは「わからなさ」。相手との等差が意識されています。そして大木（裕之）さんは自分が変わるということが起こっていました。それも利他の要素です。

小川 大木さんについて補足説明すると、大木さんは「ひきこもり」の方々とビデオレターでコミュニケーションを図る中で、仲介役の支援団体の方々との関係を時間をかけて築いてきました。その団体には「ひきこもり」の人達をサポートする役割の人がいるのですが、大木さんはこれからは自分もサポーターとして関わっていきたいとおっしゃっています。

伊藤 利他は、自分の利益を最大化するような直線的なものではなく、「とぼけた」行為だと思うんです。「とぼけ」はアートの得意な部分で、「なんだろう、これ？」ということが大事だと思います。

小川 この展示もわかりにくいっていわれたんですが、利他に引き寄せていうなら、「こういうことをやったから、こういう反響があった」みたいなわ

かりやすさは邪魔になるということですね。

伊藤 手紙は返事が来るまでに時間がある。その間に相手とのコミュニケーションが存在するんです。「ああいうふうを書いてあったけど、どういうことなのか」「ああ書いたけどちゃんと伝わったかな」と相手のことを考えるんです。自分の中でずっと粘土をこねるようなコミュニケーションですね。利他の「利」は相手とつながっているんですが、「他」は自分とは違う誰か、他者です。そうしたつながらない時間がつくれるから、手紙と利他は相性がいい。

小川 いまの社会では、コミュニケーションという言葉に自分ひとりの時間を使って相手のことを考えるみたいなことが含まれていませんね。

伊藤 人間の中には直接には出会えない部分があると思うんです。外出できない人の代わりに外出する「分身ロボット」をご存知ですか。私は最近、それを使って「ひきこもり」の人と関わる機会がありました。直接だと話すのが難しいけれど、ロボットを介すると話せる。それこそ手紙と似ているんです。間接化することで、むしろ出会えることがある。

小川 今回は会場の一部に、手紙をスキャンして文字の部分を一部だけ切り抜いて貼り付けています。手書き文字の強さというか、手書きの手紙には、意味以上のものが入っていて、情報量が多いので驚きました。

伊藤 そういう意味では、手紙（の現物）が展示されていないことに違和感がありました。手紙がどう受け取られたのか、相手はどう思っているのかが不可視化されているのがすごく気になります。

小川 最初から手紙は外に出さない、というルールで始めました。そうしないとストレートなやりとりを妨げるのじゃないか、と思ったりしました。それと、児童養護施設の子も達ともやりとりしているのですが、個人が特定されると困る子ども達もいます。

伊藤 個人情報の扱って難しいですよ。手紙ってその人の固有性が出てくるので。固有性が出てきてこそその手紙だと思うので……。

小川 一般的な道徳、ポリティカル・コレクトネスが表現の幅をどんどん狭めています。行き過ぎるとアートもなくなっちゃうだろうと思うんですが。

伊藤 そこを抑圧するのは危険なことですね。『ぼけと利他』という本をいっしょ

につくった村瀬孝生さんは高齢者施設を運営しているんですが、夜勤とかめっちゃ大変なんですね。夜中に何度も呼び出すお年寄りがいて、そのたびに周りのお年寄りが目を覚ましてしまう。そういう夜勤明けのミーティングで村瀬さんは、若い支援者に「何回目にその人を殴りたくなったの？」とか尋ねるそうです。道徳的には口にできないことですが、きれいごとだけでミーティングが終わったら、支援者が抱えている「怖い自分」が居場所を与えられないままになってしまうからです。アートはそういうものにすごく寛容で、自分を出してもいい場所をつくってきたと思うんです。そういうものを出してこそその共生ですよ。

小川 そうですね。こういう場所（公的なギャラリー）こそ、どこまで許されるかというギリギリの部分を探る場所になっていったら面白いですね。伊藤さんは生きづらい社会の中で、利他がどこかで機能するという直観とか、確信があるんですか。

伊藤 よくわからないんですけど、歴史的に見ると、国と私の所有物がどんどん拡張しています。日本でも明治時代に、共同体で管理していた山林が国有林か私有林かに分かれていって、その中間が痩せていきました。最近では、新型コロナに国家が立ち向かえない、私ひとりじゃ立ち向かえない、みんなでなんとかしよう、となった。その感覚は利他だと思えます。

小川 「とどく」でも、アーティストが多様な背景を持っている人達とやりとりしても、何かが解決することはない。それでもアートが社会につながるうとする行為は意味がないものではないと思ったりするんです。

伊藤 たぶん利他ってめちゃくちゃ奇跡的なことだと思っていて、自分がしたことが人のためになるって、そんなに簡単には起こらないですよ。絶望と希望を同時に持つ、そういうものなんじゃないかな。

小川 肩の力をぬくというか、所詮はそんなに上手く行かないよって境地になるには、経験が必要なんですかね。

伊藤 障害のある方々に「すごく困難を抱えたときにどうやって解放されたか」という話を聞くと、(返答は) いつも「偶然」なんですよ。ある摂食障害を抱えた方は、夫の転職かなんかで引っ越して、そこで就職したのがた

またま現代アート関連のギャラリーだったそうです。最初はわけがわからなかったのですが、だんだんちょっといいかも、と思えてきて、その出会いが摂食障害の解消につながっていったらしいんです。その人には現代アートがたまたま効いたんです。それも偶然なんです。

小川 このプロジェクトもどこかでそういうふうに関節したら嬉しいですね。それは見えないんですけど。

伊藤 私が『手の倫理』という本を書いたら、読者から「すごく面白かった」という手芸のバッグが贈られたんです。「ジャグリングをやりたくなった」という人もいて、すごく「とどいた」なって思ったし、私にもその人のリアリティーが「とどく」んです。利他の「他」を感じました。

小川 自分が思い描いているというか、期待していることじゃないことが起こり得るってことが面白いですね。

伊藤亜紗

東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長、リベラルアーツ研究教育院教授。MIT 客員研究員(2019)。専門は美学、現代アート。もともと生物学者を目指していたが、大学3年次より文転。2010年に東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美学芸術学専門分野博士課程を単位取得のうえ退学。同年、博士号を取得(文学)。主な著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社)、『どもる体』(医学書院)、『記憶する体』(春秋社)、『手の倫理』(講談社)。WIRED Audi INNOVATION AWARD 2017、第13回(池田晶子記念)わたくし、つまりNobody賞、第42回サントリー学芸賞受賞。



とどかない

永井玲衣

「とどく」の後ろには、たくさんの「とどかない」がある。わたしがとどけたいこと、伝えたいこと、それがあなたにとどくことは稀である。そのことを誰もがわかっているのに、誰もが忘れてしまう。時に、奇跡のように「とどく」が起きることがある。だが、その周りには、おびただしいほどの「とどかなかった」の破片が落ちている。

「とどく」ためには、宛先が要る。「とどく」を試みるひとは、どんなに遠くても、あなたの姿を見ようとして、目をこらすだろう。あなたに近づくために、あなたとの遠さを感じなければならない。それでも、とどかないということはある。しかしその一方で、うっかり別のひとはとどいてしまうこともある。

「とどく」はわかりづらい。「とどきましたか？」と確認しないと、とどいてるかかわからない。手紙であれば、それがきちんとあなたのもとに到着したのか、いつまでも不安だし、もっと抽象的な、わたしの言葉、あるいはわたしの思い、それがあなたにとどいたのかは、永遠に知り得ない。

「とどく」は時間がかかる。とにかくかかる。とどく方は待たなければならないが、とどける方もまた、待たされる。手紙を書いている時間よりも、待っている時間の方がはるかに長い。読んでいる時間よりも、待っている時間の方がずっと長い。何を書けばいいのやらと、自分の中から言葉が出てくるのを待つこともある。途方もないほどに長い。長く、じれったい、どうしようもない時間。宙吊りになる、不確かな時間。

八月二十九日のお手紙はフィレンツェで拝受いたしました。そして今—それから二ヶ月も経てやっと—ご報告する次第です。怠慢をお許してください。—ですが、私は旅の途中で手紙を書くのは嫌なのです。手紙を書くには、必要不可欠な道具以上に必要なものがあるのです。つまり、いくらかの静けさと孤独、それにあまりよそよそしくない時間が必要なのです。(「ライナー・マリア・リルケよりフラ

ンツ・クサーファー・カプスへ ローマ、一九〇三年十月二十九日」エーリッヒ・ウングラウブ編『若き詩人への手紙』安家達也訳、未知谷、二〇二二年。)

今回のプロジェクトでも、手紙はとどいたり、とどかなかったりしたらしい。なかなか返事がないとやきもきしていたら、ほかの資料に紛れて相手に気がついてもらえていなかったり、やりとりが長らく途絶えたりしたようだ。

そんな話を聞くと、新たな問いが浮かんでくる。たとえ手紙が宛先に到着したとしても、それは「とどく」と言えるのだろうか。書いてある内容の意味が伝わるといことが「とどく」ということなのだろうか。そもそも「とどく」とはどのようなことなのだろうか。

とどけるためには時間がかかる。いくらかの静けさと孤独、そしてあまりよそよそしくない時間が必要だと、ドイツの偉大な詩人は言う。反対に言えば、それがなければ、なかなかわたしたちはとどけようと試みることもできない。だからこそ、わたしたちはもう手紙など書こうとしなくなった。相手にとどけようと、心をすり減らすことは少なくなった。

うまく書けない、うまく伝えられない。自分が何を言いたいのかも、もはやよくわからない。それでも何かをとどけたいと思う。思ってしまう。プロジェクトに参加するアーティストのひとりである齋藤さんのもとには、すべてを書くことをあきらめ、途中の手紙もとどいた。そのひとは何を思ったのだろうか。とにかくとどけたい、そう思ったのかもかもしれない。

あなたとあなたが、手紙のやりとりをする。長い時間をかけて、それがなされる。そして、アーティストが、その膨大な時間の蓄積の中にどっぷりと身を浸しながら、何かを表現する。それをわたしたちが見る。

あなたとあなたのやりとりの断片を見るために、渋谷駅に降りる。興味深いことに、渋谷公園通りギャラリーからの展示の案内は、とどかなかった。「ご案内はとどいていますか」。不安なメールが何度か、わたしのメールボックスに入ってきた。「とどいていないという連絡が多くて」とそこには書かれていた。わたしが以前伝えた住所が間違っていたせいで、それはとどかなかったようだ。わたしがいまいる場所を伝えて、何日かして、案内はようやくとどいた。そのまどろっこしい時間がまた、愉快だった。

手紙を書くには、必要不可欠な道具以上に必要なものがあるのです。つまり、いくらかの静けさと孤独、それにあまりよそよそしくない時間が必要なのです。

ギャラリーに向かうまでの渋谷の道は、混雑している。誰もが、急ぐべきなのかもわからないまま、早足で通り過ぎていく。ひとりで歩いているのに、ちゃんと孤独になることもできない。自分の身体さえも、どこかよそよそしいように思える。

「とどく展」は、奇妙な展示だった。わかりやすく、心温まるやりとりに感動でき、自分も手紙を書いてみようかなと心を新たに一步踏み出せるような展示、では全然なかった。手紙の内容は一部でさえ公開されなかった。だが、それは当たり前だった。手紙とは、あなたとあなたの、個別のやりとりなのであって、わたしのためのものではないからだ。歴史の一部となってしまったことをいいことに、私的な手紙があけすけに本屋で売られ、それを享受してきたわたしは、一体手紙を何だと思っていたのだろうか？

「春休みにまた」

「どのようなことをしているのでしょうか？」

「私のおすすめのドラマは」

「心が死んで」

「つづきはまたあとでかきます！」

その代わりに、一部ですらない、断片がわたしを取り囲んだ。誰の筆跡かもわからない、誰に向けたものかもわからない何かは、少なくともわたしには向けられていなかった。だがそれこそがまさに重要だった。

アーティストたちは、それぞれに、それぞれの仕方でも表現をしていた。しかしこれらも、どこかわたしのためのものではなかった。わたしたちに公開はされていたが、わたしのためではなかった。その事実が、いくらかの静けさと孤独、しかしよそよそしくない時間を連れてきた。わたしは、わたしたちは、かれらのやりとりに、たまたま立ち会ったにすぎなかった。

だからこそ、この展示は、見にくるだけではほとんどわからない。その背後に流れている、莫大な時間、やりとり、空間、痛み、もどかしさ、あきらめ、それらを

見に行かなければならなかった。ブログ・プロジェクトやオンライン配信されたアトリエ・ビジット、クロストーク、トークイベント、これら全てが今回のプロジェクトそのものだった。展示はその中のひとつにすぎない。展示は、わたしの把握を拒んでいた。長く、心細い時間をかけて、これを見るようにと語りかけていた。

すぐにはとどかない。すぐにわからせてもらえない。そんなどうしようもなく受動的になってしまう時間が、ただそこにはあった。そこに何か意義があるとか、現代に生きる人間が忘れてしまった何かがあるなどと意味づけをしたくはない。ただ、あなたとあなたが、もどかしいやりとりをして、それに立ち会ったわたしたちが、またもどかしい思いをする、そういう時間がそこにはある。

とどかないということも、やりとりである。だからこのプロジェクトは、終わることができないだろう。手紙にもまた「終わり」がない。わたしがとどけて、返ってこないにしても、やりとりが終わったわけではない。まだわたしのもとに、返事がとどいていないだけなのだ。

キュレーターの小川 希さんとは、ついに会えなかった。展示前に対談をしたが、小川さんはウィーンにいて、オンラインで話した。その後、「とどく」担当の竹野さんからは、展示に来る際に事前連絡をしてもらえれば、小川さんと待っていますと連絡があった。だがわたしが体調を崩してしまい、結局連絡ができないまま、仕事の合間にギャラリーに滑り込んだ。小川さんにも、竹野さんにも会えないまま、わたしはこれを書いている。

だがきっといつか会えるのだろう。手紙がとどくのを待つように、いつかを待っている。

永井玲衣

学校・企業・寺社・美術館・自治体などで哲学対話を行う。哲学エッセイの連載のほか、Gotch 主催のムーブメント D2021 などでも活動。連載に「世界の適切な保存」(群像)、「ねそべるてつがく」(太田出版)、「むずかしい対話」(東洋館出版)など。著書に『水中の哲学者たち』(晶文社)。詩と植物園と念入りな散歩が好き。



NPO 法人ピアサポートネットしづや

「とどけたい」思いと「とどく」のはざままで

相川良子

「ひきこもっている人に共感を届けたいプロジェクト～とどく～」に参加した。

このプロジェクトは、彼ら自身が画像や、映像を通してアーティストとかかわり、社会の中に存在していることを確認する取り組みだった。

社会の複雑化が進む競争社会、コロナ禍も加わり彼らは「仲間と一緒に青春を生きる」ことも叶わず、世間から身を引くことを余儀なくされている。誰かが、外側から手を伸ばさなければ、存在すら見えない。とはいえ、アーティスト・大木さんの「とどけたい思いは」、彼らに届くだろうか？戸惑いと、試行錯誤の連続だった。

ひきこもっている彼らに「とどく」ためには、気持ちに寄り添いながら出向き、信頼という関係をつくるピアサポーターが必要であった。今回は、3人が、彼らの声を拾いに出向いた。一緒に街の風景をカメラに収めた人、撮りためた大好きな虫や、亡くなってしまった猫の画像に「いいね」を送った人など、それぞれが彼らの心の片隅にある思いを掘り起こしてくれた。

プロジェクトの終わりを迎えた11月のトークイベントで、大木さんから人間の尊厳に触れて「みんな地続きなんだ」との感想があった。ひきこもっている人を、「どうにかしなければならぬ人」ととらえるのではなく、彼らも、「わたし＝大木さん」と同じく、社会の中に、右往左往をしながら存在している一個の人間であることを言いたかったのだらうと思う。



とどく：気持ちが通じる？害毒？

石川隆博

締切を過ぎてしまった…。つい3日前の大木さんを囲む鍋の会の際にも「締切」と言われたにもかかわらず。とどくって何だろう？

3年前、突然「ビデオレター」が届いた。「こりゃ、困ったな」「やってくれそうな人いるかな」「たいへんなことになったぞ」「…」前向きな感情が湧いてこない。こんな時は、

いったんほおっておく、無理しないに限る。どこからか、ふうっと、他人の目が気になって、怖くて、外に出れない若者のことを思い出した。道すがら好きな動植物の写真を撮っていたら、他人も気にせず、外出ができた。こんなことあるかもしれない。一途の望みが見つかった。「やってみるか」

現実には厳しい。もうカメラがなくても大丈夫。事例はあくまでも事例、次に続く人もいない。1対1でかかわっているピアサポーターという支援員に声をかけ、一緒に撮影してもらおうことにした。待てど暮らせど、とどかない。「どうしたもんかな」今ではなく、撮りためられた過去の映像を頼りにして、「以前見せてくれた映像を、とどくに使ってもいいかな」「えっ」「大木さんという映像作家さんにみせてもいいかな」「…」ダメとは言われぬまま、とどいたのか、とどかなかったのか、大木さんにはとどけた。

ハエが、コイが、ネコが、筆筒の上の画面の中で動いている。一緒に行ったとどく展、その映像を前に、「あっ」指を差し、私の顔を見て、ニヤニヤ。とどいた??のかな。

「とどく」に参加してみよう

鈴木昌平

2年ほど前でしょうか、初めてプロジェクトについて聞いた時にはどのようなものになるか全く想像できず、それでも利用者さんのいい刺激になればと思い企画に参加しました。撮影用にカメラをお借りしたいものはいいものの、そこからどう撮っていいかわからず……。一先ず利用者さんに許可を得て、ピアサポート活動の風景を撮影することにしました。

「とどく」のコンセプト通りやりとりはビデオレター形式で行い、担当アーティストの大木さんから返信を頂きました。ですがその感想は正直に申し上げて言葉にし難いものでした。利用者さんにも同じ映像をお見せしましたが、やはり難しい顔をして、反応に困っていたようでした。何がどの程度「とどいた」のか、私たちが「うけとれた」のか、考えざるを得ませんでした。

それから1年以上が経ち、今年（2022年）10月遂に展覧会が開催されました。そこにあったのは床にたくさん置かれた大木さんの私物？とプロジェクトに流れる大木さんの“レターたち”でした。私の第一印象は少し不安を感じるような、“混沌”。しかし同時にそこには、確かに参加した人々の声・生活・そして“コミュニケーション”があったと思います。

「普段どれだけ人に声を届けられているだろうか」「どれだけ人からの声を受け取れているだろうか」「日常の中に置き去りにしているものはないだろうか」振り返らせてくれる、素敵な展覧会でした。

6名のろうの学生と橋本さん

本江優貴

レターをするのは久しぶりだったので、楽しみながら書かせていただきました。今の時代は、返事が早くスムーズでしたが、レターだとほんとに届いているのか不安で大丈夫かなと思う時もありました。そのように昔の人はやりとりしていたのが驚きです。今の時代の進化に感謝です。

田村彩七

現在 SNS の普及で手紙を書くことが減りましたが、そんな時こそ手紙を通してその人が綴る文章だったり字だったり、その人の個性を感じることができるツールだと改めて感じました。また、カタチとして残すこともできるのでいつか時が経った時に当時のことを振り返る良い機会になるのではないかと思います。

樺澤環

私は元々手紙を書くことが大好きで、小学校の頃は友達とやりとりをしていました。でも最近ではメールが増えてきましたよね。今回のプロジェクトで以前使っていた便箋や封筒を机の中から引っ張り出して書きました。やっぱりメールでのやりとりは簡単にやりとりができるけれども、改めて言葉を選ぶっていうことは難しいと思いました。逆に手紙だからこそ自由に、例えば絵を描いたり、文字の大小や色を変えたりすることができるといったところも、手紙の良いところだなと思いました。齋藤さんと会ったことがないんですけども、手紙のやりとりを通して、不思議と本音が言えるのはすごいと思いました。

久保かな子

今私は社会人ですが、以前ろう学生として手紙のやり取りをしました。その“手紙”は、私は小学生ぶりだったので、また、その当時は相手を知っている状況で手紙のやり取りをしていましたが、今回は齋藤さんがどんな人なんだろうとわからない状態、名前しか知らない状態でした。なので、どんな人なんだろうと想像しながら手紙のやり取りをしました。それはすごく新鮮な感じがしました。また、当時大学生だったので勉強が忙しく、なんだかモヤモヤしていた時に手紙が来て、とても嬉しかったです。私も楽しくお返しすることができました。すごく心の支えになったと思います。

藤原直斗

この企画に参加して、大学での忙しさで手紙のやりとりが少なかったのですが、内容一つ一つ記憶に残りやすくてとても楽しくやりとりできた面があって良かったなと思いました。現在では SNS といった LINE などでやりとりするのが当たり前の中で手紙のやりとりはまた違った面白い感覚があった。手紙を手書きで書く気持ちが入りやすく色々な表現ができて(手書きのイラスト等)、相手に伝わる実感を感じることもできたなと思います。

手紙のやりとりは今ではなかなかできない体験であり自分での不思議な発見もあって楽しかったです。貴重な企画に参加させて頂きありがとうございます。

井岡龍陽

今の時代ではスマホという便利な物があり、普段の生活から手紙を書く習慣もない私に貴重な時間を作らせていただき、ありがとうございます。

この2年間、私にとっては忙しい時期でした。手紙の企画に始まってから2回も引っ越ししたため、手紙の返事も書けず申し訳ございません。

また、見知らぬ人と手紙でやりとりをする新鮮な気持ちでいっぱいでした。最初はこんな内容でいいのか、文章を書き直したり、何度も戸惑いましたが、途中からありのままでもいいかと切り替えて返事を書くことができたとおもいます。

もうちょっと返事をかけたかなと思い、申し訳ない気持ちでいっぱいです。楽しい企画、そして手紙でやりとりする貴重な時間を作っていただき、ありがとうございます。

「とどく」展に想いをよせて

橋本一郎

僕が依頼したろう学生は、生い立ちや環境・学んでいる専攻も違って、バラエティに富んでいる。初めてろう者と関わる春佳さんには、フラットなところから素の彼らと関わってほしいと思ったからだ。彼らは僕の期待以上に、いや期待通り（笑）に手紙のやり取りを春佳さんとしてくれた。

いざ、展覧会を迎えると、様々な作品が並んでいる。特に解説がないため、ふらっと見ると何だかわからないものかもしれないが、ブログやクロストーク、ギャラリートークで少しずつ謎が解けていく。「このシュロの木は…」「この指文字は…」「この陶器にあるウミガメは…」僕の知らないろう学生との手紙のやり取りが、見える形で表現されているのだ。そこにはフラットな春佳さんだからこそ感じたひとりひとりへの想いが表現されていたのだ。そんなことを聞きながら、僕は完全にヤキモチをやいていた。

そんな彼らが初めて展覧会を見に来た時、自分の手紙のやり取りはどこにあるのだろうと探しだし、「私の好きな言葉が書いてある!」「どこにあるかわからない…」と嬉しそうに素直に作品と向き合っていた。手紙から表現された作品たちの背景を知ると、次々と前にのめりだしていき彼らを、僕はとても愛おしく感じた。ギャラリートークでは春佳さんが「彼らと会いたいと強く思った」と言ってくれた。とてもカラフルで優しく、素敵な時間・空間だった。僕はまたヤキモチをやくのだ（笑）。

この2年間、春佳さんにとってどんな時間だったのだろうか。僕はろう学生といってもひとくくりではないということに気づいてもらえたとし、防災警報が流れた時に「これってきこえない人には届いていないなあ」と日常生活の中できこえない人たちの存在を自然に感じてもらえる人になった。ろう学生にとっては、コロナ禍で多くの人との関係が閉ざされる中、フラットな春佳さんだったからこそ、相談したり悩みを吐き出ししたりできる、しばらく時間を忘れて手紙に向き合う…そんな珍しい大人と出会えた、貴重な体験だっただろう。

これからも彼らは春佳さんと手紙でのやり取りをするのだろう。それは、家族や友達、そして僕にも知ることのできない手紙を通して…。それが、彼らの大切な居場所となっていくことを期待している。



児童養護施設子供の家

「とどく」に関わる皆さまへ

角能秀美

今回、プロジェクトに参加させていただきありがとうございました。竹野さんから一本の電話があり、その後お話を聞いて私自身はおもしろそうだなと感じつつ、なんでもスマホ・LINE世代の子どもたちが果たしてどれだけ興味をもつのか、手紙のやり取りは続くのか…。そんなスタートでしたが、意外にも?とても良かったな、という感想です。

中1女兒のエピソードを紹介します。田中さんからのお手紙に初めて返事を書くときは表情硬く、何書いたらいい?これでいいかな?と確認しながら文章をつづりました。それがいつの間にか、一人でササッと手紙を仕上げたあとは一緒にポストへ投函するだけ、という状態を持ってくるように。しかしワークショップで初対面すると、私の後ろに隠れてしまうほどの人見知りを再度発揮します。それでも二度目の対面となる展覧会では、多少会話が生まれ、近距離で記念写真を撮ることもできました。あとで他の職員に、スマホで撮った展示物や“クロヤギさん”こと田中さんの写真を見せたり、参加してもらった「ぬりえコンテスト(本人主催、施設内での企画です)」の投票結果がまさかの最下位だったことを話したりして、笑いを誘っていました。

成果と呼べるのかは正直わからないけれども、こうした経験すべてが、本人の育つ土壌を豊かにすると考えています。

ほかの参加児童からの感想もどうぞ。「お手紙を書くのも読むのも楽しい」「手紙が待ち遠しいけどその時間も楽しい」「興味深い人、シンプルに会ってみたい」など。子どもたちにはまだ、プロジェクトが終了することをはっきりと伝えられていません。今年度で退所となる22歳の女性もそれを気にしていました。展覧会をやって、実際に会って、これで終わりですっていうのはなんだかね…人と人とのご縁なので、今後のことは相談しているよと返しています。



作家デザイン 便箋・封筒

展示を朝て手紙を書きたくなったら、その場であるいは家でゆっくりと手紙を書いてもらえるように、ディレクターの小川 希の発案で、作家達にデザインをお願いして作成しました。

TANAKA yoshiki



OKI Hiroyuki

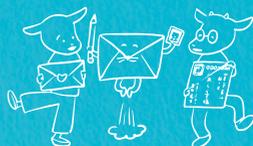


SAITO Haruka



ちょっとした
エピソード

それぞれの作家の便箋・封筒を子ども達にプレゼントした田中義樹ですが、一人から齋藤春佳のレターセットでお返事がとどいたようです。齋藤春佳も自身のブログで、自分のデザインした便箋・封筒で手紙がとどいたことを記しています。



わたしからあなたへ

〈とどく〉プロジェクトを、とおして

大木裕之（映像作家・現代美術家）

—

まず、僕からのご挨拶の映像を、〈東京都渋谷公園通りギャラリー〉を通して〈NPO 法人ピアサポートネットしぶや〉に〈とどけて〉もらった。

それからしばらくして、ピアサポートから渋谷公園通りギャラリーを通して僕に最初に〈とどいた映像〉が、Aくんによって撮られた虫や猫の澄んだまなざしによる美しい数ショットが連続する動画であった。

こののち、2022年9月22日・ピアサポートでの鍋を囲む会に突然Aくんがあらわれた。

その時に僕がAくんを撮った映像を含んだ僕の映像作品が、10月8日から始まった渋谷公園通りギャラリーでの展覧会に流され、

そののち展覧会にAくんが、ピアサポートの石川さんとともに来てくれて、Aくんにもみてもらった。

〈それよりなにより〉その最初に僕にとどいたAくんの撮った数ショットの映像が、展覧会の僕のブースでずっと神聖な映像として神殿に飾られる映像の役を果たした。

その〈様子、有様〉もAくんは目撃し、佇み、～傍らに僕の作品の中でやはり珠玉の彼が映る / 写るショットを含む映像もまじえる〈社会的〉〈場〉〈時〉をもった。

○

二

その中で、僕自身の〈機能不全〉〈認識障害〉の姿があらわれる。みてのとおりだ。そしてそれは、

今の世の中に、あまねく、みちている。

映像、言葉、

組織、社会、人間関係、経済、

魂。

Bくんは家庭での「宗教のこと」が顕著にBくんの「ひきこもり」の要因となっている「ようだ」

しかしAくんにしろ僕にしろ、多かれ少なかれやはりなにがしかの「信じるもの」のこと、ありがた、ゆらぎ、きしみ、と光、希望、生きる力・・・

〈一緒に考え 一緒に進もう〉

(ピアサポートパンフレットより)

○

三

〈力になる〉

〈力になりたい〉

Aくん、そしてまだみぬBくん

は、

僕にとって〈力になってくれた〉



Aくんにとって〈力になった〉かはわからないが、しかし可能性 / 光はあると思う。

しかしBくんには〈力になっていない〉と思う。しかしまだ〈みち〉はある！

○

四

今回関わったピアサポートのみなさま、そして渋谷公園通りギャラリーのみなさまとは、一緒に考え一緒に進んだ。わずかながらでも。

そして、展覧会をみにきてくださった方々とは？そしてまだみぬ方々と・・・

一緒に考え一緒に進み

〈力になりたい〉～

アートをとおして、モ、おたがいにとって、

モ

○

五

こと

い

六

キ

七

希

言葉（波みたいな）

齋藤春佳（美術作家）

たとえば、部屋／水中／眠り／夢／歩行。

それらの表面、窓／壁／水面／眠る人／その臉／星空／地上／便箋。

この時空間で、私が窓の外の雨音に気付かない。

それは、耳が聞こえないからではない。

もしくは、あなただけに聞こえる雨音がある。それは必ずしも、あなたの耳が聞こえるからではない。

知るだけでは、わかることは、できない。

簡単に言ってしまうと、私たちはお互いの人生の表面しか見ることができず、それぞれの体、言うなればスペースを持っていて、お互いの眠りを経験することはできない。同じ感覚を経験したね。と合意をしたとしても、それが事実かどうかは誰にも確かめられないことです。

会ったとしても確かめられない。

だけど、私たちは、便箋の上で、その合意を実行しましたね。

ひとつ、同じ文字を読んで、頭に浮かぶ音やイメージですら、それぞれに違う。同じ種類のシュロの木は、当然別の場所に生えている。

私たちそれぞれが見たシュロの木も、描かれる時には表面となる。

そしてまた、それら表面と表面に挟まれたスペースがある。

そのスペースで、あなたの目の前の器の表面に描かれた窓。

その窓に向こうから書かれた文字は反転していて読みにくい。

その窓の向こうから指文字を発語する瞬間、語りかける私の立つ場所からはその裏側が見えない。

語りかけられるあなたの立つ場所からはその裏側が見えない。

同時に見ることはできないその間に、スペースがある。

語りかける主体の立つ場所でもなく、語りかけられる主体の立つ場所でもないスペースが、表面と表面の間、陶器の中に生まれる。

もしかしたら、そのやりとりの外に立つ人にはそのスペースを見ることができる瞬間があるかもしれないし、やっぱり誰にもそのスペースの内実は明らかにならないかもしれない。

私とあなたは、それぞれの人生を実行し、その出来事を手紙に書き、私がそれを作品にした。

人生→手紙→作品。

ただし、手紙が書かれる時、手紙を書く体がある。作品を作るのは透明な体ではない。

手紙は往来する。

作品が作られ、その中に描かれた手紙が手紙として送られたりもした。それが人生の中で読まれる。いつしか作品と手紙と人生、モチーフと実行の関係が入り組んで、どれが何の源かわからなくなってきて、本当はそんなことはしないほうがいいのかもかもしれません。なぜならめちゃくちゃ頭が混乱してくるからです。

語りきれない経緯。

でも語ること。語りまくること。その輪郭が伝わらないこと。輪郭しか伝わらないこと。

あなたがあなたの人生を実行している時、泳いでいる時、泳ぎながら喋っても、がぼがぼしてしまっ、伝わらない。

水面のような便箋の表面。

お互いの息継ぎのテクニックが一切なかったら、そこに浮かぶ文字は、やっぱり伝わらない。

でも、あなたが水面にいる時に残したのがほんの少しの痕跡、波間の泡、描かれた一本の線だとしても、その振動を読むことができなくても、伝わることもある。その作品に描かれた壁にある線が手紙から落ちた影なのだと、それを見るあなたの体が作品に落とす影を一切なくして作品を鑑賞することは不可能だと思う。

今これを読んでいるあなたにも体があるから。

それを鑑賞する時間を生きるあなたがいる。

『自分』というタイトルの絵画に描書き込まれた手紙の一部分。

「不便で自分（聴覚障害）が嫌だーって思っではないですよ。

むしろ、自分でよかったなあと思うことが多くあります。

齋藤さんは、なんだと思いますか？」

「自分はたとえば荷作りがどうしてもうまくできなかつたり（つい昨日のことです。）人とうまく接することができなかつたり、自分が嫌だーってけっこうよく思います。でも、私も、つきつめれば、むしろ自分で良かったと思うなあと改めて考えてみたら思いました。それは別に自分の人生のいいところを数え上げたら



そう思えるんじゃないくて、最悪な状」

その絵をコピーした紙に続きを書いた。

「況でも、自分も周りも世界も嫌で居場所もなく、それでも、歩く空気や、音楽を聞いた時の感じ、つらい感じですら、この“感じ方”ができる自分があるということ、嬉しいと思えたことがあったから。」そんなようなことを書いたのだと思う。今はその手紙に返事が来て、またこれから返事を書こうとしているところです。

それでいて、私は、会いたいとも思うようになった。

それぞれのスペース、交わし合ったとしても分かり合えない、それでも、会うことはできる。

会うことができるというのはすごいことだと思う。

元はと言えば、全員どこにもいなかった。

「手紙を待ちながら」

田中義樹（美術作家）

今回この「とどく」のプロジェクトに参加した作家の田中義樹です。「とどく」は約3年がかりの長いプロジェクトだったので、こんなことがあったなあと色々思い返せます。

まず一番最初に児童養護施設の「子供の家」の高校生の子と、もう施設を出た社会人の方と手紙のやりとりをすることになりました。

まずこっちから最初に1通手紙を送ったのですがそれが全然返ってこなかったのです。たしか3ヶ月くらいは返ってこなかった気がします。仲介してくれた角能さんは「最近の子ども達は手紙のやりとりをしないからどういう風に手紙を書いたらいいか悩んでるのでは？」というようなことを言ってくれたのですが、自分が子どもの頃も手紙の文化はほぼ廃れていたもので、返事が返ってこないときどうしたらいいか悩みました。

手紙とセットで小さい山羊の彫刻も気合いを入れて作って送っていたので、「いいもんあげたし返事くれたってええやん」と思いながら悶々としていた気がします。もしかしたら失礼なこと書いていて嫌われたのでは？とか考えたり。で、やっと社会人の方から手紙が届いたのがものすごくうれしかったです。

もしかしたらあの時がこの「とどく」での自分のうれしさのピークだったかも知れません。内容はすごく普通のおしゃべりの内容でした。自分は今こんなことをして、流行のあれが好きで、田中さんはこれは好きですか？みたいな。ちょっと拍子抜けしてしまうくらい普通の手紙でした。

他の人と違うバックグラウンドを持った人と関わることや、ほとんどやったことのない手紙というコミュニケーションをすることで、なにか特別なことが起きるのはと3ヶ月の間に考えていた自分がいたようです。けれど、その手紙の最後に「お返事待っています」と書いてあったのがプロジェクト関係なくうれしかったのを覚えています。



それから結果7人くらいの子供達と手紙のやりとりをしました。その間に「子供の家」に行き、角能さんに手紙では見えない子供達のことや、そこでの生活のことを聞いたりしました。

やりとりは続けながら、「とどく」の成果展ではなにをしたらいいのかわかっていました。児童養護施設の現在について調べて、来た人に知ってもらえる作品も考えていたときがありましたが、それはまたいつかにして今回は手紙を交換してくれた子達に、ただみてもらいたいものを作ることにしました。ずっと手紙を待っていたこと、待たせていたときのことを思い出して『山羊は手紙を待ちながら』というサミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』を下敷きにした舞台を作ったのでした。

「子供の家」の子達に来てくれた日、舞台を見て笑ってくれていて、やってよかったと思ったとき自分の中で「とどく」がおわった気が少ししました。

最初に手紙をくれた社会人の方も一人で見に来てくれたのです。「子供の家」に帰った後、角能さんに「田中さんに初めて会ったけど、思ったとおりの人だった」と言っていたそうです。なにが思っていた通りだったのか気になりました。また手紙で聞いてみることにします。

ふつうで、単純で、大切なことを、あなたに

小川希（ディレクター/キュレーター）

「共生・交流」をキーワードとした新しいプロジェクトを何か考えてもらえないかと東京都渋谷公園通りギャラリーから連絡をいただいたのが2020年の春。おりしもコロナウイルスがここ日本でも猛威をふるい始め、第1回目の緊急事態宣言が出された直後のこと。不穏な空気が漂い始めた、ちょうどあの時期のことである。人と人が顔を合わせ、時間や空間を共に過ごす。それまでは当たり前だったそんな日常が、突如として不可能になったのだ。プライベートだけでない。仕事をはじめとした様々な社会生活もオンラインで行うことが瞬く間に一般化していく。新しいプロジェクトに纏わるギャラリー側との初めての会議も、慣れないオンラインで行われた。小さな画面越しに伝えられたのは先に挙げたキーワードに加え、「コロナの感染状況がこの先どうなるか見えないこともあり、展示やイベントの企画を組んだとしても、場合によってはギャラリー空間が使えないこともあるかもしれない」という事実だった。

「共生・交流」をキーワードとして掲げているからには、複数の人々が参加するプロジェクトにしないといけない。しかしながら、顔を合わせることは難しいかもしれないというのである。単純に考えてみれば、オンラインで全ての行程が進むような企画を提案してくれということなのだろうと思ったが、いいアイデアが浮かばない。オンラインでのコミュニケーションは、瞬時に人と人をつなぎ、情報がやりとりされ、無駄な要素は削ぎ落とされる。効率的で、何より感染の心配がないのであるから、新しいスタンダードになるのはわかっていたのだが、どうしてだか味気なく感じてしまう自分がいた。どうせなら、この状況ならではのプロジェクトをしてみたい。それで思いついたのが「手紙」であった。

2回目のミーティングは、オンラインでもよかったのだけど、私が暮らす吉祥寺から渋谷公園通りギャラリーまで自転車で向かうことにした。感染を避ける意味があったのだが、閉じこもってパソコンの画面ばかり見ているその頃にあって、小一時間、自転車を走らせ、ゆっくりと通り過ぎる街並みは、なんだか新鮮な感

じがして幸先がいい気持ちでした。ギャラリーに到着し、アーティストが「手紙」のやりとりを誰かとしながらつくり上げるプロジェクトの話を変えたところ、担当の方には気に入ってもらえ、相手をどうするかという話になる。「アートを通してダイバーシティの理解促進や包容力のある共生社会の実現に寄与する」という渋谷公園通りギャラリーの掲げる理念もあり、自然の流れで「多様な背景を持った人々」とアーティストが手紙で交流を重ねていくという、プロジェクトの大筋が決まる。

その後も、感染状況は一向に良くなる兆しは見えず、私が運営する Art Center Ongoing もトークなどのイベントは全てオンラインにシフト。人と会うことも減っていき、自分のスペースにて一人で過ごすことも多くなっていったが、その間も渋谷のプロジェクトのことは考え続けていた。「手紙」、そこから声をかけたいアーティストがぼんやりとイメージされてくる。田中義樹、齋藤春佳、大木裕之の3名であった。田中は彫刻やインスタレーションを手掛ける作家であるが、学生時代には劇団を主宰していた過去もあり、またアーティストと並行してコンテンツユニット「そんたくズ」としても活動するなど言葉によるストーリーづくりに長けている。齋藤の描く絵画には、本人の体験や記憶や想いが時に言葉で綴られ、それが画面を構成する一要素になると同時に豊かに機能している。映像作家の大木は詩人でもあって、作品中で時に大木自身が発する詩の言葉の連なりは、彼の映像世界を強く特徴づけている。3人のアーティストは皆、それぞれの作品世界の中で言葉を使いこなしていて、それが「手紙」を使う今回のプロジェクトにおける選出理由であった。

3人にプロジェクトの内容を話し、それぞれの希望もあって、田中は児童養護施設の子供達、齋藤はろうの学生達、大木は「ひきこもり」の若者達と手紙でやりとりをしていくことが決定する。そしてプロジェクトの名前。小難しくなく、スッと頭に入ってきて、イメージしやすい言葉がいい。アーティストから多様な背景を持った人々に、また多様な背景をもった人々からアーティストに、手紙を通じて何かがとどく。ああ、「とどく」でいいね、と。それで2020年の12月に、レーター/アート/プロジェクト「とどく」が本格的に始動することとなる。

児童養護施設「子供の家」、ろう学校の元教員、「ピアサポートネットしぶや」といった、今回のプロジェクトの協力者たちの力を借り、3人の作家は手紙やビ

デオレターを送り始めるのだが、そこには二つのルールがあって、一つは「手紙の内容を外に公表してはいけない」、もう一つは「手紙を送る相手に直接会ってはいけない」というもの。それはキュレーターやギャラリースタッフに対しても厳守され、私は、だからどんな内容の手紙がやりとりされていたかを今でも知らない。唯一、作家たちが綴る「とどく」の公開ブログの中から、こんな感じのことが最近手紙でやりとりされているのかなというのを想像することだけはできた。ただそこから、ゆっくりではあるが、やりとりが着実に進んでいることを窺い知ることができた。

それから2年弱にわたり「手紙」を介したやりとりは続いていき、その成果発表としての展覧会が2022年の秋に開催される。ただ、この「とどく」というプロジェクトの「成果」とは、何処にあったのであろうか。作家達は手紙やビデオレターのやりとりを、時間をかけて行っていたわけだが、その期間、実際に相手と会うこともなければ、内容が公表されることもない。間接的でアナログな交流が淡々と行われていた、ただそれだけともいえるのだ。果たしてプロジェクトの「成果」とは？

田中が「とどく」の成果展で発表した、白山羊と黒山羊が「手紙」を待つコント劇において、最後にとどいた手紙の内容は至って平凡なものであった。また齋藤が制作した絵画や焼き物に記した手紙の内容にも、何か特別な告白などは存在せず、日常でのささやかな想いが綴られているようにも感じた。ただし、その普通のやりとりこそが、とても重要な気がしたのだった。「多様な背景を持つ人々」というフレーズからは、社会が抱える問題を見出し、リサーチを重ね、最終的に包摂あるいはセンセーショナルな作品としてまとめ上げる、言わば、そうした現代アートの常套手段をイメージするのは容易いが、田中と齋藤の作品からはそうした傾向は微塵も感じなかった。「児童養護施設の子供達」「ろうの学生」という言葉から想起されるステレオタイプのイメージは、長い時間の手紙のやりとりで自然と消えていき、最後に特別ではない普通の言葉のやりとりが残った。そして、それこそが、交換不可能な唯一の「作品」を生んだのであった。

大木の展示空間では、「ひきこもり」の当事者とのやりとりに加え、仲介を担ってくれた「ピアサポートネットしずや」の職員の方々と作家である大木との親密な関係が垣間見える映像が上映されていた。そこでは、社会と、社会に生きづら

さを感じる人々との間で、その二つをつなぐ試みを誠意を持って続ける人々の姿がクローズアップされていたように思えた。「とどく」のプロジェクトを通じて強く感じたことに、間に立つ人々の存在の大きさがある。齋藤のブログの中に、「社会の側に障害がある」という言葉を手紙のやりとりでもらったエピソードが出てくるが、そうした社会の側にある障害から、当事者達を守るために間に立つ人々が、同じ社会の中にいるのである。

最後に、観客に対して「とどく」は何をとどけたのだろうか。特別ではないやりとり、間に立つ人々の存在、いずれも作家達が手紙やビデオレターといったアナログなコミュニケーションを時間をかけて積み重ねる中で、作品として現前させていったものである。そこで費やされた時間に思いを馳せる。書いているときだけが手紙の時間ではない。書く内容を考えている時間、返事を待っている時間、それも手紙の時間なのだ。そうして長い時間をかけて相手のことを想うこと。たとえ自分の中で色々な想いが想起されたとしても、それが目に見える形になったり、相手に伝わったりしないのであれば意味がない、という考え方も当然あるであろう。ただ「とどく」が指し示したのは、おそらく、そうした生産性や効率性とは真逆のもの。ここにはいないあなたのことを、長い時間をかけて想い、言葉に綴る。「とどく」が行ってきたこのすごく単純な営みは、人と人が強制的に離れ離れにならざるを得なくなったこの歴史的な時期において、必然性を持って生まれたプロジェクトであった気がしてならない。

あなたが今、一人になる時間を与えられたら、誰のことを想いますか？ 外からは何も見えなかったとしても、そこで費やされる時間は無駄な時間ではないはずです。だから、相手のために想像したことを手紙に書いてみたらどうでしょう。ゆっくりではあっても、きっと想いは「とどく」から。



An ordinary, simple, yet important thing for you

OGAWA Nozomu (Director/Curator)

In spring 2020, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery asked me to plan a new project featuring two keywords: "coexistence and interaction." It was right after the state of emergency had been declared for the first time, while coronavirus was getting widely spread here in Japan. Ordinary life, such as meeting each other face-to-face and spending time and sharing space together, suddenly became impossible. The first meeting with the gallery about the new project was also done online, which we were not used to.

With "coexistence and interaction" as the keywords, the project must involve multiple people. However, the gallery said it might be difficult to meet face-to-face. Online communication became the new standard, exchanging only vital information and stripping away useless elements. It is efficient and, above all, infection-free. But for some reason, I found this new way of communication uninspiring. In this light, I wanted to do a project addressing this situation. Then I came up with the idea of "letter."

We could have the second meeting online, but I decided to cycle from Kichijoji, where I live, to Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery. It was meant to avoid infection, but the one-hour journey was more refreshing than expected. As the scenery passed by, it felt like a new start to me, as I had been accustomed to looking at a computer screen. I arrived at the gallery and shared my project idea that artists could exchange "letters" with someone and make something. The gallery liked it, so we started thinking of the correspondents. The philosophy of Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery is to "contribute to the promotion of understanding diversity and the realization of an accepting and inclusive society through art" in our mind. In response to this, the project involves "people from diverse backgrounds," and artists would interact with each other through letters.

Even after that, the infection rate remained high, but I kept thinking about the

"letter" project in Shibuya during that time. From there, some artists came to mind whom I wanted to invite. They were Tanaka Yoshiki, Saito Haruka, and Oki Hiroyuki. Tanaka is an artist who makes sculptures and installations. He has led a theater company since he was a student and is active as a member of the comedy unit "Son-takz," which means that he is good at creating stories with words. In paintings by Saito, her own experiences, memories, and feelings were sometimes crystallised in words and visualised in the composition of her paintings. Oki, the videographer, is also a poet, and the series of poetic words which Oki sometimes utters in his works strongly characterizes his video works. All of the 3 artists know how to handle words through their works, and that was why I selected them in this project.

I explained about the project to the 3 artists, and, considering each of their wishes, it was decided that Tanaka would exchange letters with children at a children's nursing home, Saito with deaf students, and Oki with "hikikomori" (shut-in people) young people. I had to fix the title of the project. It should not be difficult and easy to understand and imagine. From artists to people with diverse backgrounds, and vice versa, something will "todoku" (arrive) through letters. Oh, "todoku" sounded good. In December 2020, Letter / Art / Project "TODOKU" was officially started.

With the help of a children's nursing home, "KODOMONOIE," a former teacher at a school for the deaf, and "Peer Support Net Shibuya", the 3 artists started sending letters or video letters. There were 2 rules in the letter exchanges: the first one is "you cannot disclose the contents of the letters;" the other one is "you cannot meet artists' correspondents face-to-face." They are applied to the curator and gallery staff as well, so I still do not know what kind of contents were exchanged in their letters. I could only imagine what was happening recently in their letters, from the public blog written by the artists.

For the next 2 years or so, the exchanges of "letters" continued, and the exhibition will be held in the fall of 2022 to present the project's results. But where was the "result" of this "TODOKU" project? The artists exchanged letters and video letters over time, but we can say that there were simply some indirect and analogue interactions there. That was all.

In the comic play in the "TODOKU" exhibition by Tanaka, the content of the letter was very ordinary, which the white goat and the black goat had been waiting for. Also, in the contents of the letters quoted on paintings and pottery by Saito, there were not grand narratives but small thoughts in daily life. However, those ordinary communications were significant. From the phrase "people from diverse backgrounds," it is easy to imagine, so to speak, a "common practice" in contemporary art that an artist finds out a problem in society, does in-depth research, and makes an inclusive or sensational artwork in the end. But I did not find such an attempt in the works by Tanaka and Saito. The stereotypes associated with "children at children's nursing home" and "deaf students" gradually disappeared in the letter exchanges, and everyday, ordinary verbal exchanges were produced at the end. This brought forth the unexchangeable and unique "works."

In the exhibition space of Oki, as well as the exchanges with "hikikomori" people, videos were screened in which you could see the close relationship between the staff of "Peer Support Net Shibuya" and Oki, the artist. It looked like, among society and people who have difficulties in their life in society, the close-up of the people who continued their attempts to connect the two with honesty. One of the things I strongly felt through the "TODOKU" project is the importance of those people who stand in between. In a blog post by Saito, there was an episode where she received an expression of "obstacles are on the side of society" in a letter. Those people who stand in between protect people with difficulties in their life from those obstacles in society, and they are in the same society.

At last, what did "TODOKU" deliver to the visitors? Those quotidian exchanges and the existence of people who stand in between—both are the things that the artists made present as their works through the accumulation of analog communication, such as letters and video letters over time. Think about the time spent there: it is not only the time spent on writing the letters, but also on thinking of what to write, on waiting for a reply, and on thinking of another person in the whole process. What "TODOKU" showed us is, maybe, the opposite of productivity or efficiency. Think of someone whom you have missed for a long time, and write about what you feel in words. I believe that this plain effort that "TODOKU" has been making is a project born out of necessity, amidst a

historical period when people are forced to stay away from each other.

If you had time to be alone now, who would you think of? Even if you could not think of anyone immediately, the time spent on thinking would not be wasted. So, how about writing a letter to that person? Your thought will "TODOKU" (arrive), despite slowly.



「とどく」を振り返って

竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員）

本稿では、レター/アート/プロジェクト「とどく」（以下、本プロジェクト）及びその集大成となるレター/アート/プロジェクト「とどく」展（以下、展覧会）を見続けてきた東京都渋谷公園通りギャラリー（以下、当ギャラリー）担当の視点から本プロジェクトの始まりから展覧会までを振り返る。

新型コロナウイルス感染症が猛威を奮い始めた2020年4月、対面での人との交流が制限される中、オンラインでのコミュニケーションが一気に普及し始めた。そのような社会状況の中 Art Center Ongoing 代表の小川希氏（以下、小川氏）を招聘し、多様な背景を有する人々とアートを通じて交流し、相互理解を深めることを目的とする当ギャラリーの事業として、本プロジェクトが立ち上がった。

オンラインに限らず、何事も速さを求めるこの時代に逆行し、敢えて時間や距離のある、手紙やビデオレターなどでやりとりをし、最終的にアート作品をつくり上げていく企画だ。参加作家は、現代アートの領域で活躍する大木裕之（以下、大木）、齋藤春佳（以下、齋藤）、田中義樹（以下、田中）に決まり、やりとり相手は、作家達の意向を受け、「ひきこもり」支援団体、ろう学校、児童養護施設などをリサーチし、参加の可能性など様々な団体に声掛けをした中で NPO 法人ピアサポートネットしづや、橋本一郎氏、児童養護施設「子供の家」とつながり、協力を得ることができた。企画始動から6ヶ月が過ぎていた。

その年の12月、本プロジェクト始動のキックオフトークの開催までに、各作家の相手が決まり、2021年1月に作家達が手紙やビデオレターを送りスタートをきったのである。映像作家の大木は、「ひきこもり」と言われている人達とビデオレターで、齋藤は、耳の聞こえない若者達と、田中は、児童養護施設の子も達と文通をはじめた。これらのやりとりは、小川氏、当ギャラリー、協力者との協議の上、内容については第三者が確認をしない。そして、やりとりの相手には展覧会開催までは直接会わない、というルールで進められた。手紙の内容は見ない、見せない。では、プロジェクトの進行をどのように追えばよいのか。手紙

の内容を公開こそはできないが、その内容から作家達が受け取ったものをブログという方法で開示した。作家達は、三者三様の言葉で思いを綴った。ブログの開設は2021年4月。同月30日には3作家一斉にブログを公開した。トークとブログを順に追っていくと作家達の内心やその変化を読み取ることができる。後に齋藤は、トークでは話さなかったことをブログに書くことができ、ブログの存在はありがたかったと話している。その後のブログの更新は、各作家の手紙の到着頻度に合わせて公開した。

2021年2月から小川氏が渡欧し、その年のトークは全てオンラインでつなぎ、行った。「ひきこもり」の専門家である精神科医の齋藤環氏やインタープリターの和田夏実氏から、やりとり相手の取り巻く環境や、同じ背景を持つ人達がアートプロジェクトに参加することへの意義などを伺い、プロジェクト自体を深めていった。

作家達は、時間をかけたやりとりをしているが、一方で本プロジェクトについての発信はあらゆるインターネットツールを使い公開してきた。このギャップも、今思えば少し可笑的。現代を生きる私達にとって、オンラインというものは便利なものなのだろう。渡欧中の小川氏ともすぐにつながることができた。

2022年、本プロジェクトが進むにつれ、作家達には、展覧会への出展作品の制作という課題が立ちだかった。テーマを与えられ、それに沿ってリサーチをし、作品制作をする作家にとって、社会的に何らかの背景のある相手との手紙の往復だけで何を制作すればよいのか、といったところだろうか。齋藤も田中もクロストークでその難しさについて、話している。相手のことがわからない状態では作品を制作する難しさがあるのか、大木も田中も協力者への訪問を希望した。2022年4月に田中とともに「子供の家」を訪れ、支障のない範囲で子ども達の話聞いた。園庭で遊ぶ子ども達の中に、田中のやりとり相手がいって遠目から遊ぶ姿を見つめていた。その帰路、「来てよかった」と話し、何か気持ちにけりがついたように見えた田中は、以後、子ども達が喜ぶものをつくることを宣言し、山羊をモチーフとした作品群をつくり上げた。

大木には、映像への返信ではなく、やりとり相手が撮り溜めていた映像が届き、その「わからなさ」を知るために、ピアサポートネットしづやに何度も足を運ぶ。徐々に彼らの背負っているものを知ることになる大木は、4回目の訪問で彼らのサポートをしたいと打ち明け、自分自身を変化させていった。大木は、「ひきこ

もり」の事象と映像を重ね合わせ、度々トークで現代社会に向けた警鐘ともいえる映像がもたらす危険性について吐露している。作品制作は展覧会が開幕する直前に開始され、会期中も蠢く感情を日々作品に転化し続けた。

3作家の中では、齋藤が比較的順調にプロジェクトを進められていたのではないかと推測する。聞こえないあなたと聞こえる私の共通点を探求していた齋藤だが、「わかりあえなさ」に到達した。齋藤は、本プロジェクト期間中に妊娠・出産を経験した。彼女の内部に起こる変化の如く、その頃に発表した齋藤の記録(日記)には、ぼんやりしていた何ものかが、徐々にくっきりと浮かび上がってきたかのような、心の動きが感じられた。

展覧会の関連イベント「あなたにとどく、いいあんばい」のトークゲスト伊藤亜紗氏(以下、伊藤氏)が、「利他」の観点から展覧会を見た時に3作家に「待つこと」「わからなさ」「自分が変わる」という「手紙的利他」を考える上での大事な要素3つが揃っていると話した。伊藤氏によると、(主にビジネスの世界において)人によいことをするというのが利他の一般的な考え方だが、そんな単純なものではない。誰かが誰かによいことだからとその人の考えを押し付けたとして、そこには能動的な利他が発生し、人(受け手側)をコントロールしようとする暴力的なものになってしまうという。「待つ」は、能動的ではない利他が起こりやすい。「わからなさ」は、受け手のことをわかったつもりでいることがよくないことであり、相手との間に断絶があった方がよい利他が発揮される。「自分が変わる」では、関わる中で自分が変わっていくことは、よい利他である^{注1}。齋藤は「わからなさ」にたどり着き、田中は返事を「待った」。大木は、自分が「ひきこもり」の人達をサポートしたいという変化を起こした。この利他とプロジェクトを重ねて考えた時に、「わからなさ」「待つこと」「自分が変わること」は3作家に当てはまる。田中も大木も「わからなさ」に出くわし関係者に会いに行っている。齋藤も2人の若者の返事を待っていたし、大木も映像が届くのを待っていた。田中は、社会的な視点からとらえた作品を制作しようと考えていたが、子ども達が喜ぶ作品をつくることにシフトした。齋藤は、知る前の自分に戻れないからと手話を覚えることを躊躇していたが、学ぼうという気持ちに変化させた。伊藤氏は、「他者の潜在的な可能性に耳を傾けることという意味で利他の本質は他者をケアすることではないか。」^{注2}と述べている。距離と敬意を持って他者を

気づかうこと、耳を傾け、そして拾うこと。さらにこのように続けている。「ケアが他者への気づかいであるかぎり、そこには意外性がある。ケアとしての利他は、よき計画外の出来事へと開かれている。そこには必ず『他者の発見』がある」^{注3}。

「他者の発見」と「自分の変化」は表裏一体でなければ、一方的な利他になってしまうのだ。

本プロジェクトは、意図せぬまま、作家とやりとり相手との間により利他が生まれていたのではないか。手紙やビデオレターという媒体の特質によって、互いに距離があり、自分ではコントロールし得ない返事を待つ時間があった。計画外の出来事。田中は、舞台『山羊は手紙を待ちながら』で、何か特別なことが書かれているかもしれない手紙を待つが、届いた手紙の内容は普通だった。これは、田中の経験に基づいて描かれたものだという。返事がすれ違うこともある。指文字でのメッセージを送った齋藤だったが、それへの返信を期待していた返事が一通前の手紙への返信だった。

人々が「多様性」「共生」を謳い他者を思うがゆえに、その他者以上に主張する傾向にある現代社会の中で、ほどよい距離感で「他者を思う」ことが必要なことなのかもしれない。まさに「あなたにとどく、いいあんばい」だ。

この展覧会は、作家と協働者が何か物理的に制作したものを発表する形式ではなかった。作家とやりとり相手の直接的ではない間接的な関係。作品自体もどこか間接的であった。だからなのか、相手の顔が見えづらく展示の「わからなさ」がとどいた人もいたのは事実だが、そこには、約2年間かけて積み重ねていった時間があり、作品の傍らからふんわりと見え隠れるやりとり相手の存在が感じられた展示だった。SNS上で展覧会に対する感想を見つけた。「観た瞬間にはわからなかった事があとからじんわり伝わってくる。まるで手紙のようだ」。この時間を受け取った鑑賞者は、作品を介して作家達の文通相手と対話をしていたのかもしれない。展覧会ももうすぐ閉幕を迎える。展覧会を観てくれた人々が何度も読み返せる手紙のように本プロジェクトが心に留まるといいなと思う。

本プロジェクトは、2023年3月まで続く。

注1-「とどく」イベント「あなたにとどく、いいあんばい」トークより(2022年10月16日開催、東京都渋谷公園通りギャラリー)

注2-伊藤亜紗編、中島岳志、若松英輔、國分功一郎、磯崎憲一郎『「利他」とは何か』(集英社、2021年)、55頁

注3-同上

【その他参考文献】

伊藤亜紗、村瀬孝生『ぼけと利他』(ミシマ社、2022年)



Look back on "TODOKU"

TAKENO Yukika (Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

This article is to look back on Letter / Art / Project "TODOKU" (the Project) including Letter / Art / Project "TODOKU" Exhibition (the Exhibition), as the Project's culmination, from the perspective of the curator at Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery (the Gallery) who has managed the Project and the Exhibition.

In April 2020, when a new type of coronavirus infection began to rage, online communication began to be common at a rapid pace while face-to-face interaction with other people was restricted. Under such a social situation, we invited Ogawa Nozomu, the director of Art Center Ongoing, and launched the Project as a project of the Gallery with the aim of encouraging interaction with people from diverse backgrounds and deepening mutual understanding through art.

Going against this period when people expect greater speed not only in online communication but also in everything, this is a project in which artwork would be finally made after exchanges of letters and video letters, which takes longer time and distance. Participating artists are Oki Hiroyuki, Saito Haruka, and Tanaka Yoshiki, who are all active in the field of contemporary art. We did research about various organizations following artists' wishes, and finally got cooperation from a non-profit organization Peer Support Net Shibuya, Hashimoto Ichiro, and KODOMONOIE, a children's nursing home.

In January 2021, the Project started when the artists sent letters and video letters. Oki, the videographer, began exchanging video letters with people known as "hikikomori" (shut-in people), while Saito started exchanging letters with deaf youth, and so did Tanaka with children in a children's nursing home. Based on the discussion by Ogawa, the Gallery, and supporters, the contents of these exchanges were not disclosed to third parties. And, another rule is that the artists and the correspondents don't meet each other face-to-face until the Exhibition. The contents of the letters were not seen or shown. To follow the Project with those rules, what the artists received from the letters

was disclosed in the form of a blog. Each of the three artists wrote their thoughts in their own words. If you follow the talks and blogs in order, you can understand the inner thoughts of the artists and their changes.

While the artists spent a lot of time communicating with their correspondents, we also used all kinds of Internet tools in public communication about the Project. This gap is a bit funny now that we think about it. Doing things online is probably convenient for those of us living in this modern age. We were able to connect with Ogawa, who went to Europe in February 2021, right away.

In 2022, as the Project was going forward, the artists were faced with the challenge of creating works for the Exhibition. What should artists create just by exchanging letters with people from some social backgrounds? Both Saito and Tanaka mentioned this difficulty in their crosstalk sessions. Oki and Tanaka requested to visit supporters to understand their correspondents. In April 2022, we visited KODOMONOIE with Tanaka and heard about children as much as possible without disturbing them. Among the children playing in the yard, Tanaka's correspondents were there, and he was watching them play from a distance. On his way home, Tanaka said he was glad to have come and he seemed to have got clear in some way. He declared that he will create something that makes children fun, and made a group of works featuring goats.

Instead of replying to the video letters, Oki received videos that the correspondents had taken and stocked, and he visited Peer Support Net Shibuya many times to learn about "ununderstandableness" of those videos. Gradually learning more about what they were carrying, Oki confided in them on his fourth visit that he wanted to support them, and he changed himself. Oki overlapped the phenomenon of "hikikomori" with videos, and has repeatedly spoken out about the dangers posed by videos, which can be seen as a wake-up call to this modern society. During the Exhibition, Oki continued to transform his stirring emotions into his works everyday.

Among the 3 artists, I suspect that Saito was doing the Project relatively smoothly. She was searching for common grounds between you who cannot hear and me who can hear, but she reached "ununderstandableness of each other." Saito experienced pregnancy and childbirth during the Project. Like the changes that occurred inside her,

Saito's records (diary) published around that time showed the movement of her mind, as if something that had been vague was gradually standing out in clear relief.

Ito Asa, the guest speaker at the talk session "Anata ni Todoku li Anbai," which is the Exhibition's related event, said that when looking at the Exhibition from the perspective of altruism, the 3 artists have all of 3 important elements to think about "letter-like altruism": "waiting," "ununderstandableness," and "changing oneself." According to Ito, the general idea of altruism is to do good to others, but it is not that simple. If someone imposes his/her idea on someone else because it is a good thing to do, she said, there will be active altruism, and it will become a violent attempt to control people (the recipients). "Waiting" is prone to non-active altruism. As for "ununderstandableness," it's not good to think one understands the recipient, and altruism functions better when the one is disconnected with the recipient. About "changing oneself," it's good altruism that one changes oneself while engaged with the recipient¹. When thinking about this altruism and the Project in conjunction, "ununderstandableness," "waiting," and "changing oneself" are applied to the 3 artists. Both Tanaka and Oki encountered "ununderstandableness" and went to meet the people involved. Saito was also waiting for responses from the 2 young people, and Oki was also waiting for videos to arrive at him. Tanaka was planning to create works that have a social perspective, but shifted his plan to creating works that children would enjoy. Saito was hesitant to learn sign language because she could not go back to herself before she knew it, but she changed her mind to learning it. Ito states, "The essence of altruism, in the sense of listening to the potential of others, is to care for others"². With distance and respect, show concern to, listen to, and pick up others. Further she continues like this. "As long as care is showing concern for others, it has an element of surprise. Altruism as care is open to events out of the good plan. There is certainly 'discovery of others' there"³. Unless "discovery of others" and "change in oneself" are two sides of the same coin, altruism will be one-sided.

In the Project, good altruism may have been unintentionally created between the artists and the correspondents. By the nature of the media of letters and video letters, there was a distance between each other and a time of waiting for a response which was

uncontrollable. Unplanned events. In the play *Goat waiting Godot*, Tanaka waits for a letter that may contain something special, but the letter he received was nothing special. Tanaka says this was based on his own experience. Sometimes replies cross each other. Saito sent a message in fingerspelling, but the reply was to the previous letter, not the one she expected.

In today's society, where people tend to claim "diversity" and "coexistence" and think of others more than others, it may be necessary to "think of others" with a moderate sense of distance. That is truly "Anata ni Todoku li Anbai."

The Exhibition was not in the form of presenting something physically produced by the artists and collaborators. The indirect relationships between the artists and their correspondents, which were not direct. The works themselves were also somewhat indirect. Though not sure if it's because of that, it was an exhibition in which we could feel the 2 years piled up and the existence of correspondents vaguely behind the works. One comment on a social network said, "Something I didn't understand at the moment I saw the exhibition was gradually conveyed to me afterwards. It's just like a letter." The visitors who received this time may have had a dialogue with the artists' correspondents through their works. The Exhibition will be closed soon. We hope that the Project will remain in the hearts of those who saw the Exhibition, like a letter that can be read over and over again.

The Project will continue until March 2023.

Notes:

- 1 The talk session "Anata ni Todoku li Anbai", an event related to the "TODOKU" Exhibition (October 16th, 2022 at Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery).
- 2 ITO Asa (ed.), NAKAJIMA Takeshi, WAKAMATSU Eisuke, KOKUBUN Koichiro, ISOZAKI Kenichiro, *Rita toha Nanika*, Shueisha, 2021, p.55.
- 3 Ibid.

Bibliography:

ITO Asa and MURASE Takao, *Boke to Rita*, Mishimasha, 2022.

ディレクター/キュレーター・作家プロフィール

Director/Curator & Artists' Profile

小川 希 (Art Center Ongoing 代表)

1976年東京都生まれ。東京都を拠点に活動。2008年1月に東京・吉祥寺に芸術複合施設 Art Center Ongoing を設立。現在、同施設の代表。文化庁新進芸術家海外研修制度にてウィーンに滞在 (2021年-2022年)。中央線高円寺駅から国分寺駅周辺を舞台に展開する地域密着型アートプロジェクト TERATOTERA ディレクター (2009年-2020年)、茨城県東北芸術村推進事業交流型アートプロジェクトキュレーター (2019年)、社会的包摂文化芸術創造発信拠点形成プロジェクト UENOYES (ウエノイエス) ARTS TIME PROJECT ディレクター (2018年) など多くのプロジェクトを手掛ける。



OGAWA Nozomu (Director of Art Center Ongoing)

Born in Tokyo in 1976. He established Art Center Ongoing, the art complex center, in January 2008 in Kichijoji, Tokyo, and is currently the director. He stayed in Vienna with the Program of Overseas Study for Upcoming Artists by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan (2021-2022). He was also involved in many projects as the director of TERATOTERA, the community-based art project between Koenji Station to Kokubunji Station on JR Chuo Line, (2009-2020), as the curator of the interactive art project in Northern Ibaraki Prefecture Art Village (2019), and as the director of ARTS TIME PROJECT at UENOYES, the project for formulation of creation and transmission base for socially inclusive arts and culture (2018).

大木 裕之 (映像作家、現代美術家)

1964年東京生まれ。高知県、東京都、岡山県を拠点に活動。東京大学工学部建築学科卒業。映画/映像にとどまらず、インスタレーション、パフォーマンス、ドローイングなど多岐にわたり制作。主な映画作品に『HEAVEN - 6 - BOX』(第46回ベルリン国際映画祭、NETPAC 賞受賞) など。主な展覧会に「東京ビエンナーレ2020/2021」(風月堂ビル)、「あいちトリエンナーレ2016」(堀田商事株式会社)、「第4回 恵比寿映像祭—映像のフィジカル」(東京都写真美術館、2012年)、「時代の体温 ART/DOMESTIC」(世田谷美術館、1999年) など。



OKI Hiroyuki (Videographer, Contemporary artist)

Born in Tokyo in 1964 and based in Kochi, Tokyo, and Okayama. Graduated from the Department of Architecture, Faculty of Engineering, University of Tokyo. Not limited to movies and videos, he makes a variety of works of installations, performances, drawings, and etc. His main works include "HEAVEN-6-BOX" (Winning the NETPAC Award in the 46th Berlin International Film Festival). He participated in exhibitions such as "Tokyo Biennale 2020/2021" (Fugetsudo Bldg.), "Aichi Triennale 2016" (Hotta Shoji Corporation), "The 4th Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions -How Physical-" (Tokyo Photographic Art Museum, 2012), "ART/DOMESTIC Temperature of the Time" (Setagaya Art Museum, 1999), etc.

齋藤 春佳 (美術作家)

1988年長野県生まれ。東京都を拠点に活動。多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業。時間という概念を物体の運動エネルギーによる変化の総体と捉え、出来事を時空間の構造と結び付けた絵画や映像、インスタレーションを制作。主な展覧会に「ACT Vol.4 『接近、動き出すイメージ』」(TOKAS 本郷、2022年)、「VOCA展 2022現代美術の展望—新しい平面の作家たち—」(上野の森美術館、東京)、「都美セレクショングループ展 2020[描かれたプール、日焼けあとがついた]」(東京都美術館ギャラリーA) など。受賞歴に「FACE展2022」入選 (SOMPO美術館)。



SAITO Haruka (Artist)

Born in Nagano in 1988 and Based in Tokyo. Graduated from Oil Painting Course, Department of Painting, Faculty of Art and Design, Tama Art University. She thinks of the concept of time as the sum of changes by kinetic energy of objects, and makes paintings, videos and installations, connecting events with the structure of time and space. She participated in exhibitions such as "ACT Vol.4 'Approach to Alternative Images'" (Tokyo Arts and Space Hongo, 2022), "VOCA (The Vision Of Contemporary Art) 2022 - New Artists of Two-Dimensional Work" (The Ueno Royal Museum), "Group Show of Contemporary Artists 2020 'Sunburn After Swimming in the Painted Pool'" (Gallery A at Tokyo Metropolitan Art Museum), etc. She is selected in a competition at Sompomuseum of Art, "FACE 2022".

田中 義樹 (美術作家)

1995年三重県生まれ。東京都を拠点に活動。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業。インスタレーションを主に制作。コントユニット「そんたくズ」の田中寿司ロボットとして舞台の制作、公演も行っている。主な展覧会に第21回グラフィック「1_WALL」グランプリ受賞者個展「田中義樹展『ジョナサンの目の色めっちゃ気になる』」(ガーディアン・ガーデン、東京、2020年)、「第23回岡本太郎現代芸術賞 (TARO 賞)」(岡本太郎美術館、川崎、2020年)、「群馬青年ビエンナーレ2019」(群馬県立近代美術館) など。受賞歴に「第21回グラフィック『1_WALL展』」グランプリ (2020年)。



TANAKA Yoshiki (Artist)

Born in Mie in 1995 and based in Tokyo. Graduated from the Department of Sculpture, College of Art and Design, Musashino Art University. He mostly makes installations. He is also active in making and playing theaters as "Tanaka Sushi Robot" of the comedy unit "Son-takz". He joined exhibitions such as The 21st "1_WALL" Graphics Competition Grand Prize Winner "Yoshiki Tanaka Exhibition: What's the color of seagull God's eyes like? The curiosity is killing me!" (Gardian Garden, Tokyo, 2020), "The 23rd Taro Okamoto Award for Contemporary Art (TARO Award)" (Taro Okamoto Memorial Museum, Kawasaki, 2020), "The 14th Gunma Biennale for Young Artists 2019" (The Museum of Modern Art, Gunma) and etc. He is the winner of Grand Prize at The 21st "1_WALL" Graphics Exhibition" (2020).

関連イベント

プロジェクト

キックオフトーク [2020年12月収録・配信]

司会・進行 小川希
 出演 Vol.1 田中義樹、角能秀美 (児童養護施設子供の家)
 Vol.2 齋藤春佳、橋本一郎 (亜細亜大学 客員准教授 *) *2020年12月当時
 Vol.3 大木裕之、相川良子 (NPO 法人ピアサポートネットしづや 理事長)
 手話通訳 橋本一郎、飯塚佳代、加藤裕子、穂積美沙子
 撮影・編集 梶山紘二



クロストーク [2021年7月から順次収録・配信]

司会・進行 小川希
 出演 Vol.1 齋藤春佳、Vol.2 和田夏実、Vol.3 大木裕之
 Vol.4 齋藤環、Vol.5 田中義樹
 手話通訳 橋本一郎、飯塚佳代、加藤裕子、穂積美沙子
 撮影・編集 阪中隆文



アトリエビジット [2022年6月から順次収録・配信]

司会・進行 小川希
 出演 大木裕之、齋藤春佳、田中義樹
 手話通訳 橋本一郎、飯塚佳代、加藤裕子、穂積美沙子
 撮影 阪中隆文、飯川雄大
 編集 阪中隆文
 録音・整音 和田昌宏



展覧会

「ゲストを招いたトーク」

日時 2022年10月16日(日) 14:00 - 16:00
 ゲスト 伊藤亜紗 (東京工業大学 教授)
 司会・進行 小川希
 手話通訳 橋本一郎、加藤裕子

日時 2022年11月3日(木・祝) 14:00 - 16:00
 ゲスト 樺澤環、齋藤春佳
 司会・進行 小川希
 手話通訳 橋本一郎、加藤裕子、穂積美沙子

「ギャラリートーク with Artist & ぺちゃくちゃタイム」

日時 2022年10月22日(土) 16:00 - 18:00
 ゲスト 相川良子 (NPO 法人ピアサポートネットしづや 理事長)
 石川隆博 (NPO 法人ピアサポートネットしづや)
 大木裕之

司会・進行 小川希
 手話通訳 飯塚佳代、穂積美沙子

日時 2022年11月23日(水・祝) 14:00 - 16:00
 ゲスト 角能秀美 (児童養護施設子供の家)、田中義樹
 司会・進行 小川希
 手話通訳 橋本一郎、穂積美沙子

日時 2022年12月4日(日) 14:00 - 16:00
 ゲスト 橋本一郎 (亜細亜大学 特任准教授)、齋藤春佳
 司会・進行 小川希
 手話通訳 飯塚佳代、加藤裕子



「映像ガイド」

出演 樺澤環、久保かな子、田村彩七、本江優貴
 声・字幕 岡島珠実、村上諒、山口珠生
 撮影・編集 阪中隆文
 録音・整音 小山友也

映像:

「大木さん鍋囲む」

「田中さん『子供の家』でワークショップ」

協力 NPO 法人ピアサポートネットしづや、児童養護施設子供の家

撮影・編集 阪中隆文

テキスト・字幕 竹野如花 (東京都渋谷公園通りギャラリー)



舞台『山羊は手紙を待ちながら』

出演 そんたくズ (田中寿司ロボット、ベトロスター井上)

音響・照明 南壽イサム

公演日時 10月8日、9日、23日、30日 | 14:00-、16:00-、18:00-

10月16日 | 12:00-、18:00- ★

11月5日、12日、19日、26日 | 14:00-、16:00-、18:00-

★手話通訳付き

手話通訳 橋本一郎、田中結夏、村上諒

11月23日 | 12:00- ★、18:00- ★
 12月4日 | 12:00-、18:00- ★
 12月17日、18日 | 14:00-、16:00-、18:00-



謝辞

本プロジェクト及び展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。(順不同／敬称略)

小川 希 (Art Center Ongoing 代表)	児童養護施設 子供の家 角能秀美
大木裕之 齋藤春佳 田中義樹	7名の子どもたち 子供の家職員
NPO 法人 ピアサポートネットしぶや 相川良子 石川隆博	浦野むつみ atelier couka
A・N M・S S・T	阪中隆文 森 ゆうな
岩間文孝 鈴木昌平 森 隆太郎	飯塚佳代 加藤裕子 穂積美沙子
橋本一郎	榎本トオル (デフ・パペットシアター・ひとみ) 吉村衣世 (デフ・パペットシアター・ひとみ)
井岡龍陽 樺澤 環 久保かな子 田村彩七 藤原直斗 本江優貴	



わたしからあなたへ、あなたからわたしへ

レター/アート/プロジェクト「とどく」展

[プロジェクト]

ディレクション：小川希（Art Center Ongoing 代表）

企画担当：竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー）

参加作家：大木裕之（映像作家、現代美術家）

齋藤春佳（美術作家）

田中義樹（美術作家）

協力施設・協力者：NPO法人ピアサポートネットしぶや

児童養護施設子供の家

橋本一郎（亜細亜大学 特任准教授）

広報物デザイン：トール至美

手話通訳：橋本一郎、飯塚佳代、加藤裕子、穂積美沙子

映像撮影・編集：阪中隆文

[展覧会]

キュレーション：小川希

企画担当：竹野如花

会場施工：株式会社佐塚商事 奥多摩美術研究所

作品輸送・展示：ヤマト運輸株式会社

額装：額縁工房片隅（齋藤春佳作品）

広報物デザイン：トール至美

イラスト：多田玲子

広報物印刷：株式会社山田写真製版所

写真撮影：阪中隆文

展覧会記録動画：阪中隆文、小山友也

[カタログ]

監修：小川希

企画・編集：竹野如花

編集統括：西岡一正

執筆：相川良子、井岡龍陽、石川隆博、大木裕之、小川希、

角能秀美、樺澤環、久保かな子、齋藤春佳、

鈴木昌平、竹野如花、田中義樹、田村彩七、

永井玲衣、橋本一郎、藤原直斗、本江優貴

（五十音順）

翻訳：野島優一

デザイン：トール至美

イラスト：多田玲子

漫画：パピヨン本田

写真撮影・提供：飯川雄大（p.39、p.42-48、p.50、p.129、p.138-139）

齋藤春佳（p.57-59、p.88-89）

阪中隆文（p.11、p.14-15、p.19、p.61-83、p.114、p.140、p.143）

田中義樹（p.53-54、p.88-89）

東京都渋谷公園通りギャラリー（p.5、p.140-141）

印刷：三永印刷株式会社

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団

東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行日：2023年2月27日

From me to you, from you to me

Letter / Art / Project "TODOKU" Exhibition

[Project]

Direction: OGAWA Nozomu (Director of Art Center Ongoing)

Coordinator: TAKENO Yukika (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Artists: OKI Hiroyuki, SAITO Haruka, TANAKA Yoshiki

Cooperation: Nonprofit Organization "Peer Support Net Shibuya",

Social welfare service corporation "KODOMONOE",

HASHIMOTO Ichiro (Asia University)

Publication Design: TOWLE Yoshimi

Sign Language Interpreter: HASHIMOTO Ichiro, IIZUKA Kaya,

KATO Yuko, HOZUMI Misako

Video Shooting and Editing: SAKANAKA Takafumi

[Exhibition]

Curator: OGAWA Nozomu

Exhibition Staff: TAKENO Yukika

Venue Construction: SATSUKA, Inc. The Institute of Art, Okutama

Transportation and Installation: Yamato Transportation Co., Ltd.

Framing: KATASUMI

Publication Design: TOWLE Yoshimi

Illustration: TADA Reiko

Publication Printing: Yamada Photo Process Co., Ltd.

Photos: SAKANAKA Takafumi

The video recording of the exhibition: SAKANAKA Takafumi, KOYAMA Yuya

[Catalogue]

Editorial Supervision: OGAWA Nozomu

Planning, Editing: TAKENO Yukika

Editing Direction: NISHIOKA Kazumasa

Texts: AIKAWA Yoshiko, IOKA Ryu, ISHIKAWA Takahiro, OKI Hiroyuki,

OGAWA Nozomu, KADONO Hidemi, KABASAWA Tamaki,

KUBO Kanako, SAITO Haruka, SUZUKI Shohei, TAKENO Yukika,

TANAKA Yoshiki, TAMURA Ayana, NAGAI Rei, HASHIMOTO Ichiro,

FUJIWARA Naoto, HONGO Yuki

Translation: NOJIMA Yuichi

Design: TOWLE Yoshimi

Illustration: TADA Reiko

Manga: Papillon Honda

Photographer and courtesy: AIKAWA Takehiro (p.39, pp.42-48, p.50, p.129, pp.138-139)

SAITO Haruka (pp.57-59, pp.88-89)

SAKANAKA Takafumi (p.11, pp.14-15, p.19, pp.61-83, p.114, p.140, p.143)

TANAKA Yoshiki (pp.53-54, pp.88-89)

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery (p.5, pp.140-141)

Printed by: Sanei Printery Co., Ltd.

Published by: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date: February, 27, 2023

©2023 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

からこ!!!

2021.1.30

学生生活はありますか？
活かすのがたのしみ

入ったいました。たわいのない手紙の
一葉の
紹介をします。viviなあ

最近のことは何
魚がつつくと
思っています!

自分も絵を描
一緒に描いてお

運動部にやるかまよ
かりにめろろしてすめま

くまの絵を
描いてほしい



東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

今年の10月から
展覧会をしま



マンガは

Background text in Japanese, including phrases like 'この時代に生きていること', '幸せにくれること', '誰かのために', '自分も絵を描', '一緒に描いてお', '運動部にやるかまよ', 'かりにめろろしてすめま', 'くまの絵を', '描いてほしい', 'えをか'.